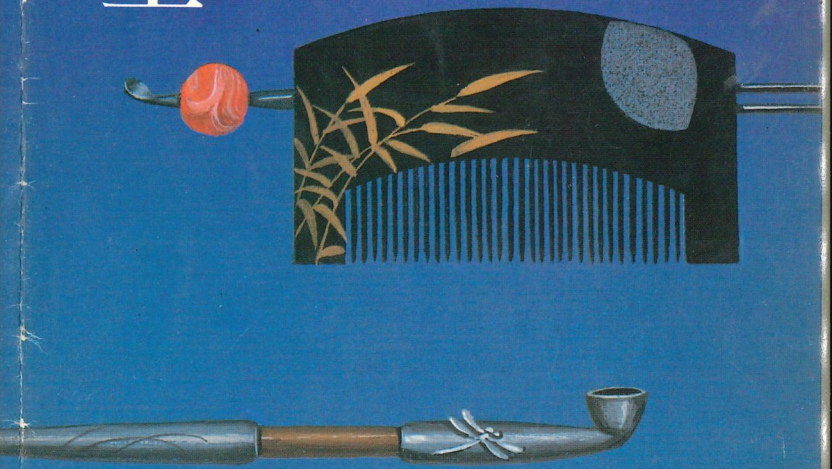
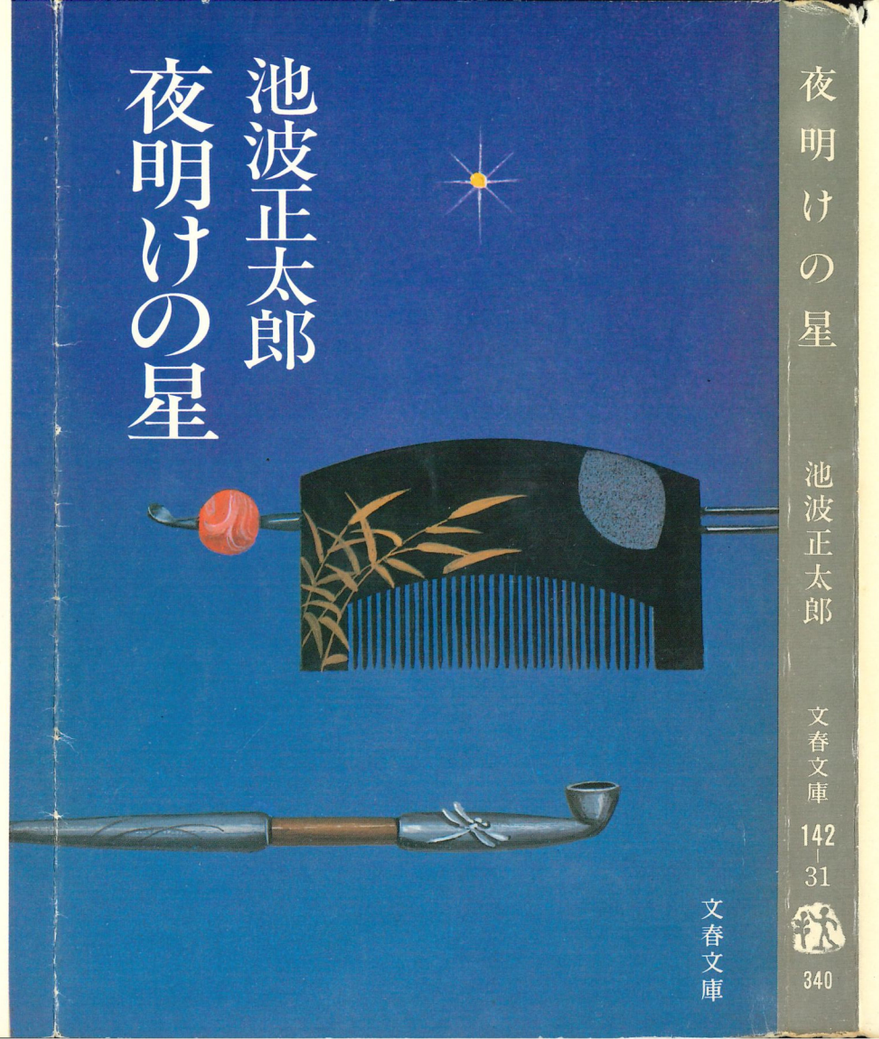
池波正太郎
夜明けの星



文春文庫

著者紹介

池波正太郎（いけなみ・しょうたろう）
大正12(1923)年、東京に生れる。昭和30年東京都職員を退職し、作家生活に入る。新国劇の舞台で多くの戯曲を発表し、35年第43回直木賞を「錯乱」によって受賞。52年第11回吉川英治文学賞を「鬼平犯科帳」その他により受賞する。作品に「剣客商売」「その男」「真田太平記」〝必殺仕掛人〟シリーズなど多数。



夜明けの星
池波正太郎
文春文庫
142-31
340

父の敵をさがす浪人・辰蔵は、飢えのあまり煙管師（きせるし）を斬殺してしまう。母を早く亡くした煙管師の一人娘・お道は十三歳にして天涯孤独となった。幾星霜―闇の世界の必殺仕掛人となった男は凄絶な半生を、女は大店の内儀となり幸せな道を歩む。夢魔のような一瞬が決めた二人の運命のふしぎなもつれあいと廻り合わせを沁々と描く。

文春文庫

ISBN4-16-714231-7 C0193 ¥340E　定価340円

文春文庫
池波正太郎の本

鬼平犯科帳 (一)~(十六)
蝶の戦記 (上)(下)
おれの足音 大石内蔵助 (上)(下)
火の国の城 (上)(下)
幕末新選組
忍びの風 (一)~(三)
剣客群像
忍者群像
仇討群像
その男 (一)~(三)
旅 路 (上)(下)
夜明けの星
池波正太郎・鬼平料理帳
雲ながれゆく
乳 房

カバー・北澤知巳

文春文庫

夜明けの星

池波正太郎

文藝春秋

夜明けの星

池波正太郎

文春文庫

文春文庫

夜明けの星

池波正太郎

文藝春秋

夜明けの星・目　次

夢　魔……7
豪　雨……44
若松屋お徳……68
玉子焼……125
土蔵の中……158
若松屋お道……181
歳　月……214
雪の朝……248
橋の上……260
星の瞬き……271

夜明けの星

夢　魔

一

後になってのことだが……。
その瞬間の自分を、堀辰蔵（ほりたつぞう）は、
（おれではない。あのときのおれは、別の男だ……）
としかおもえなかった。
（何故、あのようなことになってしまったのか……）
わからぬ。
どうしても、わからぬ。

だが、まぎれもなく堀辰蔵は、あの男を斬った。
ただ一太刀、あびせただけだが、おそらく相手は息絶えてしまったろう。
（おれが斬ったのだ）
このことであった。
血飛沫をあげて倒れた相手を見て、
（し、しまった。とんでもないことをしてしまった……）
どこを、どのように逃げたのか、よくおぼえていない。
斬った男の家を走り出たとき、背後で女の叫び声がきこえたような気もする。
我にかえったとき、辰蔵は、葦の原の中で仰向けになっていたのだ。
夏の夜の闇が重くたれこめてい、空に赤い月が浮いている。
このあたりは、
「十万坪」
と、よばれていて、深川の外れの埋立地である。
享保のころに、深川の商人たちが幕府へ願い出て許可を受け、十万坪築地の新田開発をしたもので、ゆえに、
「千田新田」
ともよばれているが、人家は、ほとんどなく、田畑も少ない。
いちめんの、荒涼とした葦の原に松林が点在するといった景観で、これが、江戸の材木商があつまっている深川の木場の、すぐ近くにあるとはおもえぬほどであった。
（なんということだ。おれは、父の敵を討つ身でありながら、人の……人の敵になってしまった……）
のである。
このところ、食物らしい食物を口にしていなかったし、むろん、ふところには一文の銭すらなかった。
棲む場所もなく、寺の本堂の縁の下で、寝たり、木場の材木置場で夜をあかすことも、辰蔵にはめずらしくない。
今日の夕暮れどきに、堀辰蔵は、深川の入舟のあたりを、ふらふらと歩いていた。
深川という土地には、掘割や運河が縦横にめぐっている。
江戸ではあっても、その都心とは大川（隅田川）をへだて、江戸湾の汐の香りに包まれた水郷といってよい。
むかしの江戸には、イタリアのベネチアのような町が存在していたのだ。
入舟町の、掘割を前にした小さな家で、煙管師が仕事をしているのを辰蔵は見た。
夏の夕暮れのことで、あたりはまだ薄明るい。
小道に面した戸を開け放った仕事場で、中年の煙管師が銀煙管に細工をしているのを見たとき、
（そうだ。この人に、父の形見を引き取ってもらおう。いくらでもいい。三日か四日、食いつ

なぐことができたら……）

父の形見も、銀煙管であった。

なんでも、父に目をかけていてくれた上役からもらったのだそうで、

「京の、後藤何とやらいう名工の作だそうな」

父は、この銀煙管を自慢にして、大切にあつかい、正月とか、盆まつりのときとかに出して煙草を吸うが、ふだんは戸棚の奥へしまいこみ、別の安物の煙管をつかっていた。

小さな銀煙管だが、蜻蛉が一つ、精妙に刻り込まれて、辰蔵の目にも、

（みごとな……）

と、見てとれる。

いまの辰蔵が身につけているものといったら、汗と脂と埃に汚れつくした帷子と、これも父の形見の無銘の大刀一振のみで、差しぞえの脇差は、すでに売りはらってしまった。

「もし……もし……」

近寄って、辰蔵が声をかけても、煙管師は見向きもせぬ。

細工に打ち込んでいる職人の姿であった。

「もし……いささか、たのみが……」

「何の御用で？」

ちらりと辰蔵を見たが、また細工台へ顔を押しつけるようにして、細くて小さな鏨をつかいながら、

「いま、いそがしいので……」

「手間はとらせない。この……この煙管を引き取っていただけまいか？」

煙管師は、もう、辰蔵を見ようともせずに、

「私は、そんなことをしていませんのでね」

「たのむ」

「他へ行ってみておくんなさい」

「見てくれ、これだ。みごとな細工だとおもうが……」

だが、見てもくれなかった。

堀辰蔵が、煙管師との会話でおぼえていたのは、そのあたりまでだったろう。

おそらく煙管師も、熱中している仕事の邪魔をされたので、強い口調になったのであろう。

悪いといえば、何から何まで、辰蔵が悪かったのだ。

しかし、それから二言三言、煙管師と言葉をかわしていて、突然、堀辰蔵は逆上してしまった。

飢えて、疲れきって、狂い犬のようになる一歩手前のところで懸命に堪えていただけに、素っ気ない煙管師の態度と言葉に我を忘れ、

「うぬ!!」

小道から仕事場へ飛びあがりざま、いきなり辰蔵が抜き打った。

身分の低い足軽の子に生まれた堀辰蔵だが、越後・新発田の城下に道場をかまえていた一刀

流の津山作之介の許で修行を積んだ辰蔵の一刀は、屈み込んで細工をしている煙管師の頸すじを深く切り割った。

「ぎゃあっ……」

煙管師の悲鳴と血飛沫だけは、耳と目におぼえている。

あとは、無我夢中で逃げた。

(もう、だめだ。みんな、だめになってしまった……)

父の敵を討つために故郷を出てから、もう十六年になる。

当時、二十三歳だった辰蔵は、間もなく四十になろうとしている。

今日、殺害してしまった煙管師は、辰蔵より三つ四つ年上であったろう。

辰蔵の父・堀吉兵衛は、越後・新発田五万石、溝口家の足軽であった。

足軽は、最下級の武士といってよい。

新発田城下の、土間と二部屋のみの足軽長屋で、辰蔵は育った。

母は、辰蔵が十八歳になった夏のころ、病死してしまい、その後も父は、再婚をしなかった。

父と二人だけの暮しが五年もつづいた。

この父子は、まことに仲がよかった。

父の吉兵衛は、

「そろそろ、お前に嫁をもらって、わしは隠居をしたいものだ」

などと、いい出すようになって間もなく、父は、同じ新発田藩の足軽・加藤甚作に殺害された。

理由は、いまもって、よくわからぬ。

その少し前に、足軽たちの寄り合いがあったとき、酒に酔った加藤甚作を、堀吉兵衛がつかまえて、何やら強い口調で叱っているのを見た者は何人もいる。

いるが、しかし、それだけのことで、加藤甚作が吉兵衛を殺したともおもわれぬ。

甚作は当時、二十六歳で、酒は強いが、のめばのむほどに陰気になる酒で、平常も無口な男であった。

加藤甚作も幼時、母を亡くしていた。

だが、加藤の父の彦七は後妻を迎え、二人の子をもうけている。

加藤彦七が病死した後、父の跡をついだ甚作は、義母と腹ちがいの妹二人と共に足軽長屋で暮していたのだ。

甚作は、辰蔵の父を殺すと、その足で新発田城下から脱走し、行方知れずとなった。

甚作の義母は、二人のむすめを連れて、新発田城下から四里ほどはなれた田貝村の実家へもどった。

女たちだけに、藩庁の咎めもなかったのである。

藩庁では、脱走した加藤甚作の捜索をはじめたが、間もなく打ちきりになってしまった。

「身分の低い足軽どうしの喧嘩……」

ということで、この事件を、藩庁は重く見なかった。

辰蔵にとっては、いまだに、それがくやしくてならぬ。

こうなれば、辰蔵自身が加藤甚作を見つけ出して、父の敵を討たねばならなかった。
それでなくては、父の跡をついで藩の足軽になることもできなかった。
それが、武家社会の掟である。
申すまでもなく、そのころは、徳川将軍の下に、諸大名がそれぞれの領国を統治していたわけだから、A国の殺人犯人が他国の領内へ逃げ込んでしまえば、これをA国の藩庁が追いかけるわけにもまいらぬ。
つまり、当時の日本には、無数の国境が存在していたのだ。
そこで、
「殺された者の肉親が犯人を追って行き、死者の敵を討つ」
ことが、不文律の制度としてみとめられた。
ゆえに、討たれた者の恨みをはらすことのほかに、殺人犯人へ制裁をあたえるという意味がふくまれている。
それにしても……。
堀辰蔵は、十六年も、父の敵を探しつづけてきた。
この間、手がかりもつかめなかった。
敵の加藤甚作も、四十二歳になっているはずだ。
(おれが殺した、あの煙管師にも、子がいたろうか……いや、いるにちがいない)
葦の原に身を横たえたまま、辰蔵は起きる気力も失せていた。

喉が乾いて、灼けつくように痛む。
それなのに、水をのむことさえ忘れて、辰蔵は泥沼へ引きずり込まれるような眠りの底へ落ち込んでいった。

二

煙管師の源助には、まさに、子がいた。
ひとりむすめのお道で、このとき、十三歳であった。
お道は、堀辰蔵が自分の家の前へあらわれる少し前に、
「お父つぁん。豆腐を買ってくる」
細工に熱中している父親の背中へ声を投げ、台所から裏手の細道へ出て行った。
お道の母親・お茂は、一昨年の冬に風邪をこじらせたのがもとになって、呆気なく世を去っている。
そのとき、父親の源助は四十をこえたばかりだったので、
「後妻をもらったら……」
知り合いの人びとが、しきりにすすめたけれども、
「滅相もない。お道も十をこえました。子供といっても、そこは女です。女と女にぶつかられては、こっちの立つ瀬がありませんよ」

源助は、耳を貸そうともしなかった。
お道は、うれしかった。
父親が、あのときほど立派で、男らしく見えたことはない。
（お父つぁん。ありがとうね。ちがったお母さんなんか、あたしいらない。そのかわり、死んだお母さんのかわりになって、いっしょけんめいに内のことをやるからね）
お道はお道なりに、非常の決心をしたつもりだ。
死んだ母親は、
「いまのうちからやっとかないと、お前が嫁に行くまでに間に合わないからね」
こういって、お道が八つになると、飯の炊き方も教えたし、縫い物の手ほどきもしてくれた。
それが、間もなく役に立とうとは、おもいもかけぬことであった。
少女のお道がすることゆえ、気に入らぬこともあったろうが、
「旨えよ。よくできた」
と、源助は、お道がこしらえるものを何でも食べてくれたし、
「まるで、お母さんが生き返ったようだ」
たのしげに、目を細めた。
そのとき、お道は細道から富岡八幡宮の門前町の一角へ出て、参道を突っきり、山本町の横道の豆腐屋で豆腐を買った。豆腐は、濡れ布巾を敷いた笊に入れてもらった。
家にある大鉢へ冷たい水をたっぷりと張って豆腐を入れ、父親が大好物の蜆汁をこしらえるつもりだったのである。
夕闇が淡くただよう八幡宮の参道は、さすがに日中の雑沓もなく、そのかわり、たちならぶ料理屋の二階には早くも灯が入って、座敷女中がせわしげにうごくのが見えた。
「あっ……」
横町から走り出て来た女が、お道を見つけて叫び声をあげた。
この女は、となりの酒屋の女房で、
「あ……ああ、お道っちゃん……」
いきなり、飛びつくようにしてお道を抱きしめ、
「おどろいちゃあいけない。いいかえ、おどろいちゃあいけないよ」
泣き声でいった。
「どうしたの、おばさん……」
「し、しっかりしとくれよ、いいかい」
「いったい、何なのさ？」
「となりで……お前さんのところで、妙な物音がきこえたものだから、気になって、台所から中へ入ってみると、お父つぁんが……お前のお父つぁんが……」
お道は、物もいわずに横町へ駆け込んで行った。
何が何だかわからなかったけれども、父親の身に異変が起ったらしいと直感した。
家の表にも裏にも、飛び出して来た近所の人たちがあつまり、あわただしくうごきまわって

いる。

「あっ、帰って来た、帰って来た」

だれかが、路地へあらわれたお道を見て叫んだ。

お道は、豆腐が入った笊を抱えたまま、台所から中へ飛び込んだ。

倒れている父親のまわりを囲んでいた近所の男たちが、何ともいえぬ目の色で、お道を迎えた。

息絶えた父親のまわりは、血の海であった。

立ちすくんだお道の手から笊が落ちた。

お道は、まるで火鉢の灰のような顔色になり、わなわなと小さな躰をふるわせている。

となりの酒屋のあるじが、うしろから、そっと、お道の肩を抱きかかえてくれた。

信じられなかった。

これが現実の光景だとは、到底、おもえなかった。

源助の死体の傍に、蜻蛉を刻り込んだ銀煙管が一つ落ちている。

それに、だれも気づかなかった。

煙管師の仕事場に、煙管があったところで、別にふしぎではないからであろう。

源助を殺して逃げた犯人への怒りの声が、近所の人たちの口から洩れはじめた。

酒屋のあるじに抱かれている、お道の躰が、急に、ぐったりとなった。

「あ、いけない」

お道は、気を失ってしまった。

そのとき、表のほうで、

「黒江町の親分が見えなすった」

という声がした。

ここからも程近い黒江町に住む御用聞きの佐吉が知らせを受けて駆けつけて来たのである。

三

お道は、間もなく気がついた。

しかし、茫然としている。

御用聞きの佐吉は、近くの黒江町に住んでいるだけに、殺された源助から直接に煙管を買ったこともあり、お道を見知っていた。

「だれも、中へ入れちゃあいけねえ」

手先の紋次へいいながら、佐吉は、ちらりとお道を見やり、眉をひそめた。

お道には、となりの酒屋の女房おきねがつきそっていたが、

「ちょっと……」

と、佐吉がおきねを台所へさそって、

「おかみさん。お前のところで、お道をあずかっておくれ」

「ようござんすとも」
これから町奉行所の同心が出張って来て、源助の死体の検死がおこなわれる。
その間、お道がこの場所にいるのは、
（よくない……）
と、おもったからである。
二間きりの、小さな家であった。
源助は、道に面した仕事場で殺されてい、あとは六畳間が一つきりで、台所へつづく。
「お道っちゃん……」
おきねが、父親の遺体の前へ坐り、その死顔を泪ぐんで見つめているお道の傍へ行き、
「ね……」
何か、ささやいた。
お道はうなずき、おきねに抱えられて台所へやってきた。
その、か細い肩へ手を置いて、御用聞きの佐吉が、
「何か、食べさせておもらいよ」
やさしく、いった。
お道は、泪のたまった眼を佐吉へ向けたのみだ。
「さ、お道っちゃん……」
酒屋の女房が、お道を抱くようにして台所から裏手の路地へ出ると、そこに詰めかけていた

近所の女房たちは、もらい泣きの声をあげた。
死体の傍へもどって来た佐吉へ、手先の紋次が、
「あの子は強えや、親分。泣き声もあげませんでしたよ」
「ふむ……」
「それでも、泪をためていたっけ」
「当り前だ」
「ともかくも、しっかりしたもので」
「しっかりも何も、いまは、あまりにおもいがけねえことが起ったものだから、気が抜けているのだ」
「へえ……」
「あの子が正気になったら尋ねるつもりだが、その前に、近所の人たちから、死んだ源助さんの身寄りの人がいるかどうかを尋いてこい。いるなら、急いで知らせなくてはならねえ」
「さっき、ちょいと尋いてまわりましたが、あまり身寄りはなかったようですぜ」
「そうか。源助さんは、こしらえた煙管を何処へ納めていたのだ？」
「そりゃあ、もうわかっています。銀座一丁目の煙管問屋・丹波屋儀兵衛へ納めていたというので、すぐに勘七を走らせました」
「そうか……」
勘七というのは、これも佐吉の手先をつとめている若い男だ。

「それにしても、ひでえことをしやがる」
と、紋次が源助の死顔を見やって、
「いってえ、何のつもりで、こんなことをしやがったのか……畜生め。殺した奴は、きっと探してやる」
つぶやくのへ、佐吉が、
「おい、紋次」
「へ……？」
「そこに煙管が落ちている。こっちへ、よこしてみねえ」
「これですか……」
「うむ」
受け取った佐吉が、
「血が、少し、ついているな……」
押しころしたような声で、ひとり言をいった。
「血が、ね……」
「ここだ」
「なるほど」
「源助が殺されるとき、細工をしていたのは別の煙管だ。それは、ほれ、あそこにある」
「へえ……」

「源助は煙管師だ。自分の手で煙管の細工をしているのだ。こんな古い銀煙管が此処にあるのもおかしい」
「この煙管は、いい細工でござんすねえ、親分。蜻蛉が一匹、とまっていやがる」
「源助の細工ではねえ。これだけは、たしかなことだ」
「ですが、親分。この煙管を、源助さんは自分の仕事に役立てていたのでは？」
「お前、となりの酒屋に、お道がいるから、この煙管を見せて尋いて来い」
「承知しました」
「まだ、正気でなかったら、後にするがいいぜ」
「へい」
紋次は、銀煙管を手に、裏から出て行った。
風も絶えた、蒸し暑い夜になった。
せまい家の中に、血の匂いがこもっている。
御用聞きの佐吉の顔も躰も、べっとりと汗に濡れていた。
「おい、だれか……」
と、佐吉が、表の道に顔をあつめている近所の人たちへ、
「だれか、蚊遣りを焚いてくれねえか。こうひどくては、どうしようもねえ」
「へい、すぐに……」
と、だれかが、こたえた。

佐吉は、そこにあった団扇を取り、横たわっている源助の傍へ屈み込み、蚊を追いはらった。

土地の人たちが、

「黒江町の親分」

と、よんでいる佐吉は、まだ、三十をこえたばかりだが、土地の信頼も厚いし、町奉行所での評判もよい。

佐吉の亡父・富五郎も、深川に住む御用聞きであった。

御用聞きは、町奉行所の手先（刑事・探偵）となってはたらく。しかし、奉行所に属しているわけではない。

奉行所の与力や同心たちの組屋敷が八丁堀にあるので、俗に、これらの警察官を、

「八丁堀」

と、よぶわけだが、御用聞きは、どこまでも、この八丁堀の下部組織として自在の活動をする。

手当も出るには出るが、

「そんなものは、下女奉公の一年の給金にもおよばねえ」

とかで、ほとんど身銭を切って、お上の御用にはたらくのが建て前である。

それだけに、十手に物をいわせ、陰へまわって悪辣なまねをする御用聞きも少なくない。

けれども、黒江町の佐吉のような御用聞きもいないではない。

それは先ず、欲得なしに、

「世の中のために、はたらく」

という生甲斐があるからで、自分の手先の面倒を見て、はたらかせながら、捜査の費用も自分のふところから出すことが多い。

なればこそ、土地の信頼も大きいのであろう。

佐吉のような御用聞きは、かならず、別に職業をもっている。

たとえば佐吉の場合、女房のおさわに、富岡八幡宮・参道の、一ノ鳥居の南側で〔万常〕という料理屋を経営させている。

この料理屋も、先代ゆずりのものであった。

八幡宮のまわりには、江戸でもそれと知られた料理屋が少なくない。

その中で〔万常〕は、店構えは小さくとも、先代のころから、腕のよい料理人が絶えず、小体は小体なりに繁昌をしている。

こうした背景があればこそ、佐吉は欲得ぬきで、はたらけるのであろう。

「親分……」

よびかけつつ、手先の紋次がもどって来た。

「どうした？」

「お道は、この煙管に見おぼえがねえそうです」

「そうか……」

「仕事場の掃除を毎日しているし、爪楊子一つ落ちていたって目につくといってます」

「ふうむ……」

佐吉は、紋次から受け取った銀煙管を凝と見つめた。

（もしやして……？）

この銀煙管は、源助を殺害した犯人が落していったものではあるまいか……。

四

熱くて、ひどく臭い液体を顔へ注ぎかけられ、堀辰蔵は、

「あっ……」

おどろいて、目がさめた。

「わは、はは……」

「おどろきゃあがった。おどろきゃあがったよ、おい」

「まるで、小便漬けの狢だ」

葦の原に寝ていた辰蔵のまわりを、四人の男が取り囲むようにして、そのうち二人が裾をまくり、眠りこけている辰蔵の顔へ尿をかけたのである。

三人が浪人ふうの男で、一人は、このあたりに住む漁師のような風体で、この男はつるつるに禿げあがった頭へ手ぬぐいの捩り鉢巻をしている。

はね起きた堀辰蔵は、腰の刀に手をやって、

「あっ、おのれ……」

と、叫んだ。

辰蔵の大刀は、禿頭の漁師が奪い取り、これを抱えていた。

こうしておいて、いたずらをしかけたのである。

目がさめたときの辰蔵は、煙管師殺しの追手がかかったのだとおもい、はね起きたのだ。

四人の男たちの尿をあびたことに気づいたのは、それからであった。

しかも、相手は追手でもないらしい。

「おのれ、よくも……」

辰蔵は怒った。

辰蔵も、武士の端くれだ。この屈辱を黙っているわけにはいかない。

しかし、相手を打ち倒すための得物を奪われてしまっている。

またしても、四人が嘲笑した。

ほかには人の気配もない、深川十万坪の葦の原であった。

「刀を返せ!!」

「あは、はは……」

「返さぬか!!」

両腕を突き出して、禿頭の漁師へせまる辰蔵へ、

「ほれ、ほれ、こっちだ、こっちだ」

憎々しげに辰蔵をからかいながら、漁師が逃げる。
「卑怯!!」
喚いて、漁師へ走りかかる辰蔵の脚を、横合いから浪人のひとりが蹴りつけた。
よろめき、倒れかかった辰蔵が身を転じ、その浪人へ摑みかかった。
「こいつ、生意気な」
浪人は、せせら笑いつつ、辰蔵を突き飛ばそうとした。
ところが、
「うわ……」
投げつけられたのは、浪人者のほうで、辰蔵は、その男へ飛びかかりざま、こやつの腰から脇差を引き抜いていた。
曲者どもは、一瞬、おどろいたようだ。
鞘も禿げかかった大刀一つを腰にしたまま、こんな場所で、死んだように眠りこけていた浪人が、これだけのはたらきを見せようとはおもわなかったにちがいない。
辰蔵に投げつけられた浪人が、あわてて飛び起きるのと同時に、別の一人が大刀を抜き、
「死ねい!!」
辰蔵の左側面から切りつけてきた。
ぱっと、辰蔵の体がひらき、曲者の一刀は闇を切り裂いたのみだ。
あやうく踏みとどまり、向き直って刀を構え直そうとしたそやつへ、辰蔵が躍り込んだ。

「あっ……」
浪人は辰蔵の脇差に左腕を切り裂かれ、泳ぐようにして逃げた。逃げなければ、とても体勢を立て直すことができなかったろう。
「やめろ!!」
これまで、手を出さずに、凝と堀辰蔵を見まもっていた別の浪人が大声をあげた。
この浪人だけが、袴をつけている。
他の二人の浪人は着ながし姿であったが、いずれも、さっぱりとした単衣を身につけ、帯も新しい。
「よせ。むだだ。おぬしたちが怪我するだけだ」
と、袴の浪人がいった。
辰蔵は、この中年の浪人へ、
「ゆるさぬ」
「何……」
「先ず、刀を返せ」
「よいとも」
浪人が、自分の背中に隠れるようにしている漁師へ、
「返してやれ」
「へ……」

「こっちへよこせ。よこせというのだ」
「へい、へい」
右手に提灯を持っている浪人は、左手で漁師から受け取った大刀の柄のほうを辰蔵へ差し向け、
「さ、取れ。そのかわり、おぬしが手にしている脇差を返してやれ」
といった。
柄を辰蔵に向けて「取れ」といっているのだから、辰蔵が柄へ手をかけ、いきなり引き抜いて切りつけてくることも充分に考えられる。
それをわきまえていながら、このように落ちついている袴の浪人は、それだけ腕に自信をもっているらしい。
「さ、取らぬか」
うなずいた堀辰蔵は、浪人から大刀を左手に受け取ってから、右手の脇差を下へ置き、数歩退り、大刀を腰にした。
闇の中から浪人が走り出て、自分の脇差を摑み、飛び退いた。
「おい、ゆるせよ」
袴の浪人がいい、身を返して去ろうとした。
他の三人も、これにつきそって、辰蔵から離れようとしたとき、
「待て」

裾をまくり、これを帯へ差し込みつつ、堀辰蔵が、
「それで、すむとおもうのか。尿をかけた無礼はゆるせぬ。四人とも斬って捨てる」
いうや、ゆっくりと大刀を抜きはらった。
四人が振り向いた。
袴の浪人が、こういった。
「おぬし、金が欲しいのか？」

五

人間というのは、まったく、奇妙な生きものだ。
堀辰蔵は、浪人たちへ、
「尿をかけた無礼はゆるさぬ」
といい、刀を抜いて闘う決意をしめした。
何が、無礼だ。そうしたことを口にするだけの資格が辰蔵にあるのか……。
古い煙管を見ず知らずの男に買ってくれとたのみ、ことわられたというので、いきなり、相手を斬り殺して逃げた辰蔵なのである。
無礼といえば、これほどの無礼はあるまい。
いまの辰蔵は、それを忘れてしまい、相手の無礼に対し、一命をかけて闘おうとしている。

それほどならば、お上へ自首して出て、煙管師殺しの罪をいさぎよく裁いてもらうべきであろう。

それが、理というものだ。

けれども、人間は、理屈にたよって自分の悪徳を当然化したり、忘れてしまったりするのが得意な生きものなのだ。

何も、堀辰蔵ひとりがそうなのではない。

「金が欲しいのか？」

と、辰蔵にいった袴の浪人へ、

「先生。殺っておしまいなせえ」

禿頭の漁師が嗾けた。

「黙っていろ」

「へ……」

「どうだ。金がほしいかと尋いているのだ」

「欲しくない」

「ふうん……」

「そこの二人を出せ。おぬしに用はない」

「ほう」

「おれに尿をかけたのは、そこの二人だ。出て来い」

「この二人は、おぬしには、とてもかなわぬ」

「うるさい。出て来い」

辰蔵に尿をかけた二人の浪人は、尻ごみをしている。

大刀を手にした辰蔵へ、二人がかりで立ち向ったところで、

（とても、かなわぬ）

と、わかっているらしい。

「出ろ。出てこぬなら、こちらから行くぞ」

昨日の夜から何も食べていなかったし、喉の乾きで大声も出ぬほどであったが、愛刀を脇構えにして、じりじりとせまる堀辰蔵の気魄は凄まじい。

（ここで、斬死をしてもいい）

辰蔵の脳裡のどこかに、このおもいがただよっている。

（これから先、このようにして生きたところで、どうなる……）

父の敵を探し当てることについては、もう二、三年前から、辰蔵は絶望しかけていた。

亡父の新発田藩における身分は軽かったし、藩の江戸屋敷へ顔を出したところで、助けてくれる人もいない。

故郷に親類もいないではないが、いずれも、その日暮しをしているようなもので、はじめのうちは、たとえ少しずつでも助力をしてくれたが、故郷を出てから十六年も過ぎたいまでは、ほとんど音信も絶えてしまっている。

二十三歳で故郷を出た辰蔵は、いま三十九歳になってしまったのだ。
辰蔵は背をまるめ、刀を正眼に構え直し、右手の浪人へせまった。
その浪人は袴の浪人の背後へ逃げた。
「ゆるしてやってくれぬか、どうだ」
袴の浪人が前へ出て来て、
「金が要らぬというなら、酒でものもうではないか」
その言葉が終るか終らぬかのうちに、堀辰蔵は、袴の浪人へ斬りつけていた。
(斬った……)
と、おもった。
間合といい、打ち込みといい、充分の自信があった。
だが、それも一瞬のことであった。
袴の浪人の手から提灯が飛んだ。
地に落ちた提灯が葦の原で、めらめらと燃えあがったとき、堀辰蔵の躰が崩れるように伏し倒れている。
辰蔵の打ち込みを躱しざま、抜き打った浪人の一刀が辰蔵の胴を薙いだのである。
しかも、峰打ちだ。
すばらしい早わざといわねばなるまい。
「うわ、やった」

「さすがは、三井先生だね」
「ざまあ見ろ」
三井先生とよばれた浪人は、刀を鞘へおさめ、
「死んではいねえ」
「えっ……」
「峰打ちだ」
「何で、また……かまわねえから殺っつけましょう」
辰蔵に投げ飛ばされた浪人が大刀を抜き、
「こんな虫けら。生きていてもはじまりませんよ」
と、倒れている辰蔵へ、とどめを刺そうとした。
「待て」
「どうしてです?」
「担いで、塒へ連れて行こう」
「それから、どうします?」
「水をぶっかけて、小便の匂いを消してやろう」
「と、とんでもねえことだ」
「ま、いい。おれにまかせておけ。おぬしたちより腕は立つ。それはたしかなことよ。な、そうではないか」

二人の浪人は顔を見合わせて、沈黙した。
「おい、爺つぁん」
三井浪人が、葦の原の暗闇へ歩み出しながら、禿頭の漁師へ、
「背負ってやれ」
と、声を投げた。

六

堀辰蔵が気づいたのは、それから間もなくのことであった。
別に、水をかけられたわけではない。
袴の浪人が、活を入れたのだ。
そこは、深川の外れにある石置場のうしろの一軒家で、以前は、このあたりの百姓か漁師が住んでいたのであろう。
土間と、二つの部屋と、外に物置小屋が一つ。それだけの小さな家で、かなり古びている。
だが、家の中は案外、小ぎれいにととのえられていた。
気づいた堀辰蔵が、はね起きて腰へ手をやったが、大刀はなかった。
「おれの、刀を返せ」
と、辰蔵は叫んだ。

「ほれ……」
袴の浪人……いや、三井とよばれた浪人が傍にあった辰蔵の大刀を投げてよこした。
それを摑み取って、辰蔵が、
「ぶ、無礼な……」
「おい。もう、いいかげんにしろ」
「な、何……」
「おれたちの塒へ連れて来てやったのだ。今夜は泊って行け。いま、湯を沸かしているから行水でもつかうがいい」
「む……」
「怒るな。怒ったところではじまらぬよ。な、そうではないか」
物やわらかに、そういわれると、堀辰蔵は刀を抜く気力も失せてしまい、
「か、勝手にしろ」
そこへ、仰向けになった。
「ふてくされていやあがる」
浪人のひとりが、いまいましげにいった。
「ま、いい。そっとしておいてやれ」
と、三井浪人。
禿頭の漁師は、土間の竈で、大釜に湯を沸かしているらしい。

辰蔵は、両眼を閉じた。

一度に、疲れと飢えが襲ってきて、此処から出て行く気にもなれぬ。

二人の浪人は、向うの部屋で冷酒をのみはじめた。

開け放った縁側の向うから、汐の香をふくんだ風がながれ込んできた。

「おい、名前を聞かせぬか？」

三井浪人が、辰蔵の傍へ寄って来た。

（こやつは強い……）

と、辰蔵は肝に銘じている。

たとえ、自分の体力や気力が充実しているときでも、三井には勝てない。

三井浪人は辰蔵と同じように背丈が高く、骨張った躰つきなのだが、辰蔵が見ても、その筋肉は引きしまっていて、剣の修行もなみなみでなかったことがわかる。

頬骨の張った顔には、辰蔵などには、

（察しきれぬ……）

過去が秘められているようだ。

細い両眼が張り出した額の下へ埋め込まれたようで、眼のうごきがほとんどわからない。

「おい、名前をいえ」

「……」

「強情な男だな。おれは、お前の味方になってやろうというのだ。それが、わからぬか」

辰蔵は、こたえぬ。

もう、口をきくのさえ面倒になってきていた。

「おぬし、今日、何処かで人を斬ったのう」

この三井の声に、辰蔵がはっとして、おもわず目を開けると、三井が、こちらをのぞき込んでいる。

三井の眼が針のように光っていた。

「おぬしの刀を見せてもらった。血くもりがしているし、それ、その身にまとっている着物にも返り血がこびりついている」

「う……」

「そんな恰好で、外を歩けるものかよ。そうではないか」

「かまわぬ」

「何……？」

「ど、どうなってもかまわぬ」

「ふうん……」

「死にたい。おれは死んでしまいたい」

突然、わけもなく、堀辰蔵の両眼から、熱いものがふきこぼれてきた。

三井は、凝と見まもってから、

「死ぬ気になりゃあ、何でもできる」

と、辰蔵の肩を軽く叩いて、
「おれの名は、三井覚兵衛。まあ、おれにまかせておけ」
と、いった。
三井に名乗られては仕方もなく、
「堀、辰蔵……」
「そうか。よく名乗った。おぬしが、これまでにしてきたことは尋かぬ。おれも身性をはなさぬし、向うにいる二人もそうだ。だから安心をしろ。おれたちは昨日のことをおもい返したりはせぬし、明日の思案もない。今日いちにちがあるだけだ」
この男たちは、いったい何者なのだろう。
ただの浪人、漁師ともおもわれなかった。
湯を浴びた堀辰蔵へ、禿頭の漁師が握り飯を出してくれた。
腹は空き切っていたが、さすがに心得があって、辰蔵は、ゆっくりと飯を噛みしめた。
それを見やりつつ、三井覚兵衛が、
「死ぬ気になったおぬしゆえ、これよりは、死ぬつもりで生きることだ」
と、いう。
「死ぬつもりで……生きる……」
「うむ」
何となく、いまの辰蔵に、この三井の言葉は一つのちからをあたえたようだ。

「なればよ。何も怖いことはない。おれに身柄をあずけるがいい」
「あずけて、何をする？」
「善悪の境は、紙一重ということだ」
「……？」
「ちがうか？」
なるほど、そんなものかも知れぬ。
三井浪人の言葉が辰蔵の胸へ滲み透ってくるのが、ふしぎであった。
「堀さん。今夜は、ゆるりと眠るがいい」
三井覚兵衛は立ちあがり、三人の仲間へ、
「おい。たのむぞ」
と、辰蔵へ顎をしゃくって見せた。
「承知」
「心得ました」
二人の浪人がこたえる。
禿頭の漁師も、辰蔵への態度が、がらりと変って、
「あっしは、為吉と申しやす」
辰蔵へ名乗り、笑いかけてくるではないか。
三井覚兵衛は、

「明日、会おう」
辰蔵へ、こういって、三人に見送られ、この家から立ち去って行ったのである。
その後で、二人の浪人が、
「おれの名は、柳彦七」
「おれは、木村市太郎だ」
と、名乗り、
「いやあ、先刻はおどろいたよ」
「見すぼらしいおぬしが、あんなに強いとはおもわなかった。なあ、木村」
「さよう」
「その腕の強さに、これからは物をいわせることだな」
「そのとおり」
などと、これまた親しげにはなしかけてくる。
漁師の為吉は、薄い蒲団を敷きのべ、
「疲れていなさるようだ。さ、こっちへ来て、おやすみなせえ」
と、すすめる。
そうなると、もう欲も得もなかった。
「ごめん下され」
いうや、堀辰蔵が蒲団の上へ倒れ込むように寝た。

「あは、はは。よほど、疲れたとみえるわ」
「おもしろい男よ」
などと、浪人たちと為吉は別の部屋で、これからまた酒をのむつもりらしい。
(あの、三井覚兵衛という人は、別の場所に住んでいるらしい……)
おもううちにも瞼が重くなってきた。
いま、此処に寝ている自分が、
(まるで、おれではないような……)
おもいがしたのも一瞬のことで、たちまちに辰蔵は、深い眠りに引きずり込まれてしまった。
遠い夜空に、稲妻が疾った。

豪雨

一

お道は、台所で蹲り、息をころしていた。

急に、雲行きが怪しくなり、家の中は薄墨をながしたようになっている。

台所の向うは四畳半の茶の間で、その向うが、お絹の寝間であった。

その寝間で、お絹が喘いでいる。

女の喘ぎにまじり、男の声が、しきりに猥らな言葉を吐き散らしているのが、一間をへだてて台所にいる、お道の耳へも、はっきりときこえてきた。

お道は、両手で耳を塞いだ。

外へ逃げてしまうのは、わけもないことであったが、そんなことをしたら、男が承知をしない。

この前のとき、たまりかねて、お道が外へ出てしまったら、後になって男が、

「この家に奉公をしているのなら、私のいうことに逆らってはいけないといってあるはずだ」

いきなり火箸で、お道の腿のあたりを、ぴしぴしと打ち据えた。

そのときについた痣は、まだ消えていない。

男は、南八丁堀五丁目の薬種問屋の主人で、伊勢屋九兵衛という。

お絹は、伊勢屋九兵衛の囲い者で、この深川・大島町に小ぢんまりとした家を持たせてもらい、九兵衛は三日に一度ほど、ひそかに通って来る。

此処からも、さほどに遠くない入舟町の家で、お道の父親の煙管師・源助が殺されてから、もう一年が過ぎた。

犯人は、まだ、見つからなかった。

お道が、この伊勢屋九兵衛の妾宅へ下女として雇われてから、三月ほどになる。

九兵衛は四十がらみの、いかにも脂ぎった男で、

「あたしだってね、お道。あんな蟇蛙みたいなやつに抱かれたくはないんだけれど、……こうなったのも、よんどころない事情があってねえ」

と、いつだったか、お絹が洩らしたこともある。

九兵衛は、やって来ると、すぐさま寝間へ入り、お絹を全裸にしておいて、なぶりはじめる。

こうしたとき、下女などには小遣いでもあたえて、外へ出しておくのが当り前のことなのだが、九兵衛はちがった。

お道に、

「出て行ったら、承知をしない」
恐ろしい顔をしていう。
そればかりか、お絹を抱きながら、
「お道。早く来ないか、お道……」
と、よぶのである。
そして、寝間の一隅で震えているお道の前で、尚も、お絹をなぶりはじめる。
はじめのうちは、
「だ、旦那。そんなことを……」
お絹も顔色を変えて反対をしたのだが、九兵衛は聞きいれぬ。
そのうちに、お道に見られていることが一種の刺激にもなるのであろうか、しだいにお絹は夢中となって、よろこびの叫びをあげはじめる。
「ほんとうに、すまないねえ。でも、かんべんしておくれよ、お道。あたしを捨てて、何処かへ行っちゃあいやだよ」
九兵衛が帰ると、お絹は泪ぐんでいい、辞退するお道の手に小遣いをつかませてしまう。
小遣いが欲しくて辛抱をしているのではない。
お道は、お絹に好意をもっている。
だからこそ、いままで堪えてきたのであった。
お絹は、浅草の東本願寺・門前の水茶屋〔井村屋〕の茶汲女をしていた女だそうな。

深川へ囲われたとき、どうしても下女が必要なので、伊勢屋九兵衛が手をまわし、同じ深川の相川町で釣道具の店を出している清八の口ききで、お道が雇われることになった。
それまでのお道は、隣家の松次郎夫婦に引き取られ、酒屋の手つだいをしていたのだが、
(いつまでも、世話になっているわけにはいかない。何とか、はたらいて、女なりに身を立てないことには……)
と、おもいたったのである。
今年、十四歳になったお道は、早くから母親に死なれているだけに、気持ちだけは一人前の女といってよかった。
父親を殺した犯人への憎しみは、むろん、消えていない。
黒江町の御用聞き佐吉も、あれから懸命になって犯人を探してくれたが、どうしても、
「手がかりがつかめない」
と、いう。
犯人が残していったらしい銀煙管だけがたよりであった。
しかし、現代とちがって科学捜査が発達していなかった、約二百年も前のことだから、煙管一つではどうにもならなかった。
釣道具屋の清八は、お絹のことを、
「気だてのよさそうな女だから……」
と、いい、お道に奉公をすすめたのだ。死んだ父親の源助は、ほとんど、金を遺してはいな

かったが、源助が品物を納めていた銀座一丁目の煙管問屋・丹波屋儀兵衛が、
「亡くなったお父つぁんは、長らく、よい仕事をしてくれたから……」
こういって、金十両の香典を、お道へよこした。
十両といえば、一家族が一年を暮せるほどの金である。
お道は、これを、酒屋の松次郎夫婦へあずけてある。
丹波屋では、
「うちへ奉公に来たら……」
しきりに、すすめてくれたけれど、大店の女中としてはたらくことが、お道には何となく不安であった。
父と二人きりの暮しをつづけてきて、少女ながら、死んだ母親のかわりをつとめ、よくはたらきもしたが、そのかわり何事も自分のおもうままに取り仕切ってきて、気が強くなっているし、やさしかった父親の源助にも、
「お父つぁん。そんなことをしちゃあいけないよ」
などと、叱りつける口調にもなるほどで、それをまた、父親がよろこんでいるのだから、われ知らず、お道は、わがままになっているところもないではなかった。
そうした、お道の気性が囲われ者のお絹には好ましい。七つも年下のお道を、たのもしいとさえおもっている。
少女ながら、三度の食事の世話から縫い物まで渋滞もなくやってのけるのだから、これほど便利なことはない。
それに、何よりも、まだ十四歳のお道だけに、お絹も気がおけないのである。
「ねえ、いいかい。いつまでも私の傍にいておくれよ、お道。行末、きっと、わるいようにはしないからね」
これが、お絹の口ぐせになってしまっている。
お道もまた、居心地はわるくなかった。
ただし、伊勢屋九兵衛が姿を見せなければ……である。

二

その伊勢屋九兵衛が、狂人のように髪をふり乱し、
「もっと泣け。お絹、もっと、もっと泣け」
汗みどろになった全裸のお絹の上へ伸しかかっている。
夏のことで、小庭に面した障子を閉めきった部屋の中の蒸し暑さは、たまったものではない。
部屋の片隅で、お道は、しっかりと目を閉じ、身を固くし、歯を喰いしばっていた。
十四歳の少女の前で、わざと見せつける狂態なのだ。
九兵衛がお絹の躰から離れ、
「お道。なぜ、目をつぶっているのだ!!」

と、喚いた。

「か、かんべんして下さいまし」

「目を開けろ。開けろというのだ」

「かんべんして……」

「こいつめ」

立ちあがった伊勢屋九兵衛も丸裸なのである。

とても、見られたものではない。

お道の躰も冷汗に濡れつくしていた。

「こいつめ、強情な……」

近寄って来た九兵衛が、いきなり、お道の顔を殴りつけた。

「あっ……」

お道が転げ倒れたとき、急に雨が叩きつけてきた。

少し前から稲妻が疾っていたようだし、雷鳴もきこえたはずだが、この家の中の三人は、それぞれに稲妻や雷鳴に気づかなかったのである。

「開けろ。目を開けろ」

仕方もなく、お道は薄目を開けた。

向うに、お絹の白い躰が、ぐったりと横たわっている。

また、九兵衛が何かいった。

その声を消してしまうほどに雷鳴がとどろいた。

雨音も、いよいよ激しい。

伊勢屋九兵衛が、まるで獣が吼えるような声をあげ、またも、お絹へ飛びついた。

そのときであった。

庭に面した障子が開き、男がひとり、ことわりもなく部屋へ入って来た。

庭の向うの植えこみの背後は、低い崖のようになってい、崖の上は土手道であった。

土手道の右側は松平下総守の抱屋敷で、宏大な屋敷を囲む土塀が、江戸湾の入海ぎわまでつづいている。

その男は、土手道から崖をつたわって、庭へ入り込んだにちがいなかった。

雷鳴と雨音と、部屋の中は夜のように暗くなっていたので、お道も、男が入って来たのに気づかなかった。

まして、裸のまま絡み合い、のた打ちまわっている伊勢屋九兵衛とお絹が気づくはずもない。

男は背丈の高い躰つきで、顔を布で被っていた。

入って来て、あたりを見まわしてから、男の右手が、するりとふところへ入り、短刀を引き抜いた。

引き抜いたかとおもうと、無言のまま、伊勢屋九兵衛へ走り寄って、背中へ短刀を突き入れた。

九兵衛が絶叫して振り向うとする、その背中を足で踏みつけ、男はぐいと短刀を引き抜きざ

ま、素早く飛びはなれた。

九兵衛の背中から、血がしぶいた。

男は、たくみに返り血を避け、半身を起したお絹の頸すじの急所を短刀ではね切った。

何とも凄まじい早わざである。

お絹が悲鳴をあげた。

九兵衛の絶叫も、お絹の悲鳴も、ほとんど雨と雷鳴に打ち消されてしまったが、お道は茫然と、二人が殺されるのを見ていた。

何が何だか、さっぱりわからぬ。

現実のものとはおもわれぬ惨劇であった。

恐怖よりも、夢を見ているようで、ぽかんと口を開けたままでいるお道へ、男が短刀を摑み直し、近寄って来た。

男は、まったく口をきかなかった。

覆面の間から両眼が白く光っている。

着ながしの裾を端折った男は、雨でずぶ濡れになっていた。

そのとき、また、稲妻が光った。

お道の凍りついたような顔が稲妻に浮きあがったのを見て、男の足がぴたりと停まった。

凝と、見ている。

お道が白い眼をむき出し、仰向けに倒れた。

気を失ったのだ。

尚も、男は、お道を見ている。

こやつは、よほど、人を殺すことに慣れているらしい。

ただの一突きで、伊勢屋九兵衛は即死していたし、お絹は、ほんのわずかな間、躰を痙攣させていたが、いまは、それも熄んだ。

男が微かに頸を振り、短刀をふところの鞘へおさめ、部屋を出て行きかけたが、もどって来て、倒れているお道の顔をのぞき込んだ。

また、男は頸を振った。

それから、身をひるがえし、障子を引き開けると豪雨の庭へ出て行ってしまった。

これまでに、男は二度ほど、お道の顔を見ている。

自分が殺した煙管師の娘だということも知っている。

しかし、その娘が、

(此処にいるとは……)

少しも知らなかった。

この男、ほかならぬ、堀辰蔵であった。

禿頭の、漁師くずれの無頼者の為吉が、その後、辰蔵の犯行現場を見に行って、

「あの煙管師を殺ったのが旦那だとは、だれも気づいちゃいませんよ。大手を振って歩きなせえ。もう平気だ。大丈夫でござんす」

と、辰蔵に告げた。

それは、お道が、まだ隣家の酒屋へ引き取られていないころで、堀辰蔵は編笠に顔を隠し、煙管師の家の前を通りぬけたとき、仕事場の後かたづけをしているお道を見かけた。

亡父の形見の銀煙管を、あわてて、置き忘れたことをおもい出したが、さすがに、お道へ声をかけることはためらわれた。

そのようなことをしたら、いかに少女だとはいえ、こちらが、

(怪しまれるにきまっている……)

からである。

お道を見て、辰蔵の胸は傷んだ。

新しい年が来てから、また、辰蔵は煙管師の家の前を通った。

煙管師の家には、別の家族が住んでいたが、煙管師の娘らしい少女は、となりの酒屋にいて、客に酢を売っていた。

「お道っちゃん、お父つぁんが死んだからって、気を落しちゃいけないよ」

酢を買いに来た近所の女房が、少女へはなしかけている声を、辰蔵は行き過ぎながら編笠の内に聞いた。

(お道という名なのか……)

(危かった……危く、あの娘を殺してしまうところだった……)

土手道から掘割へ架けられた橋をわたり、洲崎の弁天社の方へ小走りに急ぎつつ、堀辰蔵は、

(おれも、とうとう、こんなまねをして暮すようになってしまったのか……)

土手道に脱いでおいた合羽と笠に顔と躰を包み、雷雨の中を引きあげつつある。

悔いもない。宿命の為すがままに身をゆだねるようになってから、辰蔵は、物を考えることをしなくなった。

金で請け負った殺人であるからには、たとえ少女であろうとも子供であろうとも、生かしてはおけぬのが悪の常法なのだ。

だが、さすがに、お道に手をかけることはできなかった。

(ああ、もう、深川で暮すのは嫌になった。三井さんにそういって、別のところへ移してもらおう)

おとろえぬ激しい雨の白い幕の中へ、堀辰蔵は消えて行った。

三

深川・大島町の家で、伊勢屋九兵衛と囲い者のお絹が殺害された事件は、半年が過ぎても、土地の人びとの口から消えなかった。

「それにしても、お道っちゃんは、ほんとうについていないねえ」

「可哀想に……まだ少女だというのに、二度も、ひどい目に遇って……」

「今度も、難を逃れてよかったのだが、二人も殺されるとこを見せられたのでは、たまったも

のではない」

事件の直後、人びとは、お道をあわれみ、

「うちへ引き取ってやってもいい」

と、いい出す者もいれば、

「そうしてやりたいのは山々だけれども……どうも、あの娘は、悪い運を背負っているようだ」

などと、洩らす者もいたようである。

父親が殺された後、奉公に出た先で二人も殺害されるというのは徒事ではない。

これは、お道に、

「何かの祟がついている……」

と、いうわけなのであろう。

あのとき……。

お道が息を吹き返したときも、まだ、雨足はおとろえていなかった。

その雨の中を、裏口から飛び出したお道は、酒屋の松次郎宅へ走って行った。

「な、なんだって……ほ、ほんとうなのかよ？」

松次郎は、びっくりして、

「よし、おれは、これから黒江町の親分のところへ知らせて来る。お道は此処にいて、うごいてはいけねえ。いいかえ」

松次郎の女房おきねに抱きしめられて、お道は無言でうなずいた。

「まあ、なんてことだろうねえ。いいかい、お道っちゃん、心配をおしでない。おじさんもおばさんもついているのだからね」

松次郎夫婦は、どこまでも、お道の心強い味方であった。

知らせを受けた黒江町の御用聞き佐吉は、手先の紋次と勘七と共に、すぐさま現場へ駆けつけて来た。お絹と伊勢屋九兵衛の死体を一目見て、佐吉が、

「こいつは、物盗りの仕わざではねえ」

きっぱりといった。

そのとおりで、家の中が荒された様子はないし、九兵衛の財布にも手がつけられていない。

八丁堀から、同心の早川伊之助が出張って来るころには、すっかり雨もあがり、夜空は晴れあがっていた。

佐吉は、早川同心の下について、お上の御用をつとめている。

このときまで、酒屋の松次郎のところにいたお道が、現場へよび出された。

「さぞ、嫌なおもいをしたろうな」

と、早川伊之助が、お道にやさしくいった。

まだ三十そこそこの同心だが、人柄が練れていて、佐吉も早川には心服している。

「すまないが、悪い奴が入って来たときのことを、くわしく、はなしておくれ」

「はい」

もう、お道は落ちついていた。

部屋の中には、まだ、二人の死体がそのままになってい、戸を開け放っても、血の匂いが生臭くたちこめている。

お道は、おぼえているかぎりのことを、早川伊之助に告げた。

「なるほど、覆面をしていたのか……それは手ぬぐいのようなものだったか？」

「いいえ……あの、黒っぽい布で、出ているのは眼だけでした」

「ふうむ……それで、刀は二本差していたのか？」

「いいえ……」

「では、あの二人を殺したのは？」

「何か、ふところから出して……」

「そうか、なるほど」

早川は、くびをかしげて、しきりに何か考えている。

「旦那。伊勢屋のほうへは、まだ、知らせていませんが、どういたしましょう」

と、佐吉がいった。

「あの男は、伊勢屋のあるじに間ちがいないのか？」

早川が、お道に尋ねた。

「はい。そういってました」

「殺した奴が、出て行くときは、気を失っていて、見ていなかったのだな？」

「はい」

「佐吉……」

と、早川が、

「伊勢屋の番頭を、此処へよんで来てくれ。だが、迂闊にはできねえから、ただ、お上の御用だからといって連れて来るがいい。こいつは御苦労だが、お前に行ってもらおうか」

「承知いたしました」

「ついでに、この娘を酒屋へあずけておくがいい。去年の事といい、今度といい、年端もいかねえのに、とんだ目に遇ったものだ」

「さようで……」

「ま、いたわってやれ」

「はい」

佐吉は、お道を松次郎宅へ送る途中で、

「お道。今日の事は、みんな忘れてしまいねえ」

と、いった。

「はい」

うなずいたが、忘れられるものではない。

お道が帰って来たので、松次郎夫婦が何か食べさせようとしたが、

「あたし、食べられない」

と、お道はいった。

そこで、松次郎の女房が湯を沸かしてくれ、台所の土間で、お道に行水をつかわせてくれた。

着替えの物などは、前から松次郎のところへあずけてあったので、汗をながした躰に寝間着をつけ、お道は、松次郎夫婦の二人の子といっしょに、奥の部屋で床についた。

松次郎の子は、上が庄太といって十歳。下の女の子のおしんは七歳であった。

お道が床へ入ったとき、二人とも、青い蚊帳の中でぐっすりと眠っていた。

お道は目を閉じたが、胸がたかぶってきて、とても眠れない。

可愛がってくれたお絹が殺されたのは悲しかったけれども、伊勢屋九兵衛については、

（いい気味……）

だとおもった。

（あんなやつ、死んじまったほうがいい）

しかし、お絹のことをおもうと、われ知らず、眼の中が熱くなってくる。

（伊勢屋の旦那の、巻きぞえにされた……）

としか、おもえない。

だが、それならば、

（なぜ、私を殺さなかったのだろう？）

短刀を片手に、あの男がゆっくりと近づいて来たときのことをおもい出すと、床の中で、お

もわず、お道は微かな呻き声をあげた。

そのころ……。

殺人現場では、同心・早川伊之助が、南八丁堀の伊勢屋から番頭を連れてもどって来た佐吉へ、

「それにしても、お道は、よく助かったものだ。畜生めも、さすがに殺し切れなかったのだろうよ」

ささやいていた。

伊勢屋の番頭は、腰をぬかしたようになり、驚愕のために口もきけぬ。

これで、殺されたのは伊勢屋九兵衛と、はっきりわかった。

四

南八丁堀の薬種問屋・伊勢屋九兵衛は、なかなかの遣り手だそうで、商売も繁昌している。

九兵衛は四十歳のはたらきざかりで、殺されてしまったわけだが、

「九兵衛さんに恨みをもつ人は多いからねえ」

「それがさ、商いのことだけではない。女出入りも絶えたことがなかったからね」

などと、同業者は噂をし合っているらしい。

町奉行所の探索もおこなわれ、同心の早川伊之助も佐吉と共に諸方へ聞き込みをしたが、手

がかりはつかめなかった。

お道も何度か、よび出され、あらためて問い質されたけれども、初回のときと同じようなことしか出てこない。

あの惨劇がおこなわれたのは七ツ（午後四時）ごろで、夏のことゆえ、まだ明るいのだが、折からの雷雨で家の中が暗くなってしまっていたし、お道もまた動顚してしまい、犯人の特徴などに目をつける余裕とてなかった。

引きあげて行く犯人を目撃した者も、あらわれなかった。

「お道の父親が殺られたときは、となりの酒屋の女房が走って行く浪人者の後姿を見かけているのだが、それだけでは、どうにもならなかった。まして、今度は……」

いいさして、黒江町の佐吉はためいきをついた。

すでに、夏は去っている。

富岡八幡宮・一ノ鳥居傍の料理屋〔万常〕の奥の一間で、そこは佐吉夫婦の居間であり、茶の間であった。

秋ぐちになってから、客もよく入るし、いまも二階座敷で三味線や女たちの唄声がきこえている。

「なあ、おさわ」

と、佐吉が女房に、

「ひょいとおもいついたのだが……」

「何を？」

「お道のことだがね」

「うちへ引き取ろうとでも、おいいなさるのかえ？」

「のみこみが早えな」

「御用聞きの女房だもの」

と、おさわが笑った。

佐吉は、どちらかというと小柄なほうだが、女にしては背丈が高い女房の肉置きも堂々たるもので、そのかわりに抜けるように肌が白く、顔だちがきりりとしていて、

「万常のおかみさんのような男顔の女には、子が生まれない……」

などと、陰口をきく者もいる。

まさに、佐吉夫婦には子がなかった。

「だがな、おさわ。おれはお道を養女にしたいというのではねえのだ」

「あら、……なあんだ、ちがうんですか」

「それじゃあ、お道も窮屈だろうし、おれも、そんな気はねえ」

「じゃあ、どうしようといいなさるのだえ？」

「うちで、はたらかせようとおもっている」

「まあ……」

「お道も、酒屋で居候をしている気はねえらしい。親切にされればされるほど、居にくいのだ

ろう」

昨日、佐吉は、八幡宮の参道で、お道に出合った。

そのとき、お道は、

「親分さん。あたしがはたらくとこ、何処かにないでしょうか？」

と、いったのである。

「お道は、なかなかしっかりしているし、よく気がつく娘だ。うちで教え込んで、座敷女中にして、いろいろと面倒を見てやり、そのうちに、いいはなしでもありゃあ、おれたちが中へ入って嫁入りさせてもいい」

「まだ、子供だというのに、気が早いねえ、親分も……」

「いや、来年は、もう十五だ。いまでも何だぜ、武家方じゃあ、十五、十六の嫁入りはめずらしくも何ともねえ」

「男の子じゃない、女の子だからねえ」

「そのことよ」

「よござんすよ、私は」

「承知してくれるか……」

「私も、何とかしてやりたいと思案をしないでもなかったんですよ」

「はなしはきまった」

「ええ……」

翌日。佐吉が酒屋の松次郎方へ出向き、このはなしをすると、お道は、

「どうか親分、よろしく、おねがいを申します」

と、両手をついた。

その様子を見て、松次郎の女房が泪ぐみ、

「何だねえ、この娘は……そんなに、うちへ気がねをしなくともいいじゃあないか」

「いえ、おばさん。そうじゃあないんです。あたし、はたらいてみたいんです。でも、万常さんへ行っても、実家は此処だとおもってます。かまいませんか？」

その、お道の言葉に、

「まあ、この娘は、すっかり大人びた口をきくようになって……」

と、女房が泣き出した。

翌々日。

お道は松次郎に連れられて、万常へ身を移した。

この日は、朝から雨であったが、お道を万常へ引きわたし、松次郎が家へもどるころから雨が激しくなった。

「こりゃあ、水が出るぜ」

と、運河や掘割が無数にある深川だけに、午後になると、男たちは外へ出て警戒しはじめた。

その最中に……。

深川の外れにある石置場のうしろの一軒家へ、何処からか使いの者がやって来て、

「堀辰蔵さんは、おいでなさいますかえ？」
と、尋いた。
ちょうど、土間にいた漁師くずれの為吉が、
「どちらで？」
「本所の河半からめえりました」
「おや、そうですかえ」
がらりと態度が変った為吉が、
「堀の旦那。三井先生からのお使者らしいぜ」
と、声をかけた。
奥の間で、堀辰蔵は寝そべって冷酒をのんでいた。
前に、ここで共に暮していた二人の浪人のうち、中年の柳彦七は、この家に住み暮しているが、若いほうの木村市太郎は二月ほど前に、
「三井さんから、ひょんな仕事をいいつけられてな。半年ほどは江戸へ帰れないよ」
こういって、旅仕度をして出て行ったきりだ。
土間へ出て来た堀辰蔵へ、
「これを、ごらんなすって下せえまし」
と、本所の回向院の近くにある料理屋・河半からの使いの者が手紙をわたした。
「三井さんからか？」

「さようで」
辰蔵は、その場で手紙を読みはじめた。
小ざっぱりとした着物を身につけ、総髪の手入れもよく、去年、三井覚兵衛に拾われたときの堀辰蔵とは、見ちがえるばかりになっている。
「わかった」
手紙を巻きおさめつつ、辰蔵が、
「為吉。おれは、河半へ行って来る」
「この、ひでえ雨の中をですかい？」
「すぐに来いと、三井さんがいっているのだ」
「へえ、それなら仕方もねえことだが……」
「ことによると、こっちへはもどらぬかも知れぬ」
こういって、堀辰蔵は土間の外で飛沫をあげている雨足を凝と見つめた。

若松屋お徳

一

「ま、親分も、よく御存知かとおもいますが、私は、ごらんのとおりの女で、しかも急に、こんなお願いをしに出て、さだめし、びっくりなすったろうし、また、若松屋へ奉公をさせるということだけでも後込みをしなさるかも知れません。ですが親分。私が、こんなお願いに出たのはこれがはじめてのこと。どうか一つ、承知をして下さいませんか」

こういって、深川・黒江町の御用聞き佐吉の前で、軽く頭を下げたのは、浅草御門外の福井町三丁目に店を構える小間物問屋・若松屋長兵衛の妻お徳である。

この日。

お徳が突然、万常を訪ねたのは、座敷女中の見習いとしてはたらいているお道に何故か目をつけ、

「ぜひとも、自分のところで奉公をさせたい」

と、万常へたのみに来たのだ。

お道が、富岡八幡宮一ノ鳥居傍の料理屋・万常ではたらくようになってから、早くも二年の歳月が過ぎ去ってしまった。

いま、お道は十六歳になっている。

若松屋は、袋物や革製品、櫛や簪などのほかに、京都から仕入れてくる紙製の財布が有名で、江戸でも名の通った店であった。

当主の長兵衛は、むかし、若松屋の手代だったそうな。

それを、先代が見込んで、ひとりむすめのお徳の聟にしたのだ。

夫婦の間には、芳太郎という一人息子がいて、三十になるというのに、妻も子もない。

いや、芳太郎はこれまでに三度も嫁をもらっているのだけれども、これを母のお徳が、

「三度とも、いびり出してしまった」

というわさも、黒江町の佐吉は耳にしていた。

お徳は、女ながら背丈が高く、細身の躰つきで、切長の眼の色も強く、引きしまった唇といい、あまりにもととのいすぎた鼻すじといい、見た目には冷たい印象をあたえる。

「ああいうのを、男顔というのだ」

いつであったか、佐吉が女房のおさわに、そう洩らしたこともある。

若松屋の菩提所は、深川・蛤町の海福寺で、そうしたところから法事や墓参の折々に、万常へ立ち寄るようになった。

それはもう、六、七年も前からである。

「万常の料理は、しっかりしている」

と、お徳は気に入って、若松屋の商売の上の用談にも万常を使うようになっていた。

お徳が長兵衛の代理であらわれ、客をもてなすこともしばしばである。

万常の座敷女中などは、

「目をつぶって声だけ聞いていると、若松屋さんのお内儀さんの口ぶりは、まるで、男のものとしかおもえない」

などと言い合っていた。

そうして、万常へ来るたびに、お徳は、お道に目をつけていたらしい。

見習いといっても、一年ほど前からのお道は、他の座敷女中と同じように髪もゆい、客座敷の下ばたらきをするようになっていた。

小さいときに不幸な目にあっただけに、十六といっても二つ三つは年上に見られたし、何事にも気がつき、それでいて出しゃばることもないので、お道は、女中たちにも客にも好感をもたれている。

だから、若松屋のお徳が、

「ぜひとも、自分についていてくれる女中に……」

と、のぞむ気持ちもわからぬではないのだが、

「とんでもない。若松屋さんなんかに、お道をやれるものですか」

佐吉の女房おさわは、かぶりを振った。

佐吉が、

「ともかくも、当人の気持ちを聞いてみませんことには……」

こういって、お徳に帰ってもらった、その日の夜の茶の間で、

「お前は、どうおもう？」

切り出したところ、おさわは即座に反対をした。

「若松屋のお内儀さんの世話をする女中は、長つづきをしないそうですよ。あまりに口やかましい上、重箱の隅を楊子でほじくるような使い方をするものだから、たまりかねて暇をとるか、それでなけりゃあ、お内儀さんが追い出してしまうというじゃありませんか」

「ふうむ……」

「そりゃあ、親分だって知っていなさるはずだ」

「そうよなあ……」

佐吉は、お道の父親がつくった煙管を手に取って、

「その、お内儀さんが、お道を見込んで、ぜひにもといってきた……」

「お道は蛙ですよ」

「え？」

「蛇に見こまれた蛙のようなものさ」

「だが、あの蛇は、ただの蛇じゃあねえ。今日、おれにも、はっきりといったよ」

「何といいましたえ？」

若松屋のお徳がいうには、なるほど、世間のうわさのとおり、私は息子の嫁も気に入らずに離縁をとりもしたし、女中にも、散々に嫌われてきたが、それは、

「何も、憎んでしたことではありませんよ」

なのだそうだ。

「嫁も女中も、何とか、一人前にしてやろうとおもえばこそ、してきたことで、それを、よけいなことだといわれてしまっては身も蓋もない」

お徳は苦笑いを浮かべ、

「私が子供のころから、母親に仕つけられた、ごく、当り前のことをしているだけなのに、世の中がすっかり変った所為か、まるで私のことを、世間では鬼婆のようにいいますがね」

と、佐吉にいった。

「お道なら、きっと辛抱ができるとおもう。こう、いいなさるのだ」

「そんな、親分。勝手に、きめられてしまったんじゃあ、お道が迷惑ですよ」

「そうか、な……」

「そうですとも」

おさわは、熱り立っているように見えた。

子がないだけに、いまは、お道に情が移ってしまったらしい。

「ま、うちへ置いて、あの娘の行末の面倒をみてやるのもいい。そりゃあ、何でもねえことだが……」

「だから、そうしたらいいじゃありませんか」

「おれはな、おさわ。お前とちがって男だから、若松屋のお内儀を、ちょっと別の目で見ているのだ」

「どんな目なんですよ？」

「辛抱さえしてくれるなら、かならず、お道の身が立つようにする、と、そういいなすった若松屋のお内儀の顔つきは尋常のものではねえような気がした」

「わからないねえ」

「つまり、その……男と男が、はなし合いをしているような気分だったということよ」

「だから、私ぁ、厭なんですよ」

おさわは顔を顰め、冷えた茶をのみくだした。

急に、雨が屋根を叩いてきた。

時雨であった。

秋も深い。

二

お道の行末について、御用聞きの佐吉はいろいろに考えてみた。

自分とおさわが、お道の面倒をみることはなんでもないし、ことに女房のほうは、
（もう少し、お道の様子を見て、これで大丈夫となったら、私たちの養女にして、万常の跡を継がせても……）
うすうすは、おもいはじめているらしい。
佐吉は、自分たちの行末など、あまり考えぬほうだ。
万常が、自分たち夫婦の代で終ってしまってもかまわない。
子がないからといって、養子や養女を迎え入れても、
（却って面倒だ）
と、おもっている。
ともかくも佐吉は、よけいなことに神経をつかいたくない。
そして、お上の御用へ心身を打ち込みたいのである。
その役目というのが、さまざまな刑事に関わって、ときには命がけではたらかなくてはならないのだから、その他のことには、なるべく関わりたくないのだ。
けれども、自分ひとりのことはそれでよいが、女房のおさわの身になってみれば、これはまた別の立場で、そろそろ行先のことも考えておかねばならぬのだろう。
「まあ、ともかくも、若松屋さんからのはなしは断っておくんなさい」
と、おさわが茶の間を出て行った後で、佐吉は長火鉢の引き出しから、鬱金の布に包んだ小さな物を取り出した。

それは、お道の父親・源助が殺害された現場に落ちていた銀煙管であった。
蜻蛉が一つ、精妙に刻り込まれている、この銀煙管は、
（源助を殺したやつが落していったものにちがいない）
と、いまも佐吉は信じている。いったんは奉行所へ差し出したのだが、
「何としても、源助を殺したやつを引っ括ってやりとうございます。この煙管を、しばらく私に預らせて下さいまし」
同心の早川伊之助にたのみ、手許に置いてあるのだが、一向に手がかりはつかめない。
深川や本所一帯には、物騒なまねをする浪人者や、種々雑多な破落戸どもが、それこそ、
「掃いて捨てるほど……」
いるのだ。
この三年間に、黒江町の佐吉は、そうした男たちを何人も捕えていたし、事件があるたびに、源助殺しとの関係を探り出そうと努力をつづけていたが、
（どうも、糸口がほぐれねえ。ひょっとすると、源助を殺ったやつは、もう、江戸にいねえのかも知れねえ）
半ば、あきらめかけていた。
お道は、亡父の命日に、かならず墓詣りに出かけている。
墓は同じ深川の、猿江の蓮光寺にあった。
父親が殺された悲しみは消えないし、墓詣りをするたびに、犯人を憎む心がよみがえってく

るだろうが、そこは何といっても武家のむすめに生まれたわけではないし、もちろん、お道は男でもないのだ。

万常での明け暮れを、いそがしく過していれば、おもいつめて、父親の敵を討つという気になるわけのものでもない。

女という生きものには、

「過去も将来もない。ただ、いまの自分があるだけだ」

などと、いう人もいるが、お道は、どんな気持でいるのだろうか。

よく気がつくし、骨身を惜しまずにはたらき、だれにも好かれているお道だが、口数は少ない。

微笑は絶えず顔に見られるけれども、世辞をいうわけでもなし、客のはなし相手になるのは、不得手らしい。

黒ぐろと張った双眸や、女にしては濃い眉、浅ぐろい肌……お道の顔だちは、このごろ、きりりと引きしまっていた。

（しっかりものだが、料理屋を切りまわすには、どうも……？）

と、佐吉はおもっている。

料理屋の女あるじともなれば、おさわのように、しっかりものの上に、こぼれるような愛敬も必要なのだ。

（おさわが、どうしても、お道を養女にするというのなら、この商売を切りまわせるような男を聟にもらうより仕方がねえだろう）

このことであった。

翌日。

昼すぎに、おさわは外出をした。

神田の三河町にある茶問屋・松屋善兵衛方へおもむいたのだ。

近いうちに、松屋が多勢客をするので、その打ち合わせに行ったのである。

「おい。ちょいと、お道をよんでおくれ」

朝から、ずっと茶の間にいた佐吉が女中にいった。

今日は、よく晴れた。

澄みわたった青空に、鶴の群れが渡っている。

お道があらわれるまでに、佐吉は板場へいいつけて、柿を剝かせ、茶の間へ運ばせておいた。

やがて、

「およびでございますか」

めっきりと大人びた口調になって、お道が小廊下から声をかけてよこしたのへ、

「お道か。ま、入んねえ」

「はい」

「おお、いい髪だ」

結いあげたばかりの、お道の髪を佐吉がほめると、お道の顔へ血の色がのぼった。

「さ、柿を食べるがいい。遠慮をするな」
と、先ず、佐吉が柿を手に取って、
「ちょいと、お前にはないしがあるのだ」
「何でございましょう？」
「実は、な……」
「お父つぁんを殺したやつが、見つかったんでございますか」
と、お道の血相が変った。
ちょうど、このとき、
「少し、やすませてくれ」
こういって、万常へ入って来た二人連れの侍がいる。
何と、一人は三井覚兵衛。
別の一人は、堀辰蔵であった。

三

この日の三井覚兵衛は、月代をきれいに剃っていて、羽織・袴をつけ、どこぞの大名家に仕える侍といってもおかしくない。
そして堀辰蔵。

これも変った。
総髪をきれいにととのえ、羽織・袴。
三年前には、何やら青ぐろく浮腫んでいた顔の肉を刮げ落したような顔貌になってしまった。
眼の色に表情がなく、引き結んだ唇は容易にひらこうともせぬように見える。
たとえ、三年前の堀辰蔵を知っている者が、この辰蔵を見ても、すぐにはそれとわかるまい。
辰蔵は四十二歳になっていた。
〔万常〕の、二階の奥座敷へ入った三井覚兵衛と堀辰蔵は、酒肴が運ばれてくると、
「よぶまでは、来なくともよい」
三井が、座敷女中のおきのへいった。
おきのが出て行くと、
「どうだな、堀。江戸へもどって来て、なつかしいか？」
この三井の問いかけに、堀辰蔵は微かに唇をゆがめた。笑ったつもりなのだろうが、笑顔にはなっていない。
「しばらくは、江戸にいてもらおう」
「ふむ……」
「いま、何処にいる？」
「昨日、江戸へ着き、とりあえず、本石町の槌屋という宿屋に……」
そして今日、辰蔵は三井覚兵衛の家を訪ねた。

三井は、本所の小梅の代地に小ぢんまりとした家を建て、髪に白いものがまじりはじめている痩せた女と暮している。

だれが見ても、女のほうが三井より年上に見えた。

女の名を、お吉という。

大坂にいた辰蔵は、三井から、

「すぐに、江戸へ来てくれ」

との手紙を受けとり、大坂を発ったのである。

「大坂は、どうだ？」

「別に……」

「居心地はよかったか？」

「ふむ……」

「堀。すっかり、無口になってしまったのう」

「そうか、な……」

「上方で、何人、殺った？」

「ふむ……」

「金の、つかい道に困ったろうな。おぬしのことゆえ……」

「別に……」

「江戸へ来てもらったのは、私と一緒に、少々、強い仕事をしてもらいたくてな。どうだ、ちからを貸してくれるか？」

辰蔵は、うなずいたのみで三井へのこたえとした。

そのとき……。

万常の階下の、奥の茶の間では、まだ、佐吉がお道へはなしている。

「つまりは、お前しだいだ。どうしても、お前が此処に居たいというのなら、少しもかまわねえし、実は、そのほうが、うちのおさわもよろこぶわけだからね」

お道は、凝と、語る佐吉の顔を見つめている。

本気になって、佐吉の胸の内を知ろうとしているらしい。

（親分のいうことは本当なのだろうか……それとも、私が邪魔になったのじゃないだろうか？）

このことである。

「だが、お道。物事には時期というものがある。若松屋のお内儀さんが、どういう人か、それは見る人によってそれぞれにちがうだろうが……おれは、あの人を徒の人ではねえとおもっている。それが、わざわざ、お前を見込み、仕込んでみたいといいなさるのだ」

「……」

「もっとも、自分の小間使が、来るそばから辛抱しきれず、出て行ってしまうものだから、お内儀さんも困っていなさるのだろうがね」

苦笑した佐吉が、煙管に煙草をつめながら、

「おれもおさわも、お前を邪魔にしているのじゃあねえ。いまもいったとおり、此処は料理屋だ。水商売の座敷女中としてなら仕込みもできようが、そうなりゃあ、お道。お前も、この稼業に染まってしまう。それが悪いというのではねえけれど、このさい、五年なり六年なり、みっちりと、若松屋で苦労をしてみるが、お前のためだと、おれはおもうのだ。お前が一人前より、もっと上の女になれるような気がするのだ。いいか、お道。これはどこまでも、お前の身になって考えたことだから、お前がどうしても厭なら、此処にいてくれていいのだぜ」

「はい……」

「また、いま一つ……」

「……？」

「若松屋で、つとめあげた後、また、おれたち夫婦の許へ帰りたいというのなら、よろこんでお前を引き取ろうじゃねえか」

はっと、お道が佐吉を見あげた。

（親分は、真底から、私のことをおもっていて下すったのだ）

それが、はっきりと、

（腑に落ちた……）

ような気がした。

「親分……」

いいさして、お道は両手をついた。

「どうだ、わかってくれたか？」

「はい」

「それで？」

「親分の、おっしゃるとおりにします」

「むりをしなくともいいのだよ」

「はい」

「そうかい」

佐吉が満足そうにうなずき、煙草盆の灰吹へ煙管を落し、

「悪いことはいわねえ、男も女も、若いときに苦労をしておくものだ、なぞと、えらそうな口をきけるようなおれではねえが……」

「親分。御親切に、いろいろと、ありがとう存じます」

「なあに、これからも、おれがところを実家だとおもうがいい。お道。お前は此処と、それから酒屋の松次郎さんのところと、実家が二つもある。どうだ、豪勢なものじゃあねえか」

「はい」

めったには泪を見せぬお道が、このときは、両眼に熱いものをたたえていた。

お道が茶の間から廊下へ出て来ると、女中のおきのが、

「あ、すまないが、お道っちゃん。これを梅の間へ持って行っておくれでないか」

酒が乗った盆をわたして、

「おや、お前どうした？」
「いえ、別に……」
「眼が赤いよ」
「何でもないんです」
お道は、酒を梅の間へ運んで行った。
梅の間には、三井覚兵衛と堀辰蔵がいる。

四

「お待たせをいたしました」
こういって、お道が酒を置いたのを見て、堀辰蔵の顳顬がぴくりとうごいた。
三井覚兵衛は、窓際にいて、八幡宮の参道を見下している。
それで、お道が辰蔵へ、
「ほかに、御用はございませんでしょうか？」
と、尋いた。
堀辰蔵は、わずかに、頸を振った。
「お酌を……」
「かまうな」

「はい」
お道は、
（このお人は、何処かの道場の剣術遣いらしい）
と、看た。
辰蔵のような、総髪の剣客で、万常のなじみの人がいたからであろう。
「御用がございましたら、および下さいまし」
こういって、お道は廊下へ出た。
まさかに、いま、自分が口をきいた相手に父親が殺されたとは夢にもおもってみない。
あのとき……。
伊勢屋九兵衛と、囲い者のお絹を短刀で、
「あっ……」
という間に刺し殺した男の姿を、お道は浪人者だとおもっていない。
あのときの堀辰蔵は袴もつけず、裾を端折って、刀を腰に帯びていなかった。
廊下を遠ざかって行く、お道の足音に、辰蔵は凝と耳を澄ませている。
「おい……おい、堀……」
「む……」
「どうした？」
窓際から、三井覚兵衛がもどって来て、

「妙な顔をして、どうした？」
「別に……」
「何か、気にかかることでもあるのか？」
「いいや」
頸を振って辰蔵は、三井へ酌をした。
受けた三井が、
「では、いいな。これからは当分、本所の河半にいてもらおう」
「わかった」
「おれのところへ来てもらってもいいのだが、妙な婆さんもいることだし、かえって気づまりだろう」
「あの女は、三井さんのお内儀か？」
「内儀というしろものではないが……腐れ縁というやつでな」
「ふうむ……」
「どうだ、上方にいて、好きな女でもできて、それをいま、おもい出しているのではないか？」
辰蔵は、薄く笑ったのみである。
「女を抱くのはいいが、こころを移さぬほうがいい。おれがところの婆さんのようなのは女ともいえぬが、いずれにせよ、おれたちにとって、女と子供は無用のものよ」

辰蔵は、無言で盃を口にふくんだ。
（あの小むすめ、大きくなったものだ）
その小むすめの父親は、ほかならぬ辰蔵に殺された。
それを、小むすめは知らぬ。
（父親に死なれて、ここへ、はたらきに出ていたのか……）
堀辰蔵は、父親を殺され、敵討ちの旅へ出てから十九年目になる。
父を討って逃げた加藤甚作は、四十五歳になっているはずだ。
（おれの運命も、父に死なれて狂ってしまった……）
三井覚兵衛にさそわれ、いまの辰蔵は、金で人殺しを請負っている。
こうした暗殺の稼業を、暗黒の世界では、
「仕掛人」
と、よんでいるそうな。
二人が、万常を出て行ったのは、それから間もなくのことであった。
いつの間にか、夕闇が淡くただよっている。
三井も辰蔵も、万常には、はじめての客であった。
女中のおきのを呼び、三井が勘定をしている間に、辰蔵は手洗いに立った。
廊下へ出ると、別の間から酒を下げてあらわれたお道を見た。
「これ……」

「はい？」
「厠は？」
「突き当りでございます」
「ちょっと、此処で待っていてくれ」
「は……？」
辰蔵は手洗いをすませ、すぐに廊下へもどって来た。
お道が、怪訝そうに廊下で待っていた。
うなずいた堀辰蔵は、紙に包んだこころづけを、
「取っておけ」
お道へわたした。
「私は、あの、いいんでございます」
「ま、いい」
いい捨てて、座敷へもどって行く辰蔵の背中に向って、
「ありがとう存じます」
お道は、頭を下げた。
堀辰蔵は万常を去るとき、おきのと共に見送って出たお道に一顧もあたえなかった。
それから、お道は、辰蔵がよこした〔こころづけ〕を、おきのへわたした。
料理屋の座敷女中は、客の〔祝儀〕や〔こころづけ〕で生きている。

お道は、まだ見習いというかたちだったから、客からもらった〔こころづけ〕は、いちいち、上の座敷女中へ見せることになっている。
だからといって、それを取りあげられてしまうわけではない。
「あ、そうかい。お前さん、取っておき」
いつものようにおきのがいうのへ、
「でも、あの……」
「どうしたえ？」
「ちょっと、これ……」
お道が紙をひらいて、中の金を見せると、
「あれ、まあ……」
おきのが、びっくりした。
中に一両小判が一枚、入っていたからである。
一両といえば、一家族が一カ月は暮せる金高で、現代の感覚でいうなら十五万円にも相当するであろう。
「お道っちゃん。どっちのお客が下すったのだえ？」
「総髪のほうの、お客さんですけど……」
「知っている人？」
「いいえ」

「まあ、ずいぶんと気張ったものじゃあないか」
「お帳場へ、いいましょうか？」
「かまわないよ。仕舞っておおき。また今度、そのお客さんがお見えのときは、私から、よく、お礼をいっておこう」
「でも、こんなに……」
「お客のこころづけだ、遠慮をすることはありゃあしないよ」
堀辰蔵にしてみれば、一両どころか、十両でも二十両でも、お道へわたしたかったろうし、それほどの金は、ふところにあったのだ。
だが、一両にとどめたのは、却って怪しまれることをおそれたのであろう。

五

お道は、それから十日後に、小間物問屋・若松屋長兵衛方へ奉公にあがった。
江戸の商家の中でも、それと知られた若松屋なのだが、表通りに店舗を構えているわけではない。
浅草御門から、大川（隅田川）沿いに北へ伸びている大通りをどこまでも行くと金竜山・浅草寺へ突き当る。
大通りの右側には、幕府の巨大な御米蔵もあるし、その人通りのはげしさ、賑いは、富岡八幡宮・参道の比ではなかった。
大通りの両側には大小の商舗や料理屋・飲食店が軒をつらねていたけれども、若松屋は、瓦町の角を西へ入った角地にあった。
間口は六間だが、奥行きが深く、土蔵が三つもある。
小間物といっても高級品ばかりをあつかっているので、通りがかりに入って来る客はほとんどない。
お道は、いきなり、〔奥〕の女中にされた。
女中といっても、台所ではたらく者もあれば、主人夫婦や家族が住み暮す奥向きの用事にはたらく者もいる。
内儀のお徳は、お道を連れて来た黒江町の佐吉夫婦が帰った後で、
「ま、こっちへお入り」
次の間で、身を硬くしているお道へ声をかけた。
「いいから、ここへおいで」
「はい」
そこは、お徳の居間であった。
せまいながらも風雅な奥庭に面していて、障子を開け放った縁先に、秋の日ざしが明るかった。
庭の垣根の向うに、土蔵の白壁が見える。

庭のどこかで、鶸が鳴いていた。

「万常のおかみさんは、どうも、お前を手ばなしたくはなかったらしいねえ」

お徳は、入って来て坐ったお道へ、

「お前に目をつけていたのは、私ばかりではなかったようだ」

笑いもせずに、女もちの銀煙管を手に取り、煙草をつめた。

（いい煙管……）

だと、お道はおもった。

少女ながら、腕のよい煙管師を父にもっていただけに、お道の目はたしかだった。

「お道……」

「はい？」

「お前の身の上は、先達っての夜、黒江町の親分が見えなすって、いろいろとはなしてくれた。ずいぶんと、ひどい目に遇ったらしい。親御さんも気の毒なことだったね」

お徳は、まるで男のような口調できびきびという。

気の毒だといいながらも、そうした感情がまったく声にこもっていないようにおもえる。

お道は、急に、こころ細くなってきた。

佐吉のいうことを信じて奉公にあがったわけだが、女房のおさわは、昨夜、佐吉が帰って来ぬ間に、

「いいかい、お道。嫌になったら、いつでも万常へ帰っておいでよ」

そういってくれている。

（親分さんは、なんで、こんなところへ奉公をするがいいとすすめたのだろう……？）

お道が顔をあげると、お徳が睨むように見据えていた。

（ここの、お内儀さんは、笑うことを知らないのじゃないかしらん）

お道は顔を伏せた。

「私は、かなり口うるさいほうだから、そのつもりでいておくれ。いいかえ」

「……」

「だが、そのかわり、お前がしっかりとはたらいてくれるなら、行末、決して悪いようにはしない。わかったね」

「……」

「これ、聞いているのか」

と、お徳が煙管で煙草盆の灰吹を叩き、

「聞いているなら、返事をするがいい」

早くも叱りつけてきた。

「き、聞いています」

「それじゃあ、わかったのだね？」

「はい」

お道は両手をつき、

「よろしく、おねがいを申します」
と、いった。
そういうよりほかに、いまは仕方がない。
（なんという女なんだろう。こんなひと、見たこともない）
万常へ客としてあらわれるお徳を垣間見たことはあるが、座敷へ出たことはなかった。
お徳についての評判は、耳にしたこともあるが、まさかに、これほどとはおもわなかった。
それにしても、
（ここの、お内儀さんは、いつ、私なんぞに目をつけていたのだろう）
お道は、ふしぎでならなかった。
こうして、お道の新しい暮しがはじまった。
若松屋の奉公人は、台所の飯炊きから下女までふくめると三十人ほどで、そのうちの中年の女中が一人、奥向きの用事をつとめていて、その下に二人の下ばたらきの女中がいた。
その女中は、おうめといい、主人の長兵衛と息子の芳太郎の世話をしている。
お徳の小間使の女中が、一月ほど前に暇をとり、出て行ってしまったので、おうめも仕方なくお徳の世話もしていたわけだが、
「ああ、もう、お前さんが来てくれたので、ほんとうに助かったよ。どうか、たのむから、一年でも一月でも、長くいておくれよ」
新参のお道へ、何と、手を合わせたものである。

おうめは四十に近い年齢で、若いころ、若松屋に奉公をしていたそうな。
そして一度、世帯をもったが、子もないままに夫と死に別れてしまい、五年前に、また若松屋へもどったのだという。
それほど、若松屋と関わりの深いおうめに、内儀のお徳は、
「お前のように鈍な女には、いくらいってやってもむだだから、私も我慢をしているが、それにしてもおうめ、もう少し、ここが……」
と、頭を指さして、
「ここが、人並みにはたらかないものかねえ」
などと、やっつけられるのだから、たまったものではない。
おうめがはなしてくれたところによると、この五年間に、お徳附きの小間使が三人も替ったらしい。
そうしたわけで、お徳附きの女中が逃げてしまうと、つぎの女中が来るまではおうめが世話をしなければならぬ。
なるほど、お徳は、おうめが夫と息子の世話をしている女中だけに、手かげんをしているのだろうが、
「何といったって、お内儀さんの毒口だけは、蓋のしようがないんだから……」
いいさして、おうめが、
「あ、いけない、いけない。せっかく、お前さんが来てくれたというのに、こんなことをいっ

て脅かしたりしたら、また逃げられちまう」

と、菓子をそっと出して、お道へわたし、

「さ、おあがり。困ったことがあったら、なんでもおいいよ。できるだけ助太刀をするからね」

「どうか、おねがい申します」

「いいとも」

おうめも、お道に逃げられたら大変とおもうから、万事に親切であった。

これで、お道も、

（なんとか、やってみよう）

おもい直すことができたのである。

六

若松屋の奥向きの女中たちは、店ではたらく奉公人たちとは別の、つまり、若松屋の家族が寝起きする「奥」の居住区の中の部屋で寝る。

そこは、店と奥の境の廊下に面した八畳の間で、ここに、おうめを頭にした四人の女中が寝起きをするわけであった。

年長で、しかも、若松屋の奉公人としての経歴も古いおうめが、お道を親切にするのだから、

他のおさん、おみつの女中たちも、

「辛抱おしなさいよ」

「たのみますよ」

と、お道にいった。

この二人もまた、お道に逃げられると、おうめ同様に、お徳との接触が増えるわけなのだ。

「辛抱してくれ」という言葉に嘘はなかった。

お道は、夜更けてから八畳の女中部屋で三人の女中たちに囲まれ、しばらく語り合ってから床へ入った。

（この人たちといっしょにはたらくのなら、なんとか、やれそうだ）

さらに、お道は元気が出てきたようだ。

この日は、お徳も、さすがに何の用事もいいつけなかった。

床へ身を横たえると、たちまちに、お道は深い眠りに引き込まれた。

そのころ……。

若松屋からも、さほどに遠くはない大川橋（吾妻橋）の東詰から大川に沿った道を南へ歩む二人連れがある。

一人は、本所・石原町に住む御用聞きの喜三郎で、これに附いているのは喜三郎の手先をしている岩吉という者だ。

喜三郎と同様に、お上の御用をつとめる黒江町の佐吉にいわせると、

「本所の喜三郎は、だめな男……」
なのだそうだが、本所界隈での喜三郎の勢いは、
「大したもの……」
という評判である。
「喜三郎のようなやつが、十手や御縄をあずかっていると、ろくなことはねえ。ねえがしかし、ああした御用聞きのほうが江戸には多いのだから、どうしようもねえのだ」
と、佐吉が女房のおさわへ、こぼしたこともある。
「こんなことは、お前にしかいえねえのだが……」
そのとき佐吉は、酒を呷りながら、夜ふけの万常の茶の間で、たまりかねたように、
「今度の犯人を追いつめたところ、その野郎は何と、石原の喜三郎のところへ逃げ込みやあがった」
「だって、親分。そんな……」
「いや、おれの目で見たわけじゃあねえが、逃げ込んだところを見た者がいるのだ」
「そんなら、すぐにも、しょっ引いてしまえばいいじゃありませんか」
「ところが、喜三郎は、そんな犯人をおれが匿うわけがねえと言い張るのだ」
「では、逃げ込んだのを見た人というのに、証人になってもらえばいいじゃありませんか」
「だめだ」
吐き捨てるようにいって、佐吉は、くやしげに盃を叩きつけた。

「だめって、親分……」
「殺られちまったよ」
「何ですって……」
「殺されちまったよ、先刻、大川へ死体があがったばかりだ」
「まあ……だれに殺されたんですよ？」
「それが、わかっていりゃあ、いまごろ、こんなに苦え酒をのんでいやあしねえ」
石原の喜三郎が、
（手をまわして殺したにちがいない）
と、佐吉は、いまもおもっている。
だが、その証拠がない。
現代のように科学捜査が発達していない時代のことで、犯人の手がかりは、目撃者と証拠の品などをたよりに追いつめるよりほかに道はなかった。
殺人犯人を捕えるのが役目の喜三郎が、これをひそかに匿っているばかりでなく、目撃者を暗殺し、手がかりを消してしまうなどということが、
（ほんとうにあるのだろうか？）
と、おさわはおもった。
それはもう四年も前のことで、それまでは、めったに佐吉が役目のことを洩らしていなかったので、おさわはびっくりした。

その後、佐吉はぴたりと口を閉じてしまったので、後の始末がどうなったか、おさわは知っていない。

けれども、おさわは、江戸市中の暗黒面の一端をのぞいたおもいがしている。

石原の喜三郎は、いまも大手を振って歩いているし、土地の旗本・御家人の屋敷や、商家へも出入りをし、羽振りも大きくなるばかりだというではないか。

その、石原の喜三郎が、ほろ酔いきげんで手先の岩吉へ冗談をいいながら、大川沿いの道を本所・石原町の方へ向っている。

大川は、喜三郎の右手に黒く横たわり、夜舟の舟行燈が遠くに二つ三つ見える。

夜ふけのことで、人の足はまったく絶えていた。

「冷えてきやがったな」

と、喜三郎がつぶやいた。

二人は、番場町の外れを通りすぎた。

道は、二つにわかれた。

右は、大川沿いの道。

左は、喜三郎の家がある石原町へ通じている。

喜三郎と岩吉が左の道へ入ったとき、左側の旗本屋敷の門前に屈みこんでいた黒い影が、急に、立ちあがった。

親分の喜三郎の先へ立ち、提灯で道を照らしながら歩いていた岩吉が、

（おや……？）

はっと立ちどまった。

瞬間、黒い影の腰から疾り出た刃が岩吉の頸すじの急所をはね切っていた。

「うわ……」

提灯をほうり出して岩吉がよろめき、おどろいた喜三郎が、

「な、何をしゃあがる」

叫んだとき、黒い影は躍りあがるようにして喜三郎を斬った。

これまた、頸部の急所を切り割られ、石原の喜三郎が悲鳴をあげたのを尻目に、黒い影は早くも闇の中へ消えてしまっている。

黒い影は、着ながしの、浪人姿の堀辰蔵であった。

旗本屋敷の門番が飛び出してきたときには、喜三郎も岩吉も息が絶えていた。

七

それから間もなく、堀辰蔵の姿を本所の回向院の塀外に見ることができる。

回向院は、国豊山・無縁寺と号する。

すなわち、明暦三年の正月十八日。

江戸に大火が起り、十万七千余の焼死者を出した折に、幕府は、この地へ死体をあつめ、塚

を築き、供養のための寺院を建てた。

これが回向院である。

ひろい境内の中には種々の堂宇がたちならび、葭簀張りの茶店も多い。

門前町も賑かで、道をへだてた西側の元町一帯も、さまざまな店舗が軒をつらねている。

両国橋は、目と鼻の先であった。

この元町の一角に〔河半〕という料理茶屋がある。

堀辰蔵を拾いあげて、

「血なまぐさい仕事……」

を与えた浪人・三井覚兵衛が、以前、この料理茶屋に住み暮していたことは、すでにのべておいた。

〔河半〕からも程近い場所で、土地の御用聞き喜三郎と、その手先を暗殺した堀辰蔵は、いま〔河半〕の裏手の細道へ音もなく入って来た。

この時刻になれば、どの店も寝しずまってしまい、月もない夜の闇が垂れこめているばかりだ。

それにしても、凄まじい暗殺であった。

喜三郎も岩吉も、まるで、雷に打たれたようなもので、逃げることも助けをよぶこともできなかった。

堀辰蔵の早わざには、いよいよ磨きがかかってきたらしい。

二人の頸部の急所を斬って、辰蔵は返り血もあびていない。

岩吉を斬って、その血飛沫を避けた姿勢が、そのまま、つぎの喜三郎へ飛びかかる構えになっていた。

躍りかかって、喜三郎を斬る。

喜三郎の頸部から噴出する血を素早く躱した堀辰蔵の躰は、大きくよろめいた喜三郎の背後に抜け出ていた。

喜三郎が悲鳴を発して転倒したとき、辰蔵は闇の中へ消えてしまっていた。

大川沿いの道を少し走ってから、辰蔵は、大川へ飛び下りた。

身を投げたのではない。

川面に小舟が浮いていて、そこへ飛び下りたのである。

小舟の中には、男がひとりいて、辰蔵を待っていた。

小舟は大川へ漕ぎ出し、南へ下り、両国橋の少し先の舟着場で辰蔵を陸へあげておいて、また、大川の闇へ溶け込んでしまった。

そこから〔河半〕までは、わずかな距離であった。

河半の裏手の塀の一角が、通用口になっている。

堀辰蔵が、その前まで来ると、通用口の戸を叩きもせぬのに、内側から戸が開いた。

すっと、辰蔵が中へ入る。

入れかわりに男が一人あらわれ、裏手の細道を見わたした。

辰蔵が、だれかに尾行されていないか、どうかをたしかめたのであろう。

かなり長い間、男は通用口の前に屈み込み、あたりの気配をうかがっていたが、
（大丈夫……）
と看たのだろう、中へもどり、戸を閉めた。
堀辰蔵は、奥庭の垣根の外の通路をまわり、離れ屋の前へ出た。
この離れ屋に、辰蔵は泊りつづけている。
離れ屋の戸口に、別の男が立っていて、
「お帰りなさいまし」
と、ささやく。
辰蔵は、うなずき、中へ入った。
小さな土間の向うに、二間つづきの部屋があり、灯りが入っている。
奥の間に、三井覚兵衛と、河半の主人の嘉兵衛が坐っていた。
覚兵衛が、入って来た辰蔵を凝と見て、
「うまく、仕とめたようだな」
「うむ」
うなずいた辰蔵へ、嘉兵衛が笑いかけ、
「堀先生。うちの者の手引きは!?」
「遺漏はなかった」
「どこで殺った？」

と、三井覚兵衛。
「外手町の、道が二つにわかれているところだ」
「そうか。喜三郎には手先がついていたそうだな」
「うむ」
「どうした？」
「斬った」
「それでよい」
嘉兵衛が、小判の入った袱紗包みを堀辰蔵の前へ置き、
「半金の二十五両でござんす」
と、いった。
辰蔵はうなずき、袱紗の中をあらためようともせず、ふところへ仕舞った。
そこへ、酒肴が運ばれてきた。
女中ではない。
いずれも三十前後の男たちがはたらいている。
〔河半〕のあるじの嘉兵衛は、
「羽沢の嘉兵衛」
ともよばれてい、表向きは料理茶屋の主人だが、裏へまわると両国一帯の盛り場を縄張りにする香具師の元締なのだ。

盛り場で、種々雑多な商品を売る香具師の元締であるばかりでなく、見世物や芝居の興行、料理屋や茶店の利権にまで関係をもつ〔顔役〕であった。

両国の盛り場は、江戸屈指の賑いをもつ。

したがって、顔役としての羽沢の嘉兵衛の羽振りは非常に大きい。

嘉兵衛は、五十を二つ三つ越えていよう。

女房はなく、妾のおもんが〔河半〕の経営を一手に取りしきっている。

こうしたわけで、今夜、堀辰蔵に暗殺された石原の喜三郎も、よく〔河半〕へあらわれるし、羽沢の嘉兵衛とも、

「顔なじみ……」

の間柄なのである。

その喜三郎を殺した堀辰蔵へ、嘉兵衛が半金の二十五両をわたした。

ということは、五十両で、嘉兵衛が、

「喜三郎を殺してもらいたい」

と、辰蔵にたのんだことになる。

五十両といえば、当時の庶民の一家族の生活が五年は維持できる大金であった。

「ま、よかった。よかった」

盃をあげた嘉兵衛が、

「堀さんのおかげで、嫌な野郎が一人消えましたよ。ねえ、三井先生」

「ふむ……」

三井覚兵衛が微かに笑い、辰蔵へ酌をしてやってから、

「堀。ここの居心地はどうだ？」

「別に……」

例によって、辰蔵の口数は、きわめて少ない。

「なあ、堀……」

「え……？」

「これからは、ちょいと、おぬしもおれもいそがしくなる。ここの元締は、金を惜しまぬそうだから、ひとつ、ちからになってやろうではないか。どうだ？」

堀辰蔵は、鬱陶しげにこうこたえた。

「好きなようになさるがいい」

八

羽沢の嘉兵衛は〔河半〕に住んでいるわけでもない。

堀辰蔵は、それを知らぬが（知ろうともおもわなかった）、何処か、別の場所に、香具師の元締としての本拠を構えているらしい。

今夜は、秘密の事で、嘉兵衛と三井覚兵衛が辰蔵の離れへあつまったので、嘉兵衛の手下の

者も五人ほど〔河半〕へ来ているけれども、ふだんは、めったに姿を見せぬ。
羽沢の嘉兵衛の配下の者は上下合わせて、千をこえるといわれている。
江戸市中から郊外にかけて、大小の盛り場は数えきれぬほどだが、それぞれに香具師の縄張りがある。
したがって、これを束ねる元締たちが、隙あらば、少しでも他の縄張りを、
「わがものに……」
と、爪を研ぎ合っているらしい。
その勢力争いの陰には、おそらく、闇から闇へほうむられた血なまぐさい事件が起っては消え、消えてはまた起っているにちがいない。
今夜、堀辰蔵が殺害した御用聞きの喜三郎について、
「石原の喜三郎も図に乗って、あんまり方々へ、くびを突っ込むから、こんなことになるのだ」
と、三井覚兵衛が辰蔵へ洩らした。
それに対して辰蔵は、
「それは、いったい、どうしたことなのだ？」
問いかけることもしない。
黙然として、酒をのみつづけているのみである。
すでに、羽沢の嘉兵衛は帰って行き、離れ屋には三井と辰蔵のみが残っている。

「堀。大分に金も溜ったろうな」
辰蔵は、こたえぬ。笑いもしなかった。
「手に入った金を、何につかっているのだ？」
「こたえなくてはいけないのか、三井さん」
「なあに、こたえたくなけりゃあ、それでもいい。ただ何となく、おぬしが一体、どのように金をつかっているのか、尋いてみたくなっただけのことよ」
「安心なさい。尻尾をつかまれるようなことはせぬ」
「それは、わかっている」
三井覚兵衛は仕方もなさそうに苦笑を浮かべ、
「どうだ。明日、おれがところへ来ぬか。釣りにでも行こう」
辰蔵は、かぶりを振って、そのこたえとした。
「では、帰る」
三井は立ちあがり、土間まで送って出た辰蔵へ、
「女がほしくなったら、ここのおかみさんへ遠慮なくいうことだ」
「ふむ……」
「二、三日したら、また、会おう」
辰蔵は、うなずく。
格子戸を開け、通路へ出た三井覚兵衛を、植込みの陰で待っていた羽沢一味の男で、半次と

いうのが提灯を三井へわたし、先へ立った。

この半次だけは、いつも、この料理茶屋に詰めてい、いまも着物の上に〔河半〕の印半纏を羽織っている。

裏手の通用口から三井を送り出し、もどって来た半次が、離れの土間へ入り、

「先生……堀先生」

「何だ？」

「湯殿の仕度ができております」

「そうか」

堀辰蔵は、大刀こそ手にしなかったが、脇差だけは入浴のときも手ばなさぬ。

その脇差を持ち、辰蔵は通路へ出て、河半の浴室へ向いながら、案内をする半次へ、

「取っておけ」

一両小判をわたす。

「いえ、こんな……」

「取れ」

「へ……」

受け取った半次へ、辰蔵が、

「湯殿はわかっている。それよりも寝床の仕度をしておいてくれ」

「承知いたしました」

翌日の昼近くなって、石原の喜三郎が暗殺されたとの知らせが、黒江町の佐吉の耳へもとどいた。

そのとき佐吉は、万常の茶の間にいて、手先の紋次からの知らせを受けたのである。

「よし、わかった。お前は帰っていいぜ」

「では、これで……」

「うむ。念にはおよぶまいが、喜三郎が殺られたことについて、あまり、しゃべるのじゃあねえぜ」

「わかっておりますとも」

紋次が出て行くのを見送ってから、女房のおさわが、

「親分。これは、どうしたことなんです？」

「小汚えやつどもがすることだ。おれには、さっぱりわからねえよ」

佐吉は、まるで他人事のようにいった。

「だって、親分……」

「喜三郎に弱みをつかまれていた連中は、そっと赤の飯を炊いていることだろう」

「まあ……」

「喜三郎みてえなやつは、生きているより死んでもらったほうがいい。世の中のためということよ」

「そんなことを、大きな声で……」
廊下の方を気にするおさわへ、佐吉がいった。
「殺られたほうも、殺ったほうも、毒蛇のようなやつらだ。そんなやつらは、たがいに嚙みつき合い、殺し合うのがいいのさ」
こんなことをいう夫を見たのは、これがはじめてのおさわであった。
「そんなつまらねえことよりも、おさわ。お道は、うまくやっているだろうかね」
急にはなしが変ったので、おさわは何度も瞬きをしながら、
「そりゃあ、あの子のことですから、少しは辛抱もしましょうが、長つづきはしませんよ」
「何だ、お前。お道が逃げて来るのを、いまから待っているような口ぶりじゃあねえか」
「だって、それにちがいない」
「いいかげんにしろ」
「親分こそ、いいかげんにして下さいよ」
「何だと……」
「どうして、あの子を若松屋の鬼婆のところへなんかやったんですよ」
「鬼婆とは何だ。若松屋さんは、うちの……」
いいさして佐吉が立ちあがり、
「やれやれ、久しぶりで、お前と啀み合うところだった。おさわ。ちょいと出て来るぜ」
神棚から十手を下し、ふところへ入れた佐吉が廊下へ出て行った。

九

また、新しい年が来た。
お道は、十七歳になった。
「よくまあ、つづくものだねえ、親分……」
と、万常の茶の間で、おさわが悔しそうにいった。
「何のことだ？」
「お道のことですよ」
「若松屋さんでの奉公が、つづいているということか？」
「きまっているじゃありませんか」
「結構なことじゃあねえか、何をいっているのだ」
「お道は、うちにいるよりも若松屋にいるほうが良いというんですかねえ」
おさわは、不満そうである。
この正月に、お道は三日の暇をもらい、深川へ帰って来た。
そして、万常に一泊。酒屋の松次郎宅へ一泊した。
万常の佐吉夫婦はもとより、女中たちから板場の連中までが、お道を歓迎し、
「ちょいと見ねえ間に、すっかり女らしくなってしまったなあ」

「つらいことはないかえ？」

「これは、あたしたちからのお年玉だよ。ま、取っておいておくれ」

と、いうあんばいだし、松次郎宅へ泊れば近辺の人たちが入れかわり立ちかわりあらわれて、年玉をくれたり、

「むかし、私がしめていたものなんだけれど、縫い直しといたから、つかっておくれ」

帯をくれたりする。

母親を早くに失い、父親も非業の最期をとげ、親類もなく、孤独の少女となったお道への同情を、土地の人びとは忘れてはいなかった。

酒屋の松次郎の子の庄太は十三になってい、父親の手つだいをしているし、おしんは十歳になっている。

この二人の子には、お道が年玉をやって、一間に三人が床をならべて眠ったわけだが、

（あたしには、こんな弟と妹がいる……）

そんな気分になってきて、お道は、わけもなく泪ぐんだものだ。

松次郎とおきねの夫婦も、

「つらいことがあったら、何でも言っておくれよ」

しきりにいう。

お道は、

「どこへ行っても、同じですよ」

笑って、くわしいことを語らなかった。

「お道は、ああ言っているけれど、つらいにちがいない。きっと、つらい目をみているにちがいありませんよ」

と、万常のおさわは佐吉にいった。

「だって、ごらんなさい。あの子が大人びたことはたしかだが、すっかり痩せてしまったじゃありませんか」

たしかに、お道は深川にいたときよりも痩せた。

「やっぱりねえ……」

「頬ぺたが、何だか痩けてしまったみたいだよ」

万常の女中たちも、お道が若松屋へもどって行った後で、

「何にしても可哀想だねえ」

「私なんか、三十を越した今日までに、ずいぶんと可哀想な目に遇ってきたものだけれど……」

「冗談じゃありませんよ、おきのさん。男出入りは可哀想のうちに入りませんからね」

「ま、そりゃあそんなものだが……それにしても、小娘のころは両親もそろっていたし、まあ、しあわせに暮していられたのだからねえ」

「まったくねえ……」

まさに、お道が、

「つらくない」

といったら、嘘になってしまったろう。

ともかくも、去年の秋に若松屋へ奉公にあがって以来、内儀のお徳の笑顔を、お道は見たことがない。

「笑ったところで一文も損するわけじゃあないのにさ。どうしてまあ、あんなに愛敬がないんだろう、うちのお内儀さんは……」

いつだったか奥の女中部屋で、つくづくとおうめがいったとき、女中のおみつが、

「でも、おうめさんは、ずっとむかしも此処で奉公をしていたんでしょう？」

「ああ……」

「そのときから、いままでに一度も？」

「まあ、笑ったところを、見たことはないねえ」

「へーえ……」

「そりゃあ、旦那の代りに外へ出て行って、お得意さまを相手になすっているときは、笑い顔の一つや二つ、見せることもあるだろうよ。だけど、私は見たことがない。先ず、ないねえ」

「まあ、おどろいた」

「だからさ、お道っちゃんも大変なんだよ。わかるだろう」

「わかりますともさ」

「あの娘に逃げられたら、また、私たちが、お内儀さんにどやしつけられるのだからね。だから、私たちで、あの娘の面倒をよく見てやらなくてはいけないよ。それでないと、あの娘も辛抱しきれないからね」

「わかっていますよ」

奥の女中たちも、自分の損得を考えると、どうしても、お道を親切にあつかわざるをえないのだ。

もっとも、そうしたことがなくても、お道は他の女中たちに嫌われるようなことがなかったろう。

しかし、一日が終ると、お道は口をきくのも面倒なくらいに疲れ果ててしまう。

まだ、三月そこそこだから、心身ともに若松屋での暮しに慣れていない所為もあったろう。

だが、何といっても一日中、内儀のお徳の側に附ききりでいるのだから、たまったものではない。

十

お徳は、無類の潔癖であった。

「私は、なみはずれの癇症だから、そのつもりでいておくれ」

と、はじめに念を押されていたお道だが、なるほど、やかましい。

火鉢の縁に、うっすらと埃がついていても、

「お道。お前には眼の玉がついていないのか」
と、やられる。
何でも、このようにして叱りつけるのであった。
「埃がついている。ふいておくれ」
と、いえばよいではないか。
お道は、
（この、お内儀さん、素直じゃない）
そうおもった。
肌着は、日に二度替える。
「夏なんか、三度も四度もだよ。いまから覚悟しておおきよ」
と、おうめがいってくれた。
洗った肌着には、いちいち、火熨斗をかける。
「お道。これで洗ったつもりなのか。濯ぎの手間を惜しむから、こういうことになるのだ」
洗い直しをさせられることも、めずらしくなかった。
むろん、髪は毎朝ゆい直す。
近くの女髪ゆいが通ってくるのだが、ときには午後になって、お道に撫でつけさせることもある。
お道は、そんなことをしたことがないから、はじめのうちは、

「お前の手には、指がついているのかえ」
とか、
「まんぞくに、髪ひとつ撫でつけられないのなら、女なんかやめておしまい」
などと、もう、実にひどいことをいう。
「女をやめろ」
といわれたって、どうしようもないではないか。
お徳の入浴は、朝である。
こんな商家の内儀を、
（見たことも、聞いたこともない）
お道であった。
主人の若松屋長兵衛や息子の芳太郎も、いうまでもなく、朝風呂なぞに入りはしない。
（ぜいたくな、お内儀さんだ。冥利が悪いとおもわないのかしら……）
お道は、そっと眉をひそめた。
入浴のときは、附ききりで世話をする。お徳の背中もながす。そのながしかたがむずかしい。
「人の背中が、まんぞくに洗えないくらいなら、御飯を食べるのをやめておしまい」
と、いわれかねないのだ。
（旦那をさし置いて、朝湯に入るなんて……）
お道は、あきれている。

お徳が入浴する前には、風呂場をしらべて、みがきたててておかなくては気に入らない。
こうしたわけで、お徳の前には、夫の長兵衛も頭が上らなかった。
したがって奉公人一同、お徳の前ではぴりぴりしている。
お徳は、今年で五十二歳になるそうだが、裸になると意外に肉置きもあって、小さいが、こんもりとした白い乳房など、とても五十をこえた女のものには見えなかった。
主人の長兵衛は、かつて、若松屋の手代だったのだそうな。
それを、先代が見込んで、ひとりむすめのお徳の聟にした。
つまり、養子ゆえ、妻に頭が上らぬというわけだろうが、それにしても度がすぎている。
小柄な若松屋長兵衛は温和な老主人で、ただもう一生懸命に商売へ打ち込んでいて、お徳の居間へ姿を見せることもない。
この夫婦は、寝間も別なのである。
「よくまあ、若旦那が生まれたものだと、つくづくそうおもうよ、あたしは……」
と、おうめが、お道ひとりだけにささやいたものだ。
そのとき、お道は面を伏せ、くびすじを真赤にして返事もできなかった。
若松屋長兵衛は、それでも月に一、二度、妻の居間へあらわれることがあった。
そのときは、商売の上の相談をもちかけるわけで、
「これこれにしたらよいとおもうが、どうでしょうな？」
口のききようも、まことに丁寧なものだ。

お道の目には、てきぱきと指図をするお徳が女主人で、
（旦那のほうが、番頭さんに見える……）
のであった。
（ああ、嫌だ。なんて女なんだろう、ここのお内儀さんは……）
それでも尚、いままで辛抱してきたのは、一に、お道の女の意地が出てきたからであろう。
（こうなったら、お内儀さんが、いくら突っ込んできても負けをとらないように、はたらいて見せてやる）
このことであって、われながら、お道は自分の底意地の強さを知ったおもいがした。
また一つには、おうめたち奥向きの女中たちのいたわりと親切があったからだ。
また、去年の暮れに、こんなことがあった。
ふだんは奥へ来ても、お道に口をきいたことがない主人の長兵衛が、
「あ、ちょっと……」
廊下を通りかかったお道を自分の居間へよんで、
「お小づかいにおし」
なんと小判で一両も紙へ包んで、お道へ手わたし、
「たのみましたよ。つらいだろうがね、どうか一つ、辛抱をしておくれ、いいかえ。たのみましたよ」
その声には嘘いつわりもない真情がこもっていた。

「こんなに、いただきましては困ります」
「いいのだよ。とっておきなさい。だれにもいわぬほうがいい」
「でも……」
「いいから、たのむから……」
こういって長兵衛は、そそくさと廊下へ出て行ってしまったので、お道も金を仕舞うよりほかに仕方もなかった。
正月になって、お徳が三日も休みをくれたのも意外だった。
それのみか、
「これは、万常の御夫婦に……これは酒屋の松次郎さん御夫婦に……」
こういって、それぞれ、立派なみやげの品をととのえ、お道にわたしたのである。
このときばかりは、お道も悪い気持ちではなかった。
お徳は、お道に、
「お年玉だよ」
と、金一分をよこした。
一分の四倍が一両である。
けれども、
「御苦労さま」
の一言もなかった。

例によって、笑顔も見せぬ。
正月の休みを終えて帰ると、また、去年と同じような明け暮れとなり、お道は歯を喰いしばってはたらきはじめた。
躰もつかうが、神経もつかう。食欲はあっても、これでは肥れなかったろう。
正月も終ろうとする或る夜の女中部屋で、おうめが、
「ちょいと、また、はじまったよ」
と、いい出した。
「何が、はじまったんですよ」
「お内儀さんのこと？」
おさんとおみつが膝を乗り出すのへ、
「よくまあ、飽きないねえ」
おうめがためいきを吐いた。
お道は隅の寝床へ入っていたが、まだ眠ってはいない。
「何が飽きないんですよ？」
「若旦那のことさ」
「あら……」
「まあ……」
おさんとおみつが、顔を見合わせた。

おうめは飴玉を口へほうり込んで、
「嫌になっちまうねえ」
身ぶるいをして見せた。

玉子焼

一

若松屋長兵衛と、お徳の間に生まれた一人息子の芳太郎は、今年、三十を一つ越えた。
当時、三十一にもなる男なら、妻があるのはいうまでもなく、二人や三人の子もちなのが当然といってよい。
ところが芳太郎は、いまだに独身なのである。
したがって、子もない。
長兵衛夫婦にしても、
「孫の顔を早く見たい」
という年齢に達しているわけなのだが、そうおもうのは主人の長兵衛だけらしい。
芳太郎について、
「若旦那は、もう三度も、お嫁さんをもらっているんだよ」

女中のおうめが、そっと、お道へ知らせてくれた。

「三度も……」

前にも、そうしたうわさを聞いていないではなかったが、まさか、三度も……とはおもわなかっただけに、お道は目をみはって、

「ほんとうなんですか？」

「ああ、ほんとうだとも」

「どうして、あの、三度も……？」

「わからないかえ」

「ええ」

「お前さんにも、わからないはずがないだろう。うちのお内儀さんの気に入るような嫁が来るものか。どんな嫁が来たって、ひとたまりもありゃあしない」

なるほど、そういわれれば、そうかも知れない。

「でも、若旦那がそんなことを承知したのでしょうか？」

「したから、いまだに女房がいないんじゃないか」

「……」

「このうちじゃあね、お内儀さんにはだれ一人、逆らえないのさ。お道っちゃんも大変だねえ。察しるよ。さ、おあがり。このお饅頭は田原町の三好屋のだから旨いんだよ。昼間、旦那のところへ来たお客が食べなかったもんだから、そっと袂へ入れておいたのさ。お前さんに食べさせようとおもってね」

「すみません」

「さ、おあがり。お茶をいれてあげようね」

おうめは、まことに親切であった。

お道に逃げられてはという気持ちもあるだろうが、ちかごろは、そうした〔利害〕をぬきにして、おうめはお道に好意を抱きはじめているようだ。

「旨いかえ？」

「はい」

「それにしても、ほんとうに、よくやっているよ、お前さん」

「いいえ、気がきかないものですから……」

「たのむよ」

「え？」

「逃げないでおくれよ」

「ええ……」

うなずきはしたが、お道は、何だか若松屋ではたらくことに嫌気がさしてきた。

その夜。

寝床へ入って、おうめの鼾を聴きながら、お道はなかなか寝つかれなかった。

（お内儀さんも、ひどいことをする……）

そういえば、痩せた青白い顔つきの芳太郎が、母親のお徳に叱りつけられているときなど、ちらりと上眼づかいに母親を見る、その眼つきに何か異様な光りが宿っていたのを、お道はおもい出した。

奉公人の前で、三十男の息子を叱りつけるようなことはせぬが、居間へ呼びつけて、きびしく商売上の注意をあたえるときなど、お道だけは見るともなく見てしまうことがある。

（あんなに、しなくてもいいのに……）

しかも、三度も嫁をもらっておいて、離縁にするとは、何ということであろう。

嫁のほうが、辛抱しきれずに逃げるのだろうか。

それとも、お徳が追い出してしまうのだろうか。

（居たたまれないようにするのだろう……）

それでも尚、四度目の嫁をもらうという。

いずれにせよ、主人の長兵衛がそれをのぞんでいることは当然といってよい。

養子に入った身として、老舗の若松屋の将来をおもえば、一人息子に嫁を迎え、息子の次の時代の跡つぎをもうけておかなくてはなるまい。

（若旦那も若旦那だ。男のくせに、何故もっと、しっかりしないのだろう）

ちぎりを結んだ新妻を、母親のいうなりに離縁してしまうなどとは、

（はなしにも何も、なりゃあしない）

寝床の中で、お道は腹が立ってきて、たまらなくなり、

（今度、お内儀さんがそんなことをしたら、私も出て行ってやる）

お道は、こころを決めた。

そうして、ようやく眠りにつくことができた。

この縁談は、急速にすすめられた。

若松屋長兵衛も、店の将来と息子のために必死となって、お徳を説きふせたらしい。

今度の芳太郎の相手にえらばれたのは、大伝馬町二丁目の、これも小間物問屋の加賀屋幸之助のむすめ・お信であった。

お信は、初婚ではない。

一度、芝の田町九丁目の紙問屋・近江屋九兵衛方の次男の嫁となったが、夫が病死したので、三年前に実家の加賀屋へもどって来たのだそうな。

おうめは、

「うちのお内儀さんの評判は、加賀屋さんでもよく知っていなさるだろうに、よくまあ、むすめを嫁に出す気になったものだ」

そういったが、しかし、加賀屋のお信は俗にいう「出もどり」だし、年齢も二十七歳になる。

当時は、そうした女の再婚は、なかなかにむずかしい。

あったとしても、妻に死なれた中年か老年の相手で、子が何人もいるというわけだから、若松屋の芳太郎ならば三十をこえたばかりだし、お信とも夫婦として年齢が釣り合っている。

三度も結婚をして、そのたびに妻と離婚をしている芳太郎だし、母親のお徳についても加賀屋はわきまえていた。

それに、お信は勝気な女で、これが実家へもどって来ると、加賀屋の跡つぎの楠太郎の嫁と、たちまちに折り合いが悪くなってしまった。

それやこれやで、加賀屋でも、お信を、

「もてあましていた……」

ようである。

それゆえ、

「気が強いお信ならば、若松屋へ嫁いでも、何とかうまくやって行くだろう」

と、加賀屋の主人夫婦は考えていた。

一方、芳太郎にしてみれば、三度の離婚が評判となってしまい、

「うちのむすめを若松屋の嫁にするなぞとは、とんでもないこと……」

だというので、いまは縁談を持ち込まれることもない。

そこで、若松屋長兵衛が、同業の加賀屋のお信へ目をつけて、懸命にはなしをすすめたものらしい。

芳太郎は、四度目の縁談に、ほとんど関心をしめしていない。

だからといって断りもせぬ。

(勝手にするがいい。どうせ、居ついてくれるわけでもなし……)

というところなのであろう。

お徳は、一人息子の嫁が、

「出もどりだろうと何だろうと、そんなことは、ちっとも気にしていませんよ」

と、夫の長兵衛へいったそうな。

「ねえ、お前さんに一つ、たのみがあるのですがね」

そのとき、長兵衛がお徳に、

「お前さんから見れば、今度の嫁も気に入るまいが、これで芳太郎も四度目ゆえ、まあ、目をつぶってやって下さいよ」

と、恐る恐るいうのへ、

「ええ」

お徳は苦笑をしてうなずいたので、さらに、

「芳太郎も可哀想ですからね」

念を入れると、お徳が意外におだやかな口調で、

「わかっていますよ。それに、いつだって私は、芳太郎の嫁に出て行けといったことはありませんよ。向うさまで、出て行ってしまうんですから……」

「そりゃ、まあ、そうだろうが……」

あわてて、長兵衛は店の方へ引き返し、大番頭の善助へ、

「番頭さん。どうやら今度は、うまく行きそうですよ」

「それは、まあ、ようございました」
「お徳は利巧な人だから、店の事も考えてくれたらしい」
「そうでございましょうとも。ごもっともなことで」
「私も、これで一安心というところだ」

二

縁談がまとまると、双方とも初婚ではないので、婚礼も簡略にすることになり、この年の秋の吉日をえらび、加賀屋のお信が若松屋へ嫁入って来た。

お信は、お徳の若いころをおもわせるような、細っそりとした躰つきだったし、いささか険はあるが美しい顔だちで、えりあしが抜けるように白かった。

芳太郎も、このお信を見て、それまでの無関心はどこへやら満面に血をのぼせ、そわそわしながら、婚礼の夜を迎えた。

その日は、午後から降りはじめた雨が夜に入って激しくなったけれども、

「雨降って地固まるというから、今度は、きっと、うまく行きますよ」

若松屋長兵衛は、上機嫌であった。

その日の夜ふけに……。

上野の山下から車坂の通りへ、堀辰蔵があらわれた。

上野山下から下谷広小路にかけては、天台宗の関東総本山であり、徳川将軍家の菩提所でもある東叡山・寛永寺の門前町といってもよい。

西に不忍池をひかえ、さまざまの商舗や料理屋、仮小屋の見世物、茶店などがたちならび、両国や浅草の盛り場に劣らぬ賑いを見せている。

だが、この時刻には商家の戸も閉ざされ、料理屋の灯も消えた。

雨は、まだ熄まぬ。

堀辰蔵は雨合羽に身を包み、饅頭笠をかぶっていた。

日が暮れる前に、例の料理茶屋〔河半〕を出た辰蔵は、町駕籠に乗り、不忍池の南側の池之端仲町までやって来た。

道をへだてて不忍池をのぞむ町すじの細道を入ったところの、小ぎれいな家へ入り、そこで酒をのみ、腹ごしらえをすませ、二階の一間で一寝入りしていたのだ。

すべては、両国一帯の盛り場を束ねている香具師の元締・羽沢の嘉兵衛の指図によるものであった。

そもそも、この仲町の家というのも、何やら得体が知れぬ。

池之端仲町は、高級品を扱う商舗が多い。

それでいて、不忍池に面した側には料理茶屋や出合茶屋もあり、艶めいた匂いもする。

堀辰蔵が入った家は、その、どちらでもない。

細道に面した家の間口は二間ほどで、格子戸を開けると石畳の通路になっていた。

これには、辰蔵もおどろいた。
こうした家の造りを、はじめて見たからである。
格子の内は家の中だとおもっていたのに通路になっている。つまり、家の玄関構えの造りが門の代りになっているようなものだ。
しかも、せまい。
通路の両側は、隣家の羽目ということだ。
辰蔵には、いつも河半にいて、身のまわりの世話をしてくれる半次が附きそって来た。
通路の正面の戸を叩いて、半次が何かいうと、板戸が内側からひらき、白髪の老爺が顔を出し、辰蔵へ頭を下げた。
「先生。おあがり下せえまし」
こういって、半次が二階へ案内をしてくれ、酒だの料理だのが運ばれてきた。
老爺が運んで来るのを半次が受けて、器用に膳ごしらえをし、酒の燗をつける。
こうした仕度は、この家でしたのではあるまい。
近くの料理屋から届けられたものにちがいない。
今夜も辰蔵は無口であった。
黙然として、半次がすすめるままに酒をのみ、料理を口へ運ぶ。
それが終ると、奥の小間へ入り、身を横たえた。
夜ふけになり、だれかが戸を叩き、中へ入ってきて半次とささやき合っていたようだが、ま

た外へ出て行った。
その後で、半次が二階へあがって来て、
「先生……堀先生……」
「うむ……」
「お目ざめでございますか？」
「うむ」
「お仕度を……」
起きあがった辰蔵が帯をしめ直し、裾を高々と端折って、大刀を腰にした。
半次は、これから辰蔵が出向く道すじをくわしく教え、
「一足お先へめえります」
と、雨の中を飛び出して行った。
その後で、半次と同じような雨仕度をし、辰蔵が老爺に見送られて外へ出たのである。
山下から車坂へ、堀辰蔵は、ゆっくりと雨の夜の闇を掻きわけて歩む。
半次が「お急ぎにならねえように」と、念を入れてよこしたからだ。

三

上野山下から車坂へ出た堀辰蔵は、左側に上野の山、右に組屋敷がならぶ折れ曲った道を、

坂本の通りへ出た。

この通りは、金杉から三ノ輪を経て千住大橋へつづく。

したがって奥州・水戸・日光街道の道すじにもあたるわけで、夜が更けても、酒や飯を売る店には灯りが消えず、人通りも絶えてはいない。

荷馬をひいた男が酒のにおいをさせて、辰蔵と擦れちがって行った。

雨足は、いくらか、おとろえてきたようである。

先に出た半次の姿は、何処にも見えなかった。

半次は、

「ゆっくりと歩いて車坂から坂本、金杉のあたりまでおいで下せえまし」

と、いったのみだ。

辰蔵は、そのとおりに歩いている。

と……。

坂本三丁目と四丁目の境になっている細道から、ふわりと人影が浮いて出た。

辰蔵が雨合羽の袖で囲っていた提灯をさしつけて見ると、

「先生。あっしです」

半次が近寄って来て、

「こっちでござんす」

と、先へ立った。

左へ切れ込み、いくつもの寺院に囲まれた細道をすすむうちに、もはや、灯火も見えなくなってきた。

このあたりは、根岸の里になる。

むかしの本に、

「呉竹の根岸の里は上野の山陰にして幽婉なるところ。都下の遊人これを好む。この里に産する鶯の声は、世に賞愛せられたり」

などとあって、風流人の隠宅や、諸家の寮（別荘）が少なくない。

（ここが、江戸の市中なのか？）

とおもうほどに、あたりの景観は、まったく田園のものといってよかった。

現代の根岸に、その面影は消滅しているが、筆者が幼年のころ、一年ほど根岸に暮したときのことを振り返ってみると、そこはかとなく、江戸から明治初期にかけての根岸の匂いがただよっていたようだ。

さて……。

寺の塀に身をつけていた男が、半次へ近づいて来て何かいい、先へ立った。

半次は辰蔵へ、うなずいて見せる。

三人は、百姓地と木立がひろがっている闇の中の道をすすみ、小川に沿って左へ折れ、竹藪の中の細道へ入った。

「灯りを消して下せえまし」

半次が辰蔵へささやいたのは、このときである。
辰蔵は、提灯の火を吹き消し、半次へ手わたした。
竹藪の向うに、灯りが洩れている。
どこかの寮らしい。
灯りは、雨戸の透間から洩れているのだ。
三人は、竹藪の中へ身を隠した。
「ちょっと、お待ちを……」
辰蔵と半次を案内してきた男が、辰蔵へそういって竹藪から出て行った。
どこへ行ったのか、わからぬ。
「あの家か？」
と、辰蔵。
「さようで……」
「うむ」
うなずいた辰蔵は、しずかに雨合羽をぬいだ。
半次が、これを受け取り、
「あっしは最後まで、此処をうごきません。ようございますね？」
念を入れてよこした。
「わかった」

そこへ、案内の男が、別の男と共にもどって来た。
別の男は、砂茶屋の平助といい、これも羽沢の嘉兵衛の手下であり、嘉兵衛の信頼が厚いらしい。
年齢も五十に近く、顔いちめんに痘痕が浮いているので、若い半次などは、
「痘痕のおやじさん」
と、よんでいる。
面と向ってそういわれても、砂茶屋の平助は、
「あいよ」
きげんよくこたえて、少しも怒らぬ。
これまでに堀辰蔵は、河半へあらわれた平助を数度見ている。
「先生。御苦労さまでございます」
と、傍へ寄って来た平助が頭を下げて、
「いつでも、ようございます」
「そうか」
「あの灯りが洩れている座敷に、男が三人おりますんで」
「ふむ……」
「その中の、小さな躰つきの年寄りだけが、目ざす相手なんでございます」
「年寄り……町人か？」

「はい」
「それを斬ればよいのだな？」
「さようで……ですが、先生。別の二人のうち、一人は三十がらみの浪人で、こいつがちょいと……」
「手強いというのか？」
「へえ」
「もう残る一人は？」
「これも、油断のならねえやつではございますが……」
「町人か？」
「姿だけは、ね」
「わかった」
立ちあがった辰蔵は笠をぬぎ、左手に持ち、受け取ろうとする半次へ、かぶりを振って見せた。
「こう、おいでなせえまし」
砂茶屋の平助のみが先へ立ち、辰蔵の手を取って竹藪を出た。
「雨戸には桟が掛かっておりません」
平助が、ささやいた。
家の中のだれかが、こちらに内通していて桟のさるを外しておいたらしい。

垣根を越えて、二人は灯りが洩れている雨戸へ近寄った。
また、雨が激しくなってきた。
その雨音は、忍び寄る二人の気配と足音を消してしまっている。
平助が、にやりとして、
「ようございますかえ？」
いいながら、腰に差し込んでいた小さな刃物を引き抜き、雨戸の透間へ差し込んだ。
うなずいた堀辰蔵が大刀を抜きはらった。
平助が見事な手ぎわで端の雨戸を引き開けるや、辰蔵が中へ躍り込んだ。
そこは縁側であった。
一気に走って、辰蔵が障子を引き開けた。
「だれだ！」
叫んだ浪人者が片膝を立て、大刀をつかんだのへ、辰蔵は左手の笠を投げつけざま、床ノ間を背にしていた六十がらみの老人へ抜き打ちの一刀をあびせかけた。
「あっ……」
老人は腰を浮かせたままの姿勢で、一瞬のうちに、頸すじの急所を辰蔵に切り割られている。
「うぬ!!」
笠をはらいのけ、大刀を抜きかけた浪人へ振り向きざま、辰蔵が刃を打ち込んだ。
血が、しぶいた。

残る一人は何か叫びつつ、泳ぐようにして次の間へ逃れた。

「むう……」

唸り声をあげ、刀の柄を握ったまま尻餅をついた浪人の顔が赤絵具で塗りつぶされたようになっている。

老人のほうは倒れ伏したまま、ぴくりともうごかなかった。

何とも凄まじい早わざであった。

身をひるがえした堀辰蔵は、縁側へ走り出た。

家の中で、叫び声と足音が起りはじめた。

辰蔵は体当りに雨戸を外し、庭へ落ちる雨戸と共に転げ出た。

砂茶屋の平助の姿は、もう何処にも見えぬ。

それも打ち合わせたとおりで、辰蔵は迷うことなく、垣根を飛び越えて竹藪の中へ走り込んだ。

「先生。こっちです」

と、半次の声がした。

二人は、竹藪をぬけ出し、闇の中の道を走りつづけた。

四

翌日の日暮れどきに……。

堀辰蔵は、玉子焼を肴に酒をのんでいる。

小玉庵という蕎麦屋の二階座敷であった。

小玉庵は不忍池の西側の茅町一丁目にあって、前夜、辰蔵が案内をされた池之端仲町のふしぎな家からも近い。

あれから辰蔵は、半次が誘導するままに根岸の里から西へ逃げ、芋坂から谷中の天王寺へ抜け、仲町の家へもどって来た。

辰蔵の着物についていた返り血は、雨が洗いながしてしまっていた。

湯をあびた辰蔵が着替えをすませたとき、砂茶屋の平助が顔を見せ、

「もう、大丈夫でございますよ。ゆっくりと、おやすみなすって下さいまし」

と、いってから、

「それにしても堀先生。あまりに、あざやかなお手並に、おどろきましてございます」

辰蔵は、こたえず、半次が茶わんに汲んで出した冷酒を一息にのんだ。

このとき平助が、明日の夕暮れに茅町一丁目の小玉庵へ来てもらいたいとの、三井覚兵衛の伝言を辰蔵へつたえたのである。

小玉庵は、小体な蕎麦屋だが、二階に客用の小座敷が一つあって、気のきいた酒の肴も出す。

辰蔵は玉子焼をたのみ、酒をのみはじめた。

昨夜の雨は、すでにあがっている。

間もなく姿を見せた三井覚兵衛が苦笑して、
「また、子供が食うようなものを……」
と、玉子焼を顎でしゃくって見せ、
「そんなものは、おぬしに似合わぬ」
辰蔵は、だまっている。
「昨夜は御苦労」
「……」
「羽沢の元締も満足している。よろしくとのことだ。残りの半金の二十五両と、それに羽沢の元締が餞別として二十両よこした。さ、取っておくがいい」
「餞別……？」
「一年ほど、江戸から出て行ってもらいたいのだ」
「ふむ……」
この一年の間に、堀辰蔵は、御用聞きの喜三郎と、昨夜の老人とを暗殺し、合わせて百両の仕掛金を手にしている。
百両といえば、なまなかの金ではない。
庶民の一家が十年を暮すことができるほどの大金であった。
そのほかに、羽沢の嘉兵衛が二十両もの餞別をよこし、
「しばらくの間、江戸から姿を消してくれ」

というのは、昨夜の暗殺が嘉兵衛たちにとって、よほど重大な事になるのであろう。
殺した老人は、
（大物らしい……）
と、辰蔵は看た。
そうなると、相手方も必死になって犯人を探しまわるにちがいない。
そこで万一のことを考え、堀辰蔵を江戸から逃すことにきめたのであろう。
（香具師どもが縄張りを争っているのか。どうも、そうらしい）
だが、そんなことは、辰蔵に関わり合いのないことだ。
「どうだ、堀……」
「む？」
「また、大坂へもどってくれるか。大坂が嫌なら、別のところへ手をまわしてもよいが……」
「何処でもよい」
「そうか。明日中に、旅立ちの仕度をととのえる。そのつもりでいてくれ」
うなずいた辰蔵が、盃を置いて、
「三井さん……」
「何だ。何でもいってくれ」
「いつであったか……私が江戸へもどって来たとき、深川の、八幡宮の参道にある料理屋へ立ち寄った……」

「うむ、うむ。あれは、万常といってな」
「あそこの酒も、料理もよかった」
「おぬし、口へ入れるものの味に関心があったのか、おどろいたな」
「明後日、江戸を発つ前に、いま一度、行ってみたい。これから、つき合って下さらぬか？」
「ふうむ……」
大きく息を吸って、三井覚兵衛が辰蔵を凝と見つめた。
辰蔵の肚の内を探っているかのような眼ざしであった。
それも一瞬のことで、
「実は、あの万常という料理屋なのだが、おれやおぬしが酒をのむ場所ではないらしい」
「……？」
「羽沢の元締に、おぬしと万常へ立ち寄ったことをはなしたら、とんでもないという顔つきになってな」
「ほう……」
「おれも、そのときまで知らなんだが……実は、あの万常の亭主というのは、深川でもそれと知られた御用聞きなのだ」
堀辰蔵は、黙然と聞いている。
その表情には、例によって何のうごきも見られぬ。
「黒江町の佐吉という御用聞きで、こいつ、羽沢の元締なぞとは最も肌が合わぬというやつさ」
「ふうむ……」
「ま、近寄らぬがよい」
「わかった」
「此処がいい。ゆっくりと此処でのもう」
三井覚兵衛が手を打って、小女をよんだ。
窓の向うに、不忍池が血のような残照の色を水に映していた。

五

加賀屋から若松屋へ嫁いで来て、お信は半年と保たなかった。
芳太郎との夫婦仲が悪くなったのではない。
やはり、姑のお徳との間が拗れてしまったのである。
芳太郎は、お信を一目見て、たちまちに上せあがってしまったほどだから、
（今度ばかりは、逃げられてなるものか……）
とばかり、人がちがったように四度目の妻を大事にした。
また、父親の若松屋長兵衛も、
（今度、逃げられたら世間の物笑いになる。いや、もう笑われているにちがいないが……何と

しても、今度で落ちつかせたい）

そうおもえばこそ、妻のお徳へ念を入れたわけだし、芳太郎にも、

「今度は、お徳も口やかましいことはいわないだろう」

と、告げておいた。

お道も、若松屋で新しい暮しに入ったお信を見て、

（あ、これなら、きっと、うまく行きなさるだろう）

と、感じた。

前に、紙問屋の近江屋へ嫁いでいただけに、やること為すことに率がない。

いかにも勝気な女らしく、めったに笑顔を見せず、おうめやおさんなど奥の女中たちへも、気に入らぬことがあれば遠慮もなく叱りつけるというわけで、

「ふうん、こりゃあいい」

と、おうめが皮肉に、

「お内儀さんの二代目ができて、御家は御安泰だねえ」

そういったものだ。

お道は、お徳に附いているので、お信に叱られたことはない。

お徳も、あまり、お信とは口をきかなかった。いや、きかぬようにしているらしい。

口をきかぬために、なるべく顔をあわせぬようにしていたのだ。

芳太郎は、もう有頂天になって、お信との新婚をたのしんでいるかのようであった。

長兵衛も、

（しっかりものの嫁……）

と看て、満足げである。

しかし、ついにお徳との間が険悪となってしまった。

はじめのうちは、苦笑いにまぎらわせ、お徳はお徳なりに我慢をしていたのだろうが、やはり、お徳の目から見れば、お信のすべてを納得するわけにはまいらなかったのであろう。

（いずれは若松屋の内儀として、一切を取りしきらなくてはならないのだから、いまのうちに、仕込むことだけは仕込んでおかなくては……）

そのおもいもあったのだろうが、年の瀬が押しつまり、何処の商家も節季の緊張に包まれ、いそがしい明け暮れになると、お徳は我慢をしかねたかして、お信へ、いろいろと注意をあたえるようになった。

お信はお信で、姑の叱責に堪えていたのであろう。

ところが……。

年が明けて正月も終ろうとする或日のことであったが、お信は憤然として実家の加賀屋へ帰ってしまった。

そのとき、お道は何が起ったのか知らなかった。

お徳の使いに出ていたからだ。

お道は、十八歳の新年を迎えている。

お道が使いに出ている間に、お徳は嫁のお信を居間へ呼び寄せ、何か、きびしく叱りつけたらしい。

お徳が、お信を叱るのは、他にだれもいないときにかぎっている。芳太郎の嫁としての体面を考えてのことだ。

ゆえに、お道も、お信が叱られている場面を、わが目に見たことは一度もない。

「うちのお内儀さんも、大分変ったよ。前は、私たちがいようが構ったものじゃなかった。呼びつけて大声に叱りつけて、そりゃあ、ひどいものだったけれど……さすがに今度は、気をつかっていなさるようだ」

と、おうめが洩らしたこともあった。

だが、ついに決裂してしまった。

前の嫁たちは、泣き泣き実家へ帰って行ったそうだが、今度のお信はちがう。

何と、叱りつける姑のお徳の頬へ、いきなり平手打ちをくわせ、

「加賀屋の信を、見そこなってもらいますまい」

という捨台詞を残し、胸を張って堂々と実家へ帰って行った。

折しも廊下を通りかかった長兵衛が、おどろいて割って入ったが、お信はさっさと若松屋を飛び出してしまった。

そのとき、お徳は長兵衛にこういったそうな。

「お信に、もどる気があるなら、もどってくれ、私がそういっていたとつたえてやって下さい。お信は、これまでの嫁の中で、いちばん見どころがある」

長兵衛は、芳太郎を連れ、すぐに加賀屋へ駆けつけて行き、お徳の言葉をつたえたが、お信は、

「この上、若松屋さんにいたら、私は死んでしまいます」

頑として、承知をしなかった。

つまり、お徳の顔を見たり、声をきくだけで、食欲が消えてしまうし、鳥肌がたつ。だから、いまに病気になってしまうというのだ。

これを聞いて、お徳はめずらしく声をたてて笑い出した。

「笑い事じゃありませんよ。ねえ、お前さんも、もう少し考えておくれでないか」

と、長兵衛が、うらめしげに妻を見やるのへ、お徳が、

「惜しい……」

「え？」

「いいえ、お信のことですよ」

「そんなに、いまになって惜しがるくらいなら、何故……」

「ですがねえ、お信は気が強いだけではなく、女の見栄がありすぎるのですよ。それが、お信の倖せの邪魔をしている。ですから、そこを私が直してやろうとしただけなのですがねえ」

「そ、そんなことをいったって、お前さん……」

若松屋長兵衛は、困惑しきっていた。

芳太郎のほうは、

「泣くにも泣けないってありさまだよ。若旦那は部屋へこもって出てこない」

と、おうめがいったとおりだ。

長兵衛は、あきらめずに何度も加賀屋へ足を運んだが、どうにもならぬ。

こうなったら、お信は一歩もゆずろうとはせぬ。

加賀屋のほうでも、気の強いお信が帰って来ることを好まないのだし、しかも、理由は何であれ、姑の顔を打ったというのは、お信に負い目がある。

そこで一生懸命に、お信を説きふせようとしたが、やはりだめであった。

こうして、芳太郎とお信の離婚が、はっきりと決まったのは、二月の下旬であった。

六

いよいよ、お信がもどって来ないと知るや、芳太郎は自分の部屋へ引きこもったきり、店へも出て来なかった。

台所から酒を運ばせ、それを冷のままでのみながら、一日中、蒲団をかぶっている。

「いまに、芳太郎に蛆が涌くだろうよ」

などと、お徳は苦笑をした。

息子が、お信には夢中だったことを知っているだけに、

「まあ、いい。しばらくは好きにさせておいてやろう」

お徳は、何もいわなかった。

さすがに、気の毒だとおもったのであろう。

そうした或日の朝のことであった。

例によって、お徳は朝の入浴をすませてから、居間で朝餉の膳についた。

お徳の朝の膳には、三日に一度、玉子焼が出る。

先代（お徳の亡父）のころから若松屋に奉公をしている老女中のお吉が台所の采配を振っていて、お徳が食べる玉子焼は、お吉がつくる。

幼少のころからの、お徳の好物なのであろう。

玉子焼といっても、料理屋で出すようなものではない。二個の卵を薄焼にしたのを、くるくると巻くように折りたたみ、二つに切って皿に盛っただけのものだ。

そのほかには香ノ物と味噌汁だけで、お徳の食膳は意外に質素なものであったし、七十歳のお吉がととのえる食膳に、お徳は文句をいったためしがない。

お徳の食事の給仕は、いうまでもなく、お道がつとめる。

この日の朝とて、例外ではなかった。

奥庭の朝の日ざしもやわらかい。

一雨ごとに暖気が加わってきて、郁李が淡い紅色の小さな花を咲かせている。

桜花の蕾も、ほころびはじめたということだ。

お徳は箸をうごかしていたが、何とおもったか、二つに切った玉子焼の一つを小皿へ取って、
「おあがり」
お道の前へ置き、身をひねって、うしろの茶簞笥から菓子を取りわけるときにつかう箸を出し、お道へ、
「さあ……」
と、手わたした。
ぼんやりと、お道は箸を受け取ったが、まるで、夢を見ているような気持ちであった。
かつて、ないことではある。
お徳が、自分の食膳の物を給仕の女中へ「おあがり」といって、あたえたことを知ったなら、若松屋の奉公人のすべてが目を白黒させたにちがいない。
いや、主人の長兵衛だとて呆然となったろう。
「おあがり」
「は、はい……」
「旨いから、おあがり。何をしているのだろうねえ、この子は……早く、おあがり」
笑いもせずに、お徳がいう。
お道は身を硬くし、ふるえる手に箸をとって、玉子焼を口へ入れた。
「旨いかえ？」
「はい」

こたえたが、正直のところ、味がわからなかった。
「暖くなったねえ」
「はい」
「お茶をもらおうか」
「あ……申しわけございません」
「お道」
「はい？」
「今日は、いい日和だから、深川へ遊びに行っておいで」
「……？」
これにも、おどろいた。
さらに目をみはったのは、お徳が二分金を紙へ包み、
「お小づかいだよ」
お道の前へ置いたからである。
商家の奉公人の休日は盆と正月の二度に決まっている。
それゆえ、お徳は、
「私の使いに出たことにしておくから、だれにもいうのじゃない。日が暮れるまでに帰っておいで」
と、念を押したのだ。

「あの……」
「何だえ？」
「こんなにして、いただきましては……」
「うるさいねえ」
「は……？」
「いちいち、むずかしいことをいうのじゃない。さっさと深川へ行っておいで。お膳を下げたら、すぐに出て行っていいからね」
にこりともせずに、お徳がいうのである。
「出て行ったら、もう帰って来なくともいいよ」
そういわれたのではないかと、お道はおもった。
だが、たしかに、
（お内儀さんは、日暮れまでに帰っておいでと、おいいなすった……）
膳を下げてから、お道は、ぼんやりと外へ出た。
途中で、みやげを買い、深川へ行き、先ず〔万常〕へ顔を出すと、
「あれっ……」
内儀のおさわが、びっくりして、
「出て来たのかい」
「いえ、あの……」

「そうだろうとも。あんなところに、お前がいるのが、そもそも間ちがっているのだ。ああ、よく帰って来た、よく帰って来た」
「ちがうんですよ。遊びに行っておいでといわれたので……」
「若松屋の鬼婆が、そういったのかえ？」
「はい」
「正月に帰って来たばかりじゃあないか」
「でも……そうなんです」
「ふうん……」
と、おさわは気ぬけの態となった。
御用聞きの佐吉は、お上の御用で相州の小田原まで出張っているそうな。
酒屋の松次郎宅へも行ったが、ここでも、みんなにおどろかれてしまった。
お道は、二分のうちの、みやげ代を引いた残りを、おさわへあずけてから、若松屋へ帰って行った。
日の暮れまでには、かなりの時間が残っていた。
そのころ。
堀辰蔵は、すでに江戸を去っている。

土蔵の中

一

夏が来た。

若松屋での、お道の生活は、どうやら軌道に乗ったようだ。

それでも、

「よく辛抱をするものだねえ」

「私なら、疾くに出て行っちまっているけれど……」

などと、おうめやおさんが陰でいうほどに、内儀お徳のきびしさは変っていない。

だが、お道は、

(もう、こうなったら仕方がない)

肚を決めていた。

こうなったら、お徳から一言の文句も出ないまでに、

(はたらいてやろう)

という意地が出てきたのである。

お徳は依然として、

「こんなことができないほどなら、死んでしまったほうが増しだね」

とか、

「お前は此処へ来て二年にもなるというのに、まだ、掃除ひとつ満足にできない。それというのも、掃除を掃除だけのものとおもっているからだ。掃除が満足にできる女なら、女の天下を取れる。それが、まだわからないのか。何という血のめぐりの悪い娘なのだろうね」

とか、お徳の毒舌は休む間もなく、お道へ襲いかかる。

この春先に、朝餉の膳の玉子焼を「おあがり」と、すすめられ、びっくりしたお道だが、あれから二度と、そうしたこともなく、

「深川へ遊びに行っておいで」

と、いわれたこともない。

その日、お徳は、

「留守の間に、これこれのことをしておき」

と、お道に言いつけ、朝餉をすませるや、気に入りの台所の老女中お吉と手代を一人つれて、雑司ヶ谷の鬼子母神へ参詣に出かけた。

雑司ヶ谷(現豊島区)の鬼子母神は江戸市中の西郊にあたり、当時は豊島郡・野方領であっ

た。

現代なら、浅草から電車なり自動車なり、わけもなく行けるわけだが、そのころは一日がかりの参詣となる。

お徳は、出入りの駕籠屋から町駕籠をよび、これに乗るが、いうまでもなく、お吉と手代は徒歩で供をする。お吉は七十にもなっているので、お徳が、

「駕籠にお乗り」

いくらすすめても、承知をしない。

実に達者なもので、若い手代よりも足が速いのだそうな。

鬼子母神は、求児・安産・幼児保育の守護神だとかで、お徳がこれを信仰するのは、一人息子の芳太郎が幼かったころに病弱だったからだという。

その芳太郎が何とか成長をしたのも、

(鬼子母神さまのおかげ……)

だというので、いまも、お徳は月に一度の参詣を欠かさぬ。

参詣をすませ、近くの料理屋で遅い昼餉をとってから、ゆっくりと帰って来るのだ。

その日の昼すぎに、お道は、奥庭の向うにある土蔵へ入って行った。

お徳に言いつけられた「さがしもの」をするためであった。

三つ並んだ土蔵の、右端の小さな土蔵は、いくらか後ろへ引き込んだかたちになっていて、出入口も横手についている。

お徳からあずかった鍵で錠前を外し、汗をふきながら、お道は土蔵の中へ入った。

重い扉を開け放しにしておいたのは、真夏の温気が土蔵の中に蒸れこもっていたからだ。

土蔵は中二階になっていて、お道は巾三尺の梯子段をのぼった。

お徳にいわれたとおりの棚に、その箱が置かれてあった。

さがしものは、五代もつづいている若松屋の商品を細大もらさずに写した画帖であった。

その画帖が桐の箱の中に二十三冊もあるのに、お道は目をみはった。

お徳が、

「出しておいておくれ」

といったのは四冊目の画帖であったが、お道は美しく彩色された他の画帖に目をうばわれてしまい、しばらくは何冊かを見つづけていた。

櫛・笄・簪・紙入れ・煙草入れなど、おそらく町絵師に描かせたものであろうが、実に見事なものだ。

それに、くわしい記録が書き添えられている。

お道は、亡くなった父親に読み書きの手ほどきを受けていたし、去年の秋ごろから、お徳に命じられて、近くの平右衛門町で寺子屋をひらき、子供たちに読み書きを教えている浪人の小南六四郎の許へ三日に一度は通い、教えを受けていた。

この寺子屋での時間が、いまのお道にとり、何物にも替えがたい充実をもっていた。

お徳が寺子屋へ通わしてくれる、このことだけは、

（ありがたいとおもわなくては……）

と、お道はおもった。

「お前が、あきめくらでは、私の手つだいもできないからね」

お徳は、笑いもせずに、そういったものである。

土蔵の裏手は、善慶寺という寺の境内で、そこの木立に蟬が鳴きこめていた。

（あ、こんなことをしていては……）

お道は、われに返った。

お徳に言いつけられた四冊目の画帖を手にして、お道は梯子段を降りた。

降りて、

（あ……）

はっとなった。

いつの間にか、男がひとり、土蔵の扉口に立っていた。

芳太郎であった。

四度目の新妻お信に逃げられてからの芳太郎は、店にも出ず、自分の部屋へ引きこもったきりだったが、梅雨の明けるころから、父親の長兵衛に説得をされ、しぶしぶながら店へも出るようになっていた。

芳太郎が土蔵の中へ入って来たのは、何か、店の用事があってのことだとおもい、

「若旦那、何か……？」

いいさして、お道は声をのんだ。

芳太郎が凝と、お道を見つめながら、土蔵の重い扉を閉めたからである。

（あ……？）

芳太郎が何をしようとしているのか、とっさに、お道はわからなかった。

扉が閉まると、土蔵の中が薄暗くなった。

小さな二つの明り窓から、わずかに光りがさし込んでいる。

「わ、若旦那……」

芳太郎は、こたえない。

芳太郎の眼が光っている。

「あの、急ぎますので……」

扉へ近寄ろうとした、お道の腕をつかみ、芳太郎が強く突き放した。

「あっ……」

よろめいて倒れかかったお道へ、芳太郎が物もいわずに飛びかかってきた。

二

いきなり押し倒されて、

「あれぇ……」

お道が叫び声をあげると、
「声を出すな」
呻くようにいった芳太郎が、つづけざまに、お道の顔を殴りつけた。
何が何だか、わからなかった。
陰気で、お道ともろくに口をきいたことがない芳太郎の意外な行動だ。
動顚しているお道を、抱きすくめた芳太郎が、
「畜生め、畜生め……」
と、うわごとのような声を洩らしつつ、お道の胸もとへ手をかけ、引き毟るようにした。
大きくはないが、ぷっくりと固く張った乳房が露出し、お道がまた何か叫びかけるのへ、
「黙れ」
芳太郎が、またも顔を殴りつけた。
「あ……」
「畜生、畜生……」
喘ぎつつ、芳太郎は、お道の裾へ手を突き入れてきた。
お道は、半ば気をうしなっていたといってよい。
気の強い、お道ではあったが、このようなことは生まれてはじめての経験だけに、手も足も、おもうようにうごいてくれない。
重い男の躰を突き退けようとしてはいるのだが、まったく、手足にちからが入らぬ。

芳太郎の躰のうごきが、激しくなった。
芳太郎は噛みつくように、お道の乳首を吸いながら、腰を押しつけてきた。
躰をつらぬく激痛に、お道の意識がもどった。
しかし、こうなってしまっては逃げようにも逃げられぬ。
のしかかっている芳太郎の顔から汗がしたたり、お道の喉もとや胸へ落ちてきた。
仕方もない。
お道は、芳太郎のするがままにまかせた。
後になり、そのときの自分の胸の内を振り返ってみて、
（逃げようとおもえば、逃げられた……）
とも、おもえた。
おもいもかけぬ芳太郎の激しい暴力に驚愕はしたけれども、叫び声だって出せぬはずはなかったのだ。
かねてから、お道が、
（若旦那は、可哀想……）
だと、おもっていたことは事実である。
同情といってもよい。
実の母親のために、四度も新妻に逃げられてしまっているのだ。
可哀想だが、あまりにも、

（だらしがない若旦那……）

そうおもう一方では、

（でも、あのお内儀さんにあったら、どんな男だって、かなうものじゃあない）

だから、やはり、

（可哀想な若旦那……）

と、いうことになる。

けれども、それが芳太郎への好感に変っていたわけではない。

（可哀想だけれど、あまりにも気が弱い……）

その男に、自分の肌身をまかせるなどとは、それこそ夢にもおもわぬことであった。

また、それほどに気の弱い男が、猛然と自分へ飛びかかってきたので、お道は圧倒されたのかも知れぬ。

芳太郎が土蔵から出て行った後、ぐったりと横たわったお道の耳へ、蟬の声がよみがえってきた。

お道の両眼から、熱いものがふきこぼれてきたが、声はたてなかった。

しばらくして、お道は画帖を手に土蔵の外へ出た。

だれにも、土蔵の中の出来事は気づかれなかったらしい。

お道は、お徳の居間へ走り込み、動悸をしずめた。

お徳の居間と、小廊下をへだてて湯殿がある。

湯殿へ、お道が入るのを見られても、咎められることはない。

お徳が日暮れに帰って来て、先ず湯浴みをすることはわかりきっているし、したがって、お道が湯殿の仕度をととのえておくのは当然であった。

（よかった、お内儀さんがいなくて……）

このことである。

何故、そうおもったのであろうか……。

悪いのは、芳太郎なのだ。

それとも、芳太郎から逃げきれなかった自分の、はずかしい姿を見知られたくなかったのであろうか。

芳太郎を庇う気持ちが、いくらかでも、はたらいていたのだろうか。

お道は、湯殿へ入った。

湯ぶねには、すでに水が汲みこまれている。

その水をつかって、お道は躰を拭き清め、髪を直した。

それから外へ出て、自分がつかっただけの水を井戸から湯ぶねに汲み入れた。

庭の向うの廊下を、おうめが歩みながら、

「お道っちゃん。大変だねえ」

声をかけてよこした。

「ええ、ちょっと、水が足らなかったものですから……」

「暑いから、休み休みおやりよ」
「ええ」
われながら、お道の声は落ちついていた。
後で、お徳の居間へ行き、鏡で顔を映して見た。
いくらか、顔が腫れているけれども、殴りつけられたようには見えぬ。
してみると、芳太郎は、さほどに強いちからをこめて殴ったのではなかったのか。
お道は、お徳が帰るまでに女中部屋へ行き、着替えをすませておいた。
お徳に言いつけられたことは、すべて為終えていた。
薄暗い女中部屋の中に坐り、お道は身じろぎもしなくなった。
廊下の向うの大台所で物音が起りはじめている。
店のほうで、大番頭の善助の高声がきこえた。
薄暗い女中部屋の空間に視線をとどめたまま、お道は凝と坐っている。
しだいに、お道の両眼に光りが加わってきはじめた。
何を、考えているのか……。
それは、お道にもわからぬ。
だが、口に出してはいえぬが、何やら、わかったような気もしている。
わからぬようで、わかりはじめてきた。
それは、予感のようなものであったのだろうか。

三

その日の暮れがたに、雑司ヶ谷の鬼子母神の参詣からもどった若松屋のお徳は、
「今日は暑かったし、何だか、すっかり疲れてしまった。私も年なのかねえ」
めずらしく気の弱いことをいい、温い湯で、ざっと汗をながすと、
「お道、もう何も食べたくない。御膳の仕度はいいからと、お吉へそういっておくれ。そのかわりに葛湯をたのむよ」
こういって、臥床の仕度をさせ、横になってしまった。
それをきいて、夫の長兵衛が見舞いにあらわれたのへ、お徳は、
「すみませんねえ、お先へ寝てしまったりして……」
神妙に、詫びた。
「そんなことよりも、お医者をよびましょうか？」
「いいえ、旦那。それにはおよびません。ちょいとした暑気あたりなんですから」
お道が葛湯を持って行くと、
「おや……」
いぶかしげに、お徳が見やって、
「お前、どうかおしかえ？」

「いえ、別に……」
「顔が、腫れているようだけれど……」
傍から長兵衛が、
「ほんとうだ。どうしたのだね？」
「さあ、別に……少し、あの、浮腫んでいるようでございますけれど……」
「暑い日がつづくので、お前も疲れたのだろう」
と、お徳が妙に優しい声でいったものだから、長兵衛は、びっくりしたように、妻とお道の顔を交互に見やった。
このように優しい妻の声を、夫の自分はかけられたおぼえがないといってよい。
「もう用はないから、お前も、ゆっくりとおやすみ」
「はい」
お道は、素直に女中部屋へ引き取った。
下手に逆らっては、また叱りつけられる。
それよりも今夜だけは、一刻も早く、お徳の目を逃れたい気持ちであった。
おうめたちと夕餉をすませたとき、
「どうしたんだい？」
「顔が腫れているよ」
「いけないねえ。早く、おやすみ」

おさんが、すぐに女中部屋へ行き、寝床をとってくれた。
「すみません、こんなことをさせてしまって……」
「何をいっているのさ。お前さんに寝込まれたら、こっちへ火の粉が降りかかってくるのだもの」
「まあ……」
「ぐあいが悪いようなら、お医者をたのんであげるよ」
と、おさんがお道の額へ手をあててみて、
「熱は、ないようだねえ」
「大丈夫なんです。ちょっと疲れただけなんですから……」
「御飯も二ぜん、食べたしねえ」
「ええ」
ともかくも、女中たちは、いずれも親切にしてくれる。
夜ふけて、女中部屋へもどって来たおうめたちは、お道が寝入っているものとばかりおもって、
「お内儀さんが寝込んじまって、その上、お道っちゃんに寝込まれたら、大変だよ」
「あの、お内儀さんの看病をやらされたんじゃ、あたいなんか一日で泡を吹いちまう」
「だからさ、お道っちゃんを寝込ましてはいけないよ」
「あの娘の洗濯物ぐらいは、あたいたちがしてやってもいい」

「そうともさ」
というぐあいで、お道は寝たふりをして聞いてしまったわけだ。
さすがに、この夜は寝つけなかった。
おうめの鼾声をききながら、お道は空が白むまで眠れなかった。
現代とちがって、そのころの娘が、はじめて男に肌身をゆるすということは、女の一大事といってよい。
しかも相手は、自分の夫になるべき男ではない。
また、自分が妻になれる相手でもない。
(とんでもないことになってしまった……)
そうおもう一方で、お道は、あわてふためいた様子もなかった。
それから三日ほどして……。
お徳は床ばらいをした。
「すぐにも起きられたのだが、大事をとったのだ」
元気になって、お徳は、お道にいった。
「ついでのことに、あと半月も寝ていてくれりゃあいいのにね。そうすれば、お前さんだって気が休まるというもんだ」
と、おうめがお道に、
「それにしても、めずらしいことがあるものだ。あんなに細くても、ついぞ寝たことがないお

内儀さんなのに……」
「若いころのようにはいかないって、そう、いっておいでなさいましたよ」
「ふうん……」
それから五日ほどたって、お徳は、またも目黒不動へ参詣に出かけた。
これも月に一度は参詣に行くならわしで、お道も数度、お徳の供をしている。
「お前は、ゆっくりとやすんでおいで」
お徳は、お道にいたわりの言葉をあたえ、お吉と手代を連れて目黒へ出て行った。
長兵衛も、お吉も、
「また、暑気あたりでもするといけませんよ」
しきりにとめたけれども、はい、そうですかと、いうことをきくようなお徳ではない。
昼下りに、お道が湯殿の仕度をして、小廊下へ出ると、そこに芳太郎が立っている。
「ごめんなさいまし」
目をそらして擦り抜けようとする、お道の腕をつかんだ芳太郎が、
「この間の、土蔵で待っている」
ささやくや、手をはなし、さっさと廊下を遠ざかって行った。
また、お道は湯殿へ入った。
ながし場へ屈み込んで、凝とうごかない。
夏の盛りで、今日も晴れわたっていたが、涼しい風が吹きわたり、しのぎやすい日であった。

何処かで、蟬が鳴いている。
屈み込んで、眼を閉じたまま、お道はうごかない。
しばらくして……。
湯殿の戸が開き、お道が裏庭へあらわれた。
あたりへ、目をくばる。
お道は歩み出し、あのときの土蔵の中へ入って行った。

四

秋になって、最初に、お道の躰の異常に気づいたのは、お徳であった。
ずばりと、お徳がいった。
「お道。お前の、お腹の中の子の父親はだれなのだえ？」
お道は、うなだれた。
長火鉢の前で、細い煙管へ煙草をつめながら、お徳は鋭い視線を射つけている。
「だれなのだと訊いている。返事をおし」
うつむいたままで、お道がこたえた。
「若旦那でございます」
低いが、声は震えていなかった。

火鉢の火へ、もってゆきかけた煙管の手が止まって、お徳は、わずかに口を開けたが、声は出ない。
さすがに、おどろいたらしい。
お道の、やや蒼ざめた額へ、ねっとりと脂汗が滲み出してきた。
居間の縁側の軒下に吊した風鈴が、微かに鳴った。
ゆっくりと、火をつけた煙草のけむりをしずかに吐いたとき、お徳は能面のように表情のない顔つきになっていた。
「お道……」
「は、はい」
「今日は、これから、旦那の代りに大久保様へ伺わなくてはならない。仕度をしておくれ」
「はい……」
逃げるように、お道は次の間へ入った。
そこが、お徳の衣裳部屋である。
意外なことだ。
お徳は、叱りもしなければ、あわてもしない。
いつもと同じように、落ちついた声で用事をいいつけた。
用事をいいつけたからには、
「何という、ふしだらなまねをするのだ。すぐに出てお行き」

というわけでもないらしい。
また、そのような気ぶりは微塵もなかった。
お道に手つだわせて、着替えをする間も、お徳の様子に変りはなかった。
あれこれと指図をする声も、いつものとおりなのだ。
若い番頭を供に、旗本の大久保家へ出かけて行き、日暮れ前にもどってからも、お徳の態度は変らなかった。
翌日も、そのつぎの日も、お道の妊娠については、いささかもふれようとはせぬ。
そのうちに、お道の躰の様子が、だれの目にもわかるようになった。
おうめも、びっくりして、
「お道っちゃん。ほ、ほんとうかえ？」
「……」
「若旦那が手をつけたっていうじゃないか、ほんとうなのかえ？」
お道は、うなずいた。隠しようもない。
芳太郎は真青になり、店へも出ずに部屋へ引きこもったきり、そうでないときは、外へ出たきり二日も三日も帰らぬこともあった。
若松屋長兵衛が、たまりかねて、お徳の居間へあらわれ、
「お前さんの耳へも、とどいていることとおもうが、芳太郎が、お道を、その……」
「ええ、聞いています」

「そのうわさは、まさか、ほんとうなのではないのだろうね？」
「ほんとうですよ、旦那」
「げえっ……ま、まさか……」
「お道が、はっきりと申しましたよ」
「だ、だれにです？」
「私に」
「へえっ……」
長兵衛は、
（とても信じられぬ……）
という顔つきになり、へなへなと其処へ坐り込んだなり、口もきけない。
養子だけに、五代つづいた若松屋を末長く存続させるため、日夜、一生懸命にはたらきつづけている長兵衛は、跡つぎの芳太郎の身が固まり、一日も早く子が生まれることを祈っていた。
しかも、妻のお徳のために、芳太郎の嫁には四度も逃げられてしまっている。
それほど、やかましいお徳が、長兵衛が見たところ騒ぎ立てるでもなく、以前と同じように、お道を使っているではないか。
なればこそ、うわさが本当にできなかったのであろう。
「そ、そうか。そうですか、知っていなすったか」
「はい」

「そうか、ふうむ……」
お徳が出した茶をのみ、ふところの手ぬぐいを出して顔の汗をぬぐった長兵衛が、
「ま、仕方がない。お道ならば、お金で始末もつこう」
ひとりごとのように呟いたとき、お徳が、
「ねえ、旦那……」
「何です？」
「お道を芳太郎の嫁にしようじゃございませんか」
「げえっ……」
おどろきのあまり、のみかけた茶が喉につかえ、長兵衛は噎せた。
お徳が、うしろへまわってきて、長兵衛の背中を摩りながら、
「いいじゃありませんか、旦那……」
「いいといって、お前さん……」
「お道を嫁にいたしましょう」
「そ、そんな……両親も、ろくに親類もいないお道を……」
「うちとは、つり合いがとれないとでも？」
「そのとおり。そんなことは、お前さんが、よくよくわかっていなさるはずだ」
「そうですかねえ」
「え……？」

「いえ、芳太郎と、お道は、つり合いがとれているとおもいますけれどね」
「お前さん、正気ですか？」
「はい」
「ふうむ……」
「手を出したのは、芳太郎のほうからでしょう」
「そりゃあ、まあ……」
「お道はね、旦那。芳太郎の女房になるつもりでいますよ」
「ええっ……」
「女というものは、そうしたものらしい……」
「何という、図々しい……」
「図々しいのは芳太郎ですよ。後先の分別もなく、店の女に手を出すなんて、とんでもないことをしてくれました。若松屋の跡とり息子に、こんなまねをされては、奉公人へしめしがつきません」
「むう……」
「旦那は、大丈夫でしょうね？」
と、めずらしく、お徳が冗談をいったのだが、
「と、と、とんでもないことを……」
このとき長兵衛は、養子となって以来、はじめて怒気を発し、

「お前さんは、何ということをいいなさる」
「あれ、冗談を……」
「冗談にも、程があります」
「まあ、旦那……」
笑い出しながら、お徳が、
「お気にさわったら、ごめんなさいまし」
と、いった。
長兵衛は、目を白黒させている。
後にも先にも、この家つきの妻に「ごめんなさい」と、いわれたのは、このときが最初で、また最後でもあった。
お道は、落ちついていた。
（何事も、お内儀さんのいうとおりにすればいいのだ）
と、覚悟がきまっていた。

若松屋お道

一

お徳は、夫の長兵衛の承諾を得ると、すぐに芳太郎を居間へまねき、
「お前さんに、子ができたそうだね」
いきなり言われて、芳太郎の顔から血の気が引いた。
目を伏せた彼の、鬢のほつれ毛が震えている。
（いよいよ、来た……）
このことであった。
この恐ろしい母親は、自分とお道を、
（どうするつもりなのだろう？）
いま、芳太郎は、
（お道を連れて、何処かへ逃げてしまおう）

そう、おもいはじめていたところであった。

はじめに芳太郎が、お道を犯したのは、母親への反撥が、あのようなかたちをとってあらわれたといってもよいだろう。

来る嫁、来る嫁が、いずれも母親のために逃げ出してしまう。

(勝手にしろ)

芳太郎は、自暴自棄になってしまっていたのだが、四度目に来た加賀屋のお信を、すっかり気に入っていただけに、お信が出て行った後では、

(畜生。よくも……)

お徳への怒りと怨みが、胸へこみあげてきて、

(いっそのこと、おふくろを殺してやりたい)

と、おもった。

おもったが、気の弱い芳太郎に、そんなまねができるわけもない。

お道を犯しながら、われ知らず、

「畜生め、畜生め……」

と、口走ったのは、むろん、お道への憎悪からではない。

母親を殺すかわりに、母親が気に入りの女中を犯すことによって、鬱憤をはらそうとしたのであろう。

二度目に、お道を誘ったときも同様だったが、はじめてのときのように「畜生」よばわりはしなかった。

三度目ともなると、お道が自分の誘いを拒まぬので、いささか気味が悪くなってきた。

これまでに芳太郎は、四度も妻を迎えているし、遊里の女を知らぬわけでもなかった。

しかし、人の目をぬすみ、土蔵の奥で口もきかず、お道を凝と抱きしめているうちに、

(お道は、どうして、私のいうがままになっているのだろう……もしやして、私を好いているのではなかろうか?)

と、おもいはじめてきた。

お道にしても、

(なぜ、私は、若旦那のいうままになっているのだろう?)

そのことが、はっきりと腑に落ちていたわけではない。

芳太郎が好きになってしまったかといわれて、

「はい。さようでございます」

と、返事をするわけにもいかなかったろう。

芳太郎が、お道を抱きながら、絶えず、母親のお徳の白く光る眼を脳裡に浮かべていたように、お道もまた、芳太郎に抱かれながら、閉じた瞼の中に、お徳を見ていた。

そのときのお徳は、お道にとって、決して恐ろしいものではなかった。

そこが、芳太郎とはちがっていたのである。

この二年の間に、お徳に叱りつけられながら、絶えず附き添ってきて、そうした日常の積み

重ねが、お徳とお道の間に何かを通い合わせていたのだともいえよう。

強いていうならば、

（私が、若旦那と、こうなってしまったことを、お内儀さんは、ゆるしてくれるにちがいない）

と、いうことにもなるのだが、だからといって、

（若旦那を自分のものにして、五度目の女房になってやろう）

という野心があったわけでもない。

二度目に芳太郎から「土蔵で待っている」と、いわれたときの気持ちは、お道自身にも説明がつかぬ。

ただ、自分と芳太郎の間には、お徳が存在しており、お徳あればこそ、

（土蔵の中へ入って行けた……）

ともいえる。

後に、芳太郎が、

「あのときは、お前、ほんとうによく来てくれた。あの二度目のとき、お前が、もし来てくれなかったら、こうして、お前と夫婦になることはできなかったろうね。ねえ、お道。お前、あのとき、お母さんが怖くなかったのか？」

と、訊いたときに、お道は、

「はい。怖くはありませんでした」

「どうしてだろう。そこが、私にはわからない」

「私にも、わかりませんけど……」

いいさして、ちょっと黙っていたが、ややあって、お道はこういった。

「女と女でございますから……」

「女と女……」

「ええ」

「お母さんと、お前のことかい？」

「そうです」

「ふうむ……あの、お母さんを、私は女だとはおもっていなかったけれど」

「でも、そうなんでございます。私も小娘でしたけれど、ただ、何となく……」

「何となく、どうなのだ？」

「口に出しては、うまくいえませんし、いってしまっては味気ないように思いますけれど……」

「わからない。私には、さっぱりわからない」

そうした芳太郎だっただけに、

「お前さんに、はじめての子ができるのだ。これからは、もっと、しっかりしなくちゃあいけない」

お徳に、そういわれたとき、

「……？」

しっかりしろとは、どういうことなのだろう。

芳太郎は、まだ、生きた心地がしなかった。

「若松屋の跡取りが処女に手をつけたからには、おのが女房にするつもりでいたのだろう。それとも、ただ、なぐさみものにしただけなのかえ？」

「いえ、なぐさみものなぞと、そんな……」

「では、女房にするつもりだったのだろうね」

「あの、お道を……あの、女房にしても、よろしいのでございますか？」

「いいよ」

事もなげにいわれたときには芳太郎、のちにお道へ、

「私あ、まだ床にいて、夢を見ているのじゃないかとおもったよ」

と、洩らした。

お道も、二度、三度と土蔵の中で抱かれているうち、はじめて男の肌身を知った自分の躰が、

（どうしようもなく……）

芳太郎の躰と一つになってしまったような気がしてきて、そこから、芳太郎への愛情が芽生えはじめた。

それもまた当然であったろう。

二

若松屋芳太郎と、お道の祝言は、翌年の寛政七年正月十八日におこなわれた。

お道は十九歳。

芳太郎は三十三歳。

若松屋長兵衛は五十八歳、お徳は五十四歳になっている。

婚礼は、いたって質素におこなわれたが、深川〔万常〕の佐吉・おさわの夫婦や、酒屋の松次郎夫婦も、お道の実家という意味をふくめて招かれた。

「ほんとうに、まあ、お道が、こんな玉の輿に乗ろうなんて、おもってもみませんでしたよ」

と、万常のおさわは、呆気にとられていたものだ。

「ざまあ、見ろ」

佐吉は、得意になって、

「おれがいったことは、嘘じゃあなかったろう、どうだ」

「お前さんだって、お道が若松屋さんへ嫁ぐとはいいませんでしたよ」

「そうはいわねえが、若松屋のお内儀さんなら、きっと、お道の行末を悪いようにはしなさらねえといったはずだ。どうだ、ちがうか」

「え……そりゃあ、まあ……」

「見ねえ。おれがいったとおりになったじゃねえか」
「でもねえ……」
「何だと。まだ、不服があるのか？」
「ありますともさ。これで、もう、お道は私たちのところへ帰って来ない。ねえ、そうじゃありませんか」
おさわは、まだ、あきらめきれない様子であった。
お道は、これまで、若松屋お徳の厳しい躾に耐えてきて、お徳の気に入りの嫁となったわけだから、お徳と諍いを起し、若松屋を飛び出して来ることは期待できない。
「ああ……」
ためいきを吐いて、おさわは、つくづくといった。
「あのとき、どんなことをしても若松屋へ奉公に出すのじゃなかった……」
さらに、おさわをびっくりさせたのは、婚礼前のお道が、すでに芳太郎の子を身籠っていたことだ。
「あの、お道がねえ……」
「まったくなあ……」
御用聞きの佐吉も、そのことについては、いささか驚いたらしく、
「おれも親父の代から、お上の御用をつとめていて、女の科人も数え切れねえほど手にかけたが、女という生きものは、いまだにわからねえところがある」

「まあ、親分。何をいってなさるんだろうねえ」
「さいわい、若松屋のお内儀さんが気に入ってくれていたからよかったようなものの、まかり間ちがえば、危く、お道はふしだらな女にされてしまうところだった」
「だって、先に手を出したのは若旦那のほうじゃありませんか」
「どうして、わかる？」
「そりゃあ、きまってますとも。まさかに親分、あのお道のほうから手を出すわけのものでもなし……」
「そりゃ、まあ、そうだろうが……」
一瞬、佐吉は何ともいえない眼つきになり、まじまじと女房の顔を見つめたものだから、おさわが、
「あれ、嫌な。何で、そんなに見なさるのさ」
「女という生きものは……」
「もう、およしなさいよ、生きものなんていいなさるのは……」
「いや、お前の、その肚の底にも、亭主のおれが到底わからぬ性根が隠されているとおもうと、何だか空恐ろしくなってきた」
「何をいってなさるんですよ。私の肚の底なんか、何もありゃあしない。からっぽにきまってますよ」
「そりゃ、いまのお前には何もあるまいが、いざとなったときの女という生き……」

「また生きものかえ、親分。いいかげんにしておくんなさいよ」
「だがなあ、おさわ」
「ええ、もう。今夜の親分は何てしつっこいのだろうねえ」
ついには、おさわが癇癪を立ててしまった。
酒屋の松次郎夫婦も、万常同様に、お道の実家として、若松屋から正式の申し入れを受けたときには、使者に立った大番頭の善助へ、
「冗談をいっちゃあ困りますよ、番頭さん」
はじめは、本気にしなかったほどである。
本当の事とわかるや、松次郎夫婦は、
「やっぱり、お道っちゃんだねえ」
「さすがの若松屋のお内儀さんも兜をぬいだというわけか」
素直に、よろこんでいたようだ。
さて……。
お道と、晴れて夫婦になった芳太郎は、
「人が違ったように……」
はたらきはじめた。
お道は、女中あがりの新妻だけに、万事につつましくしていたが、表の奉公人たちも、
「おい、おい。お道を、これからは若いお内儀さんといわなくてはならないのかね」

「どうも、弱ったねえ」
とか、
「まあ、あの娘がねえ。若旦那を土蔵の中へ引っ張り込んだんだとさ」
「見かけによらないねえ」
などと、陰口もきこえたようだが、依然として、お徳の身のまわりの世話をしつづけ、芳太郎の妻としても、遺憾がなく、奉公人たちへも、これまで同様に、ねんごろな態度をくずさないので、一年、二年たつうちには、奉公人のいずれもが、お道へ心服するようになってしまう。
奥の女中たちは、おうめ、おさん、おみつの三人とも、はじめからお道の味方になってくれた。
これは、お道にとって、どれほど心強いことであったろう。
「あ、これなら大丈夫。これで、お店も御安泰だよ」
と、おうめは言ったそうな。
そして、お道へ対する態度が、がらりと変り、ことばづかいもていねいになった。おうめは先ず、身をもって、かくあるべきことを奉公人たちへしめしたのである。
「どうだえ、芳太郎……」
と、お徳が、或日、廊下を通りかかった芳太郎を居間へまねき入れて、
「商売をおぼえるのが、おもしろくなったようだねえ」
「はい」

「よかったねえ、お道を嫁にして」
「おかげで……」
芳太郎は、あとで、
「お母さんに、あんな優しいことをいわれたのは、生まれて、はじめてだよ」
お道に、そういった。
この年の夏が来て、お道は男の子を生んだ。
祖父の長兵衛が、幸太郎と名づけた。
そのころ、堀辰蔵は、久しぶりで江戸へもどって来ている。

三

空に、赤い月が浮いていた。
戸障子を開け放して蚊いぶしを焚き、青い蚊帳を吊り、その中で男がふたり、酒を酌みかわしている。
一は、先ごろ、江戸へもどって来たばかりの堀辰蔵。
一は、三井覚兵衛である。
場所は、以前に堀辰蔵が根岸の寮を襲撃したときに使われた池之端仲町の、あのふしぎな家であった。

堀辰蔵は、四十五歳になっている。
辰蔵の鬢のあたりには白いものがまじっているし、辰蔵より年上の三井覚兵衛も五十に近い年齢になっているだろう。いや、五十をこえているやも知れぬ。
二年前に江戸を去った辰蔵を、今度また、よびもどしたのは三井覚兵衛だ。
辰蔵は、覚兵衛が手紙に書いてよこしたとおり、この池之端仲町の家へ旅装を解いた。
それが昨日のことで、この家に住みついている老爺が、すぐに覚兵衛へ知らせに行き、一夜明けた今日の夕暮れになり、覚兵衛があらわれた。
二階の部屋へ入って来た三井覚兵衛を見て、
「ほう……」
めったには顔の色を変えぬ堀辰蔵が、苦笑を洩らし、
「三井さん。変ったのう」
と、声を投げた。
三井覚兵衛が、町人の姿をしていたからである。
羽織も着物も帯も立派なもので、むろん、町人髷に結い、白足袋をはいている。
覚兵衛の前歴について、辰蔵は何も知らぬし、また、知ろうともおもっていない。
辰蔵にわかっていることは、三井覚兵衛が侍として、剣の修行をみっちりと積んだ男だということだけだ。
そうした覚兵衛だけにこうして町人姿になると、ことさらに貫禄がついて見え、しかるべき

大きな商家の主人といわれても、おかしくはない。
「おどろいたか、堀」
「別に……」
「わしもな、退っ引ならなくなって、こんな姿になった」
「ふむ……」
「羽沢の元締が、どうしても、表立っての片腕になってくれというのでな。そうなると、二本差しているわけにもまいらぬ」
三井覚兵衛と関わり合いの深い、両国の香具師の元締・羽沢の嘉兵衛の片腕というからには、覚兵衛も、その世界の「顔役」として、生きるつもりになったのであろうか。
よくは知らぬが二年前の根岸の寮で暗殺した老人も、羽沢の嘉兵衛と縄張りを争っていた、何処かの香具師の元締だろうと、辰蔵は看ている。
だが、そうしたことを深く探ってみようともおもわぬ辰蔵なのだ。
「なあ、堀……」
「うむ？」
「今度、また、江戸へ来てもらったのは、な……」
「また、人を斬れというわけかね、三井さん」
「上方では仕掛けをしなかったそうだな？」
「よく知っていなさる」

「堀。少し肥えたな」
「ぶらぶらと、何も考えずに遊び暮していたので」
「そうか。それもよい」
そこへ、半次が来て、酒の仕度にかかった。
三井は、この家の湯殿へ行き、汗をながし、浴衣に着替えてもどって来ると、
「半次。戸を開けはなして、蚊帳を吊れ」
と、命じた。
半次は、二年ぶりで会う辰蔵へ、なつかしげな眼ざしを向け、あたたかい微笑を送ってきた。
「お変りもございませんで……」
と、半次は辰蔵へ挨拶をした。
「おぬしも変らぬ」
「そうでございますかね。そう見えましょうか」
「うむ。外面は、な」
「これはどうも、恐れ入りました」
半次は階下へ行き、鮎を手ぎわよく焼いて運んできた。
しばらく、酒を酌みかわしてから、三井覚兵衛が半次へ、
「呼ぶまでは、あがって来ぬでもよい」
と、いい、半次は階下へ降りて行った。

「なあ、堀」
「遠慮はいらぬ。何なりと申しつけたらよい」
「そういわれると……いや、おぬしには、これまで、ずいぶんと手を貸してもらったが……」
「金で始末がつくことだ。そのほかには、私のすることもない。ちょうど、ふところもさびしくなっている」
「そうか……ふむ。そういってもらうと、おれもはなしやすい」
三井覚兵衛は、堀辰蔵の盃へ酌をしてやってから、
「堀は何歳になったのだ？」
「さて、忘れてしまった」
「四十……？」
「いくつでもいい」
「行先のことを考えたことはないのか？」
「ない」
辰蔵は、かつての自分が父の敵を追いもとめる身だったことを、覚兵衛に洩らしてはいなかった。
敵の加藤甚作は、たしか四十八歳になっているはずだ。
加藤は加藤で、いまも尚、辰蔵の探索を恐れながら何処かに息をひそめ、暮しつづけているにちがいない。もし、生きていればのことだが……。

しかし、当の堀辰蔵は、その父の敵を追いもとめる情熱をも失ってしまった。
父の敵を憎い、とも、おもえなくなってしまっている。
大金を受け取って、暗殺を請負うという暮しを、もう六年もつづけてきて、自分が手にかけた人びとの血に、
（おれの両手は、まみれつくしている……）
となれば、たとえ父の敵を討ったところで、故郷の越後・新発田へ帰れるものではないのだ。
辰蔵を腕ききの暗殺者に仕立てあげたのは三井覚兵衛だが、むりにそうしたわけではない。
覚兵衛のさそいを断ることもできたのだが、むしろ、辰蔵は我から覚兵衛のさそいに乗って行ったのである。
（あのとき、深川で、煙管師を斬ってしまった日から、おれは別の男になった……）
このことであった。
（あの煙管師のむすめが、同じ深川の……たしか、万常という料理屋で女中をしていたが……）
その、むすめの顔の記憶も、いまは、ぼんやりとしてしまっている。
まだ、多分に少女のおもかげが残っていて、色の浅ぐろい細面の、細いがしっかりした躰つきのむすめであった。
「おい、堀。どうした？」
「いや、別に……」

「ま、取っておけ」
と、三井覚兵衛が袱紗包みを出し、ひらいて見せた。
小判で二十五両。
「当座の小遣いにしてくれ」
「小遣いにしては多すぎる」
「それだけのことはしてもらうつもりだ。当分は此処にいてくれ。念にはおよばぬことだろうが、外出の折には笠をかぶって行くがいい」

四

長男の幸太郎を生んでからのお道に対して、いまは姑となったお徳の躾は、以前にも増してきびしくなった。
それは、女中に対してのきびしさではない。
いまや、お道は、若松屋の跡とり息子の嫁になったわけだから、今度は女中を使う身の上になったわけだ。
そこで、お道に附く女中になったのが、古参のおうめである。
おうめが買って出てくれたのだ。
これは、お道にとって、まことに、

（ありがたい……）
ことだったと、いわねばなるまい。
おうめならば何も彼も心得ているし、はじめから自分に好意をもっていてくれたわけだから、万事、胸を打ち割っての相談もできる。
そのかわり、姑のお徳の身のまわりについては、これまでどおり、自分がやることにした。
お徳は、
「もう、そんなことをしなくともいい。別の女中にさせるから……させなくてはいけない」
と、いったが、別の女中のすることで、我慢ができるようなお徳ではない。
それにしても、おうめが手伝ってくれるようになったのだから、労働の上では、お道もかなり楽になったといえよう。
そのかわりに、
「旦那や私が死んだ後は、芳太郎とお前さんが、立派に若松屋の看板を背負って行かなくてはならないのだから……」
というわけで、商売上のことを仕込まれるようになった。
これが、実にきびしい。
以前から、近くの平右衛門町で寺子屋をひらいている小南六四郎の許へ三日に一度は通い、読み書きを習っていたお道に、
「これからは、毎日、通いなさい」

と、お徳がいった。

ことに、習字についてはうるさい。

小南のところで習ってきた文字を、帰って来てから、お徳の前で、また書かされる。

「そんな字を書いていては、若松屋の女房がつとまるものじゃあない。いずれは武家方の御用人にも、手紙をさしあげなくてはならないのだからね」

とか、

「ほれ、何という筆の持ち方をする。もっと背すじをのばさないから手指まで妙なことになるのだ」

とか、

「まあ、いつまでたっても、お前さんという人は……」

たまりかねたように、煙管で、筆を持つお道の手を叩いたりする。

だが、いまや、お道は少しも辛くなかった。

お徳の胸の内は、わきまえつくしている。

憎いから叱るのではない。

見込みがあるから、躾をしてくれるのだ。

それに、寺子屋の先生である小南六四郎は、

「上達がいちじるしい」

と、ほめてくれる。

お徳は、きびしくはあっても、女中の前では、いつも、お道を「若い内儀」として立ててくれたし、よびつけにしたこともない。

かならず「お前さん」とか「お道さん」とか、よぶのであった。

芳太郎は依然として母のお徳を恐れ、なるべく寄りつかぬようにしている。

それよりも芳太郎は、また、お道に逃げられはしないかという不安に絶えずおびやかされているらしく、

「いつも、お母さんの御守をさせて、すまないねえ。たのみますよ。私は、お前がたよりなのだからね。今日は疲れたろう。よし、私が肩をもんであげよう。何、いいのだ、いいのだ。もませておくれ、私がもみたいのだから……」

などと、夜ふけに二人きりになると、懸命に、お道の機嫌をとる。

「では、すみません。お願い申します」

お道も甘えて、夫に肩をもんでもらう。

終ると、今度は、

「私が、おもみしましょうね」

「すまないねえ」

「さ、横になって下さいまし」

「こうかい。ああ、いい気持ちだ。お前、何だよ。疲れているだろうから、ほんの少し、もんでくれればいいからね」

先ず、こうしたわけだから、夫婦仲の悪かろうはずはない。

（お父つぁん。お道は、こんなに倖せになりましたよ）

お道は寝床の中で、殺された父親の源助へ、胸の中で呼びかけることがあった。

父親を殺した男への憎しみは消えていないが、歳月がたつにつれて、そこは女のことゆえ、怨みも薄くなってしまう。

現実の生活と亡父とがむすびつくだけで、父親を殺した男のことを忘れかけている。

芳太郎の妻になってからの明け暮れは、以前にも増していそがしい。

姑の世話をやくのと同時に、夫と子供の世話もしなくてはならぬ。

疲れもするが、病気になることもないし、むしろ、躰の肉づきがよくなってきたようだ。

いそがしいので、毎月の父母の命日を忘れてしまうこともあって、そんなときには姑のお徳が、

「困るねえ、お前さんは……実の親たちの命日を、いくらいそがしくても忘れることがあるものか」

こういって、お道の部屋の仏壇の前へ共に坐り、二人ならんで線香をあげる。

そして、お徳は、お経を読んでくれるのだ。

これだけは、ほんとうにありがたいとおもった。

そして、翌年の春。

お道は、またも身籠った。

「今度は、女の子がほしいねえ」

と、芳太郎がいった。

五

寛政八年の年が明けて、お道は二十歳になった。

その正月の六日に、お道は幸太郎を連れて、深川へ出かけた。

いまのお道は、若松屋の若主人の妻である。

古参女中のおうめと手代の新次郎が附きそい、万常の佐吉夫婦から使用人たち、それに酒屋の松次郎夫婦や庄太、おしんへも贈り物を携え、これを手代が背負い、おうめは乳母のかたちで幸太郎を抱いている。

この二人のお供を従え、眉を青々と剃りあげ、歯に鉄漿をつけ、見ちがえるような若女房となったお道があらわれると、万常の板場の男や女中たちが、

「ふうむ。こうも変るものかねえ」

「お道っちゃんも、大変な出世をしたものだ」

「まあ、こんなに可愛い男の子を、お道っちゃんが、ほんとうに産んだのかしらねえ」

目をみはって、よろこんでくれた。

松次郎宅でも同様で、近所の人たちが入れかわり立ちかわりあらわれては、祝いの言葉をか

けてくれる。

「それにしてもさ……」

と、松次郎の女房おきねが、

「この姿を、亡くなったお父つぁんが見たら、どんなに、よろこんだことかねえ」

おもわず泪ぐむのへ、むすめのおしんが、

「ねえ……ねえ、お母さん、あのことを、たのんでみておくんなさいよう」

しきりに袖を引いているのを見て、お道が、

「おしんちゃん、いったい何なの？」

「いえね、おしんは、若松屋さんへ奉公にあがりたいというのだよ」

と、おきねがいう。

父親の酒屋を手つだっている庄太は十六歳になり、おしんも十三になった。

その年ごろになれば、暮しが困っていなくとも、しかるべきところへ奉公にあがり、一応は女の苦労をし、それから嫁に行くというわけで、酒屋の松次郎も、

「そろそろ、おしんを何処かへやっておかなくてはいけない。いつまでも家で甘やかしておいては、ためにならない」

こう言ったときに、おしんが、

「どうせ奉公に行くのなら、若松屋さんへ行き、お道さんに仕込んでもらいたい」

と、いい出たのだそうな。

「まあ、ねえ……」

お道が、びっくりしたような顔つきで、

「おしんちゃんが、もう、そんなことをいうようになったのねえ」

すると、おきねが、

「お前さんが、ちょうど、いまのおしんの年齢に……」

いいさして、口を噤んだ。

お道が十三歳の夏に、父親の源助は、

「まるで、通り魔のようなやつに……」

殺害されたのであった。

お道が父親と住み暮していた隣りの家には、指物師が入っている。

「まあ、私の一存ではいかないけれど、店へ帰って相談をしてみましょうよ」

お道は、そういって、

「そのかわり、おしんちゃん。若松屋の奉公は辛いことも多いけれど、辛抱してくれなくては私の顔が潰れますよ。わかっていますね？」

「ええ、大丈夫」

「そう。それならば、聞いてみてあげましょう」

言葉づかいといい、わが子の幸太郎を抱いた落ちついた物腰といい、あまりの変りように、

（これが、あの、お道っちゃんか……）

と、松次郎夫婦は顔を見合わせている。

日暮れどきが近づいて来たので、お道は松次郎宅から、ふたたび、万常へもどった。

先刻までは万常にいた御用聞きの佐吉の姿がない。

「急にね、八丁堀の旦那からお呼び出しがあって出かけたのだよ」

と女房のおさわが、

「何でも一昨日の夜、菊川橋の辺りで人殺しがあったとかでね」

「まあ……」

「殺されたのは、両国の香具師の元締で、羽沢の嘉兵衛という人らしい。うちの親分はね、大きな声じゃいえないけれど……あんなやつは、死んじまったほうが世のため、人のためになるなんて、そういっていなすった」

「親分が、そんなことを……」

「殺されたやつも悪いやつ。殺したやつも悪いやつ。どうせ、悪いやつらの縄張り争いが昂じたのだろうと、親分はね、昨日、知らせがあったときも、腰をあげなかったのだよ」

その香具師の元締は町駕籠に乗り、これを三人もの配下が護って夜更けの菊川橋をわたったところを、飛び出して来た何者かが、逃げた駕籠舁きを除いた四人を、

「みんな、たった一太刀で息の根をとめてしまったそうな。親分は、こいつは二人や三人の仕わざではねえと、いっていなすったけれど……」

「嫌ですねえ」

「ほんとうに、世の中が、だんだん物騒になるばかりだねえ」

お道は、眉を顰めた。

人殺しと聞くと、それは必ず、父親が殺されたときの暗いおもい出に結びついてしまうのだ。

間もなく、お道は万常を辞去した。

「近いうちに、また、寄せてもらうからね」

と、おさわがいった。

あれほど、若松屋のお徳が嫌いだったおさわだけれども、お道を訪ねて行くと、お徳がこころよくもてなしてくれる。

お徳のことゆえ、にこにこと愛敬を振りまくというわけにはまいらぬが、それでも必ず顔を出して、

「まあ、万常さん。ゆっくりとしておいでなさい」

と、いってくれる。

それも、お道の顔を立ててのことだと、佐吉夫婦にはよくわかった。

お徳の、松次郎夫婦に対するあつかいも同様であった。

さて、この日。

若松屋へ帰って、お道はすぐに、お徳の居間へ行き、挨拶をすませてから、酒屋の松次郎のむすめ・おしんが、

「こちらへ御奉公にあがりたいと申しているのですけれど……」

「ああ、おぼえている。あの子かえ」
「いかがなものでございましょう？」
「お前さんは、どうおもいなさる？」
「はい。こちらでつとめあげれば、何処へ行っても間ちがいはないと存じます。私も小さいころ、世話になった家のむすめでございますし、よろしければ御奉公を……」
「お前さんがよければそれでいい。私に異存はありませんよ」
「さようでございますか、ありがとう存じます」
「お前さんが、おもうように仕込みなすったらいい」
きびしいことに変りはないが、お徳の、お道へ対する言葉づかいは、がらりと変ってしまっている。
それは、どこまでも、自分の息子の嫁に対する言葉づかいであった。
お道は早速、おうめを使いに出し、このことを松次郎夫婦へ知らせてやった。
おしんが若松屋へ奉公にあがったのは、二月のはじめである。

六

おしんは、お道附きの女中となった。
おうめとおしんの二人が、自分に附くようになったので、さすがに、お道は一息つける情

態となった。
おしんは気ばたらきもよく、それに、お徳から叱りつけられても、
「相すみません」
さっぱりと謝ってしまうと、くよくよすることがない。
「若いお内儀さんがこちらへ来たときに、そっくりだよ」
おうめがそう洩らしたそうだが、お道にいわせると、
（私よりも、おしんのほうが、ずっと上だ）
と、いうことになる。
少女のころのお道は、陰気ではなかったが、明るい笑い声をたてることもなかった。
何事にも凝と耐え、全力をつくしてはたらくという「しっかり者」の感じがした。
おしんのほうは、一生懸命にはたらいても、そのようには見えない。
疲れを知らぬ健康のもちぬしだし、躰つきも、少女のころのお道にくらべると一まわり大きい。お道は細面の細い躰つきであったが、おしんは丸顔で血色がみなぎっている。
そうしたおしんを見ているうちに、
（あ……そうだ）
ふっと、お道の脳裡を掠めたものがある。
それは、一つのおもいつきといってよかった。
その、おもいつきが実現するしないはさておき、以後のお道は、そうした思案のもとに、お

しんを仕込んで行くようになる。

お道が身籠ったことを知ると、お徳は、

「躰をうごかさないのもいけないが、ともかくも、万事に気をつけて下さいよ」

と、念を押した。

この前、幸太郎を身籠ったときには聞いたことのない姑の言葉であった。

いずれにせよ、この年に入ってからのお徳は何やら疲れ気味のようで、

「私の代りに……」

何処何処へ行って来ておくれと、芳太郎へいいつけるようになってきた。

お徳は、五十五歳になっている。

（どこか、躰のぐあいが、お悪いのではないか？）

そう思って、お道が芳太郎へ、

「お医者さまに診ていただいたほうがいいのではありませんか？」

相談してみると、芳太郎は笑って、

「お母さんもお前、そりゃ、いつまでも若くはないよ。五十を五つも越えれば何につけ、おとろえてくるものさ。だがねえ、お道。このごろのお母さんは土蔵の中へ入って、いろいろはたらいていなさる。あれで結構、いそがしいのだよ」

そういわれれば、たしかに、そのとおりで、

「お道さん。いっしょにおいで」

お徳といっしょに土蔵へ入り、古い昔の帳面だの、店であつかっていた商品だのを見せられながら、何かと商売上の教えを受けることが多くなってきた。

「芳太郎は旦那が仕込みなさる。私は、若松屋の内儀として心得ておかなくてはならないことを、お前さんに伝えているのだから、そのつもりで聞いておくれ」

と、お徳はいった。

商売上のこともあるが、若松屋の親類たちとの交際についても、いちいち、噛んでふくめるように、お徳は伝えてくれる。

また、奉公人たちへのあつかいについても、何代もつづいた老舗だけに、

（なるほど、こういうものか……）

お道が、おもってもみなかった深い斟酌がなされていることに、おどろいたものである。

「ま、私がこういっても、世の中はいつの間にか変ってしまう。現に、私の親たちの代にくらべると、うちの商売の仕様も、ずいぶんと変ってきている。その変り目変り目を、よほどにうまく切りぬけて行かないと、うちのような流行品をあつかっている商売は、たちまちに足許を掬われてしまうのだよ」

「はい」

「だから、お前さんたちの代になってからは、何も旦那や私のいうとおりにしなくともいい。ただ物事というものは、古い物から新しい物が生まれるの道理をわきまえておいてもらいたいからこそ、こうして、古い物をいろいろとお前さんに見てもらっているのだ」

「ありがとう存じます」

いまになって、お道は姑の行きとどいた心が、はっきりとわかったおもいがしている。

秋になると、お道の躰の変化は、いよいよ目立つようになったが、二度目だけに落ち着いていられたし、

「安心をおし。今度も安産ですよ」

と、お徳が請け合ってくれた。

さすがに、前のような躰のうごきができなくなり、そうなると、おしんがいてくれて、

（ほんとうに助かる……）

おもいがした。

古参のおうめには、まだ何となく遠慮があるけれども、おしんならば何でもたのめるし、また、してもくれる。

おしんは、お徳の身のまわりの世話もするようになったが、ふしぎなことに、お徳は気味がわるいほど文句をいわぬ。

「だいぶ、気がお弱りなさいましたねえ」

と、おうめがいった。

それだけに、お道も気をつかい、お徳に代って、おしんを厳しく叱りつけるようになった。

まことに叱りやすい。

いくら叱っても、おしんが根にもたぬからだ。

（やはり、私のおもいつきは、間ちがいではなかった……）

お道は、そうおもった。

この年も押しつまった十二月二十七日の朝。

お道は、女の子を産んだ。

芳太郎は、大よろこびで、

「お道。名を何とつけようね」

「そうでございますねえ……」

お道は、若松屋長兵衛とお徳に相談をした。

そして、この女の子は「お光」と、命名されたのであった。

歳月

一

その夜は、いつものように酒をすごさなかった所為か、寝床に身を横たえても堀辰蔵は、なかなかに寝つけなかった。

その日。

堀辰蔵は、江戸へ着いたばかりであった。

辰蔵が、三井覚兵衛にたのまれ、七十両の仕掛金で香具師の元締・羽沢の嘉兵衛を暗殺してから、五年の歳月がながれていた。

あのころは、江戸市中の香具師の元締たちが縄張りを争い、暗殺もおこなわれたし、大きな金もうごいた。

三井覚兵衛は、その機に乗じて、関係の深かった羽沢の嘉兵衛を密かにほうむり、その後釜に坐る決意をかため、堀辰蔵を江戸へ呼び寄せたのだった。

嘉兵衛が死ねば、元締の座へ坐れるだけの見込みもついていたのであろう。

だが、辰蔵は深い事情は何も知らぬ。

そして、覚兵衛のいうがままにうごいた。

辰蔵は、以前から、大坂にいるときは、これも大坂の諸方の盛り場を牛耳っている香具師の元締・白子屋菊右衛門の許へ身を寄せている。

菊右衛門は、大坂の道頓堀・相生橋の北詰に〔白子屋〕という大きな料理屋を経営している。

そうしたところは羽沢の嘉兵衛と同じであった。

白子屋菊右衛門と三井覚兵衛の関係も、古く深い。

「三井さんを、この道へ引き入れたのは、このわしじゃ」

と、いつであったか、菊右衛門が辰蔵に洩らしたことがある。

覚兵衛が江戸へ出て、羽沢の嘉兵衛のためにはたらくようになってからも、この二人は絶えず連絡をつけ合っていて、なればこそ、堀辰蔵が江戸で暗殺をするたびに、大坂の白子屋の許へ逃げ込むことができたわけだ。

そのかわり辰蔵も、白子屋の依頼を受け、これまで数人を殺めている。

覚兵衛が羽沢の嘉兵衛を殺したのも、おそらく、白子屋菊右衛門の了解を得てのことだったにちがいない。

その後、白子屋の配下が何人も江戸へ送り込まれ、覚兵衛の下ではたらくようになった。

いまの辰蔵は、京都の東山の裾に小さな家を設け、中年の女中と老爺の二人を住み込みで雇

い入れて暮しているが、白子屋からの連絡があれば、すぐに大坂へ出向いて行く。

今度も白子屋に、

「三井さんが呼んでいるゆえ、ちょいと江戸へ行ってきなはれ」

といわれ、五年ぶりに江戸の土を踏んだのだ。

これまでの殺人で、辰蔵は夢のような大金を手にしていた。

しかし、白子屋が、

「堀さん。女でも囲うてみたらどうじゃ？」

などとすすめても、まったく興味をしめさぬ。

遊里へ足を踏み入れぬわけでないし、そうしたときには、おもいきって金をつかう。遊里ならば三十両、五十両の金など、わけなくつかい切ることができるし、さして怪しまれることもないからだ。

そうでもしなくては、到底、つかいきれなかったろう。

辰蔵に、

「おれは生きている」

という実感がない。

生きながら、死んでいるのも同様だと、つくづくおもうときがある。

三井覚兵衛や白子屋菊右衛門のあやつるままに身をまかせ、むしろ茫然と日を送ることに、堀辰蔵は慣れきってしまったようだ。

いうまでもなく、危険に取り巻かれている辰蔵であった。

暗殺を引き受けるときもそうだが、いつなんどき、お上の探索によって捕えられるやも知れぬし、そうなれば当然、死罪を受けねばならぬ。

また、あまりにも暗殺の秘密を知りすぎた者には、

「そろそろ、消えてもらわねば……」

というわけで、白子屋や三井覚兵衛が別の仕掛人を雇い、辰蔵を殺そうとするやも知れぬ。

（まさか、三井がおれを……）

と、おもってはいるが、現に、辰蔵は白子屋から、

「あの男、そろそろ消えてもらわぬと、こちらの身があぶない。ひとつ、たのみます」

と、そうした殺しを引き受けたことがある。

それは二年前のことで、相手も辰蔵のような浪人であった。

尋常に斬り合ったら、辰蔵のほうが危かったやも知れぬ。京都の島原の遊里から駕籠で帰る相手を待ち伏せ、先ず、手槍を駕籠へ突き入れ、深傷を負わしておいたからよかったものの、相手は屈せずに駕籠から転げ出て、辰蔵へ立ち向って来たものだ。

このとき、辰蔵は右の太股を切られ、ひどい目にあったが、何とか相手を殪すことができたのである。

その太股の傷が寒くなると、まだ疼く。

この夜、寝つけぬままに、辰蔵は太股の傷痕を撫でていた。

冷えこみの強い夜であった。

寛政十三年が改元のことあって享和元年となった、この年の十一月下旬（現代の十二月下旬）の或る夜のことで、明日には辰蔵の江戸到着を知った三井覚兵衛から知らせがあるはずだ。

堀辰蔵は、五十一歳になっていた。

この家は、池之端仲町にある例のふしぎな家で、番をしている老爺も以前のままだ。

「半次はどうしている？」

旅装を解きつつ、堀辰蔵が老爺に尋ねると、

「ああ……あの半次さんは、去年の夏に病気で死にましてございますよ」

「何、死んだ……」

「へえ。そう聞いておりますが、私は、くわしいことを知りませんのでね」

「ふうむ……」

何となく、

（割り切れぬ……）

気持ちであった。

江戸にいるときの自分を親身になって世話をしてくれた半次だけに、辰蔵は上方にいても、彼を忘れたことはない。

（五年前までは、とても病死するようには見えなかったが……）

明日、三井覚兵衛に会えば、くわしいこともわかるだろう。

けれども、あまりにも簡単に半次の死を告げられた所為もあって、辰蔵は酒をのむ気にもなれず、寝つけなかったことも事実である。

それでも、いつの間にか、眠りかけていたらしい。

まだ、眠りが浅かった。

そのため、冷たい初冬の夜の闇の底にうごめく物の怪しい気配が、堀辰蔵を眠りから引きもどしてくれたといってよい。

辰蔵は、寝たまま、大刀を引き寄せた。

二

堀辰蔵が寝ている二階の部屋へ躍り込んで来た刺客は二人であった。

刺客たちは襖の向うまで侵入して来て、しばらく中の気配をうかがった後に、辰蔵が眠り込んでいるものとおもい、一気に襖を引き開けて襲いかかった。

同時に、辰蔵も寝床から跳ね起き、大刀を抜いて迎え撃った。

六畳の、暗い部屋の中で、三人の男が刀で斬り合ったのだが、まるで組打ちのようなかたちとなった。

辰蔵自身、どうやって闘ったのか、よくおぼえてはいない。

左の腕に焼鏝を押しつけられたような激痛をおぼえ、右手の刀だけは放すまいとしながら、

二人の刺客と押し合い、揉み合った。
刺客は、二人とも浪人のようであった。
「早く、早く……」
とか、
「そっちから斬れ」
とか、二人は叫びかわした。
二人は室内で遣いやすいように脇差を手にしていた。
ぶつかり合い、斬り合って、そのうちに辰蔵は部屋から飛び出し、せまい階段を、ほとんど転げ落ちるようにして階下へ逃げた。
その辰蔵のうしろから、
「むうん……」
唸り声をあげ、刺客の一人が階段を落ちて来た。
逃げる辰蔵の一刀に、腹を突き刺されたのである。
「畜生め!!」
もう一人の刺客が階段を駆け下り、通路へ逃げた辰蔵を追った。
この刺客は、辰蔵が、せまい通路を抜けて玄関構えのような門から外へ逃げようとしているとおもいこみ、一気に通路へ走り出た。
ところが辰蔵は、戸口の傍の壁へ吸いつくようにして、自分を追って来る刺客を待ち構えていたのである。

ゆえに、刺客は辰蔵に背を見せて通路から門へ走ろうとしたわけだ。
その背中へ、辰蔵が、
「たあっ!!」
はじめて気合声を発し、飛びかかって斬りつけた。
「うわ……」
背中を切られ、おどろいて振り向いた刺客の喉元を、辰蔵の刀が横なぐりに切りはらっている。
刺客は刀を落し、笛が鳴るように奇妙な悲鳴をあげ、両腕を夜空へ突きあげて、仰向けに通路の石畳へ倒れた。
(二人、斬った……)
だが、これからどうしたらよい。
この家に、とどまっているわけにはゆかぬ。
料理屋や出合茶屋がたちならぶ一角だし、斬り合いの凄まじい物音が辺りへきこえぬはずはない。
おそらく、だれかが、近くの番所なり番屋なりへ知らせに行ったろう。
ようやく、二人の刺客を殪した堀辰蔵も数カ所に傷を受け、通路から、しばらくはうごけぬ。
荒い呼吸を懸命にしずめつつ、

「老爺……老爺……」

辰蔵は戸口へ這い寄り、家の中へ声をかけた。

こたえはない。逃げてしまったのか……。

（これでは、仕方もない）

通路へ、へたりこんだまま、辰蔵は、

（いっそのこと、今夜、彼奴らに斬られて死んでしまえばよかった……）

切実に、そうおもった。

切られた左腕の出血がおびただしく、全身のちからが抜け落ちて、手も足も知覚がなくなっている。

（ど、どうにでもなれ。捕まってもかまわぬ）

だが、その前に水をのみたかった。

喉がひりついて痛み、どうしようもない。

（水……水だ）

辰蔵が戸口から中へ這い込もうとしたとき、門の屋根を乗り越え、通路へ飛び下りた人影が一つ。

振り向いた辰蔵が、

「だれだ？」

声をかけると、

「あっ、先生。堀先生……」

通路を走り寄って来た男を見て、辰蔵が目をみはった。

「おぬし、半次ではないか？」

「さようで」

「死んだのではなかったのか……」

ちょうど、そのころ……。

浅草御門外・福井町三丁目の小間物問屋〔若松屋長兵衛〕方でも、異変が起っていた。

そのとき、お道は奥の二階の寝間に芳太郎と眠っていた。

奥庭に面した階下は、主人の長兵衛お徳夫婦の二間つづきの居間、それに湯殿・便所などがあり、二階の三間が芳太郎お道夫婦のものであった。

若夫婦の寝間の次の間に、幸太郎（六歳）、お光（五歳）の年子が眠っていた。

お道は、二十五歳になっていて、芳太郎は三十九歳。

ちかごろ、めっきりと躰がおとろえた父親の長兵衛に代り、芳太郎は立派に若主人の役目を果している。

お徳は六十歳になり、三年ほど前に大病をしたけれども、それが、さいわいに回復してからは、むしろ以前より健康となり、躰も肥えてきたようだ。

芳太郎もお道も、何事につけ、お徳の指図を受けているが、それにしても、むかしにくらべ

れば、お徳も物やわらかになり、
「年を老ると、こんなにおもしろい遊び道具ができようとはおもわなかった」
こういって、二人の孫の相手をするのが何よりもたのしみらしい。
孫たちを叱ることもない。
お道が、
「もっと、叱って下さいまし」
そういうと、お徳は苦笑いを浮かべて、
「それは、お前さんたちのすることだ。祖母さんは孫を甘やかすのが役目ですよ」
取り合おうともせぬ。
「変れば変るものでございますねえ」
と、四十七歳になったおうめが、おもわず洩らしたこともある。
さて、その夜更けに……。
何やら、ずしんという物音が階下から二階の寝間へ響いてきたので、お道は、はっと目ざめた。
夫の芳太郎は、よく寝入っている。
(何だろう?)
半身を起したとき、階下で、若松屋長兵衛の、うろたえた叫び声がきこえた。
「ありゃあ、何だ?」

芳太郎も目ざめて、立ちあがった。

三

夫の芳太郎より先に、お道は階下へ駆け降りて行った。
奥の小廊下に、お徳を抱き起した長兵衛がいて、女中部屋から走り出たおうめとおしんへ、
「早く、お医者さまを……早く、早く……」
と、叫んでいた。
お徳は、目ざめて小用に立ち、用を足し、小廊下を寝間へもどろうとして、突然、転倒したのである。
心ノ臓の発作が起ったのだ。
前に大病をしたときも、心ノ臓を患ったのだが、回復してからは一度も発作を起していなかった。
それだけに、油断もあったのだろう。
かかりつけの医者が駆けつけて来る前に……というより、妻が転倒する物音に飛び出して来た長兵衛が、
「これ、しっかりしなさい」
抱き起すと、お徳は長兵衛の胸へしがみつくようにして二声、三声、呻いたかとおもうと、

がっくりと息絶えてしまった。

夕餉をすまし、しばらくしてから、お道が幸太郎とお光を連れて、お徳の居間へおもむき、

「おやすみなさい」

と、二人の子に挨拶をさせたのが、姑の元気な姿を見た最後であった。

そのときのお徳には、何の変りもなかった。

夫の長兵衛の躰が、急に衰えはじめてからは、

「もしもの事があるといけない」

と、お徳は長兵衛の寝間で、共に眠るようになり、

「そんなに、気をつかってもらわなくても……」

長兵衛は、おどろきもし、よろこびもした。

養子として若松屋の主人になって以来、家つきの妻が、このような心情をしめしてくれたのは、これがはじめてといってよい。

若松屋の家族も、また奉公人たちも、お徳の死を悲しんだ。

これがもし、十年前のお徳だったら、

「大きな声じゃあいえないが、ほっとしたね」

「まったくだ」

そんな陰口もきかれたにちがいない。

お徳は、お道という自分の後継者を、

「ようやくに……」

見つけ出し、これを厳しく鍛えぬき、お道が息子の芳太郎を助けて、

（私が死んだ後にも、私が教え込んだとおりに、やってくれるにちがいない）

見きわめをつけたときから、がらりと人柄が変ったようにおもわれる。

お道は、ほんとうの母親に死なれたような悲しみをおぼえた。

実の母は、まだ幼いときに亡くなり、悲しくはあったが、それはどこまでも子供の悲しみであり、父親の源助が殺されたときは、悲しみよりも驚愕のほうが強く、無我夢中だったのである。

若松屋長兵衛は、だれよりも悲嘆が深く、衝撃も強かったらしい。

約一年の、自分へ対するお徳の優しいあつかいが、まるで夢を見ているようにうれしく、長年にわたって、養家の暖簾を、

（汚してはならぬ）

と、骨身を削って、はたらいてきただけに、その疲労が心身に積もり、衰弱しはじめた自分を介抱してくれるお徳に、長兵衛は、たよりきっていた。

芳太郎は、長兵衛のことを、

「お道。気をつけておくれよ」

念を入れたし、お道も、できるかぎりは亡きお徳の寝間で眠るようにつとめた。

しかし、長兵衛は、

「ああ、もう……これで、もう、私のつとめは終りました。お前さんたちがしっかりとやってくれるので、おもい残すことは少しもない」

何かにつけて、芳太郎とお道へいうようになった。

そして、この年が終るころ、長兵衛は臥床から起きあがれぬようになってしまった。

若松屋長兵衛が亡くなったのは、翌享和二年の三月四日の夜である。

息絶えんとして長兵衛は枕頭に詰めきっている芳太郎とお道、それに孫たちの顔をながめ、

「もう、安心だ……安心だ」

呟くようにいってから、両眼を閉じた。

その長兵衛のおもいは、若松屋の親類たちや奉公人も同じであったろう。

同業の主人たちも、

「若松屋さんも、あの跡取りなら大丈夫だ」

「何しろ、内儀がしっかりしていなさるからねえ」

「それもそうだが、あの息子が……いや、芳太郎さんが、これだけになるとはおもわなかった」

「まったく。こうなると何だねえ、亡くなった前の内儀が、えらかったということになりましょうかね」

「そりゃあ、まあ、そうなのだろうが、ひとりでえらがっていたって仕方もない。仕込みを受けた、いまの夫婦もえらいということだ」

などと、評判をしているらしい。

ここに芳太郎は、六代目の若松屋長兵衛を名乗ることになる。

で、これよりは芳太郎を、長兵衛の名をもってよぶことにしよう。

ときに芳太郎は……いえ、若松屋長兵衛は四十歳。

お道は、二十六歳。

この年の夏には、大番頭の善助が亡くなった。

「嫌だねえ、お道。どうしてこう、嫌なことばかりつづくのだろう」

と、長兵衛が眉をひそめた。

けれども、前世代の人びとが、この世から姿を消すときは、こうしたものなのである。

これからは、長兵衛とお道が、若松屋を我が子の幸太郎に引き継がせるまで、油断も隙もなくはたらきつづけねばならないのだ。

夫婦は気を引きしめた。

その緊張のうちに、二年、三年と歳月が過ぎ去って行く。

それは「あっ……」という間のことで、亡き両親も、

「私たちの年ごろには、こんなに呆気なく月日がたってしまったものかねえ」

と、長兵衛がいった。

「きっと、同じだったとおもいますよ」

「そうかねえ。私が、お前をほれ、土蔵の中へ引っ張り込んだころには、一年が、うんざりす

るほど長かった」
「あ、何を、いまになって……」
「お前。このごろ、大分に肥ったようじゃないか」
「まあ、嫌な……」
「ねえ、お道」
「はい？」
「もう一人、子供がほしいね。そう、おもわないか？」
「そうでございますね」
「ま、こっちへおいで。おいでというに……」
だが、この後、どうしたことか、長兵衛夫婦には子が生まれなかった。
そのかわり、幸太郎もお光も病気一つすることなく、すくすくと育って行ったのである。
若松屋は、盛業をつづけた。

四

文化四年（西暦一八〇七年）の年が明けて、お道は三十一歳になった。
例年のように、幸太郎（十三歳）お光（十二歳）の二人の子を連れ、すでに五十の坂をこえた女中のおうめと手代を従え、お道は深川へおもむいた。

先ず、万常へ行き、新年の挨拶をしたわけだが、ちょうど、そのとき、万常の常客の日野屋孫兵衛が来ていて、
「旦那。このひとはむかし、旦那に可愛がっていただきました女中でございます。おわかりになりましょうか？」
おさわが、お道を連れて日野屋の座敷へ挨拶に行き、こういうと、
「はて……だれだっけね？」
「その節は、ありがとう存じました」
と、頭を下げるお道を、日野屋孫兵衛が凝と見て、
「さあ……どうも、わからない」
くびをひねった。
お道が、万常で座敷女中の見習いとしてはたらいていたのは、十四から十六までの二年間であった。
その折、日野屋は、他の座敷女中からお道の身の上をきいて、
「そりゃあ、まことに気の毒な……」
と、何かにつけて親切にしてくれ、万常へあらわれるたびに、たとえ、お道が座敷へ出なくとも、
「これをね、あの可哀想なお道へあげておくれ」
かならず、こころづけの金をわたしてよこしたものだし、

「これは、お前さんが着たら、ちょうどいいとおもってね」
帯や着物を買って来てくれたこともある。
日野屋孫兵衛は、日本橋通り三丁目の薬種問屋の主人で、いまは六十をこえているであろう。
「どうしても、おわかりになりませんか？」
と、おさわ。
「いや、こうして、じっくりと顔を見ているのだが、わからないねえ」
「お道でございますよ、旦那」
と、おさわが笑い出した。
「ええっ……」
日野屋は目をみはり、真底からびっくりしたらしい。
「ま、まさか……？」
「お道でございます」
また、お道が頭を下げた。
「ほ、ほんとうかい。これが、あの……」
いいさした日野屋が、
「ふうむ……」
息を引いて、まじまじとお道を見やり、
「まるで、狐に化かされたような……」

と、いったものだ。
少女のころのお道は、丈夫ではあったが痩せていて、ことに父が殺された後、たった独りきりの身の上になってはたらきはじめ、緊張と不安の連続だったといってよい。
いかに丈夫でも、これでは肥るわけがない。
それから十五年後のいま、お道は胸も腰も、たっぷりとした肉置きになってしまい、顔貌もふくよかになって、わずかではあるが顎が二重になりはじめた。
だからといって、苦労が熄んだというわけではない。
六代目若松屋長兵衛の妻として、夫の手助けをするばかりではなく、二人の子や大勢の奉公人の面倒を見なくてはならず、一日として気の休まることはない。
しかし、当時の女が三十をこえれば、その成熟度は、心の上にも躰の上にも、現代の女とは、
「くらべものにならない」
のである。
もともと健康な躰のもちぬしだけに、二人の子を産み、大店の内儀としての環境がぴたりと板についてくれば、当然、躰つきも変ってくる。
その上、髪は丸髷、青々と眉を剃りあげ、歯には鉄漿をつけた人妻の姿なのだから、日野屋孫兵衛にしてみれば、
「一足飛びに……」
お道の変貌へ向い合ったわけなのだから、

「こりゃあ、どう見てもわかろうはずがない」
と、ようやくに驚嘆の表情が消えた顔がほころび、
「ふうむ……なるほど。そういわれてみれば、たしかにお道っちゃんだねえ」
日野屋は、ようやくに納得をした。
「お前さんが、こんなに立派になったとは……いや、まことにめでたい」
お道が若松屋の人となったことは、ずっと前に耳へはさんでいた日野屋だが、何分にも十五年の歳月をへだててのことゆえ、日野屋の脳裡には少女のころのお道のおもかげしか浮かんでこなかったのもむりはない。
「いや、何だね。男なら、こうは変らぬものだよ。変るのは女だ。よきにつけ、悪しきにつけ、女は、いつも変っている。ひどいときには、たった一日で面相が変ってしまうからねえ」
と、これは、お道とおさわが引き下った後で、日野屋が座敷女中に洩らした言葉だそうな。
さて……。
この日、深川から帰って来たお道は臥床へ入ってからも、なかなかに寝つけなかった。
となりの床にいる長兵衛が、それに気づいたらしく、
「これ……これ、お道……」
「……はい」
「どうした。寝苦しいのかえ？」
「いえ、別に……」

「どうも先刻から気にかかっていたのだが……お前、深川から帰って来てから気色がすぐれないようだけれど、躰のぐあいでも悪いのか？」
お道は、ためいきを吐いて、
「すみません。そう見えますかしら？」
「ああ、見える」
「申しわけございません」
「いったい、どうしなすった？」
「実は旦那。今日、万常さんへまいりましたところ、親分さんが正月早々、寝込んでいなさいましたので……」
「佐吉さんが……そりゃあいけない」
「ま、私には元気の様子を見せていなさいましたけれど、半年ほど、お目にかからぬうちに、すっかり痩せおとろえてしまいまして……」
「いけないねえ」
「むかしから、お上の御用一筋に根をつめておいでなさいましたから……」
「そうだ。うちの親父どのと同じことだよ」
「はあ……」
「そうだね。それでは、二、三日のうちに、私が行って様子を見て来よう。その上で、よい薬なり何なり、できるだけのことをしてさしあげようじゃないか」

「ありがとう存じます」
「なあに、これはお前さんの実家同様の人たちのことだ、黙ってはいられませんよ」

五

黒江町の佐吉は、この年の夏の盛りに病歿した。
享年五十歳であった。
女房のおさわはむろんのこと、若松屋長兵衛お道の夫婦も、およぶかぎり医薬の手をつくしたが、やはり、いけなかった。
お道の予感が、的中したことになる。
佐吉の病気は、現代でいう癌のようなものだったのではないだろうか。
息を引きとる三日前に、お道が見舞いに行くと、
「今度は、すっかり厄介をかけてしまったねえ」
佐吉は病みおとろえた白い紙のような顔色をしていながらも、落ちつきはらって半身を起し、お道へ微笑みかけながら、
「ま、これをごらん」
懐紙の上へ、銀煙管を乗せて、お道の前へ出した。
「おぼえているかえ？」

「はい」
忘れるものではない。父親の源助の死体の傍に残されていた、あの煙管であった。蜻蛉が一つ、精妙な細工で刻り込まれてある古びた銀煙管だ。
「あれから十何年もの間、この煙管を手がかりに、お前のお父つぁんの敵を討ってやろうと、ずいぶん探りまわったものだが……ま、かんべんをしておくれよ、お道。とうとう、見つからねえままに、あの世へ旅立つことになってしまった……」
「そんなこと、親分さん……」
「お前は女だ。しかも、若松屋の内儀に出世したからには、憎い敵のことを忘れてしまうがいい」
「はい」
「この煙管を、始末してしまってもいいね？」
「あの、でも……」
「それとも、お前が持っているかえ？」
「親分さんさえ、よろしければ……」
「いいとも」
佐吉が懐紙に包んで手わたした煙管を、お道が押しいただくようにしたものだから、佐吉は不審の面もちで、
「お前、妙なことをするじゃあねえか。その煙管は、お前のお父つぁんを殺めたやつの……」

「いいえ、ちがうんです」
「何がちがう？」
「私は、十何年もの間の、親分さんの御恩を忘れまいとして、この煙管をいただいたのでございますよ」
「う……」
「死んだお父つぁんも、こんなに長い間、親分さんの心にかけていただいて、きっと、よろこんでおります」
佐吉は、目をみはったまま、しばらくは言葉もなかった。
ややあって、
「ありがとうよ、お道。よくいってくれた。かたじけねえ」
いうや、たちまちに佐吉の両眼が潤みかかって、
「たのむよ、おい」
「え……？」
「女房をたのむよ」
「はい」
こうなっては「大丈夫ですよ、きっと癒りますとも」などという御座なりの言葉を口にのぼせぬお道である。
「御安心なさいまし」

きっぱりと、佐吉に請け合った。
「うむ、うむ」
大きくうなずいた御用聞きの佐吉が、
「これで、おれも百人力で、三途の川が渡れようというものだ」
みずからを励ますような声で、そういった。
こうして、佐吉が亡くなった後での、女房おさわの嘆きは一方のものではなかった。
万常の座敷女中たちが、
「いいかい。みんなで、おかみさんから目を離さないようにしなくてはいけないよ」
「もしやすると、親分の後を追いなさるかも知れない」
「そのことだよ。男の人たちにも、念を押しておこう」
一時は、ひそかに打ち合わせ、おさわを見張っていたこともあったようだ。
佐吉の二七日の忌日がすぎて間もなく、万常へあらわれたお道が、おさわに、
「おかみさん。どうか、しっかりして下さいましよ」
「もう、どうしていいのだか、わからなくなってしまった……」
「そんなことをいってはいけませんよ」
「だって、お道。お前さんでも、うちにいてくれたら、万常の暖簾を引き渡すという張り合いもあろうけれど……」
「いえ、私は若松屋にいても、此処が実家なんでございますから……」

「いくら、そういってもらっても……もう、私は店をやって行く張りが消えてしまった」
「いい跡つぎがございますよ」
「え……？」
「そのつもりで、それとなく私が仕込んだ人がいるんでございます」
「何だって……？」
「いえ、親分さんが亡くなる、亡くならないにかかわらず、此処のむすめ分として、お手助けができようかとおもいましてね」
「そりゃあ、お前、だれなんだえ？」
「おかみさんも、よく御存知の人でございますよ」
「だ、だれだろう。わからないねえ」
「おしんでございます」
「まあ……」
「あの娘なら大丈夫でございます。私が、しっかりと見きわめました。かならずおかみさんのためになることと存じます」
かねてから、佐吉おさわの夫婦が年老いたときのことを考え、お道は、おしんをそのような目で見て、こころづもりをしながら身近において仕込んできた。
この年、二十四歳になったおしんは、むろん、そのことを知らぬ。
もっとも、お道は自分ひとりで決め込んではならぬとおもい、これまでに何度も、おしんへ、

「そろそろ、お嫁に行かないといけないねえ」
もちかけてみても、おしんは、
「いいえ、私はお嫁になんか行きたくありません。いつまでも、お側において下さいまし」
いい張ってきかなかったのだ。
「ほんとうに、お前。おしんちゃんがうちへ来てくれるのかえ？」
「説きふせます」
「まあ、おもいがけないことになったねえ」
おどろきながらも、おさわは満更ではない。
おしんは、お道の使いやらお供やらで、何度も万常へ来ているし、気性が明るく、気ばたらきのよいおしんを、おさわも気に入っていた。
「いいかえ。お前さんは私の代りに万常へ行ってもらうのですよ。いわば私の実家の養女となるのだから、こうなれば、私とお前さんは姉妹同様ということになる。だから、たのみます。こうしてたのむから、万常へ行っておくれ」
手をついてたのむ、お道に対して、おしんもこれを断ることができぬ。
この年の秋。
おしんは万常の養女となり、三年後に、木挽町六丁目の料理屋・石津屋の次男で一つ年下の平次郎と夫婦になった。
万常は、この夫婦養子によって引き継がれて行き、おさわは亡くなるまで、お道のはからい

を感謝していた。

それはさておき……。

御用聞きの佐吉が亡くなった年の十一月下旬に、こんな事件が起った。

それは、お道の関わり知らぬことではあったが……。

六

その夜。

川向うの寺嶋村（現東京都墨田区東向島）の、諏訪明神の社の横道を入ったところにある〔大村〕という料理茶屋で、三井覚兵衛が客になっていた。

いまの覚兵衛は、二代目・羽沢の嘉兵衛になりきっており、香具師の元締としての羽振りも相当なものだ。

以前、いっしょに暮していたお吉は病死してしまい、覚兵衛は、先代の嘉兵衛が根城にしていた本所・元町の料理茶屋〔河半〕に住み暮している。

先代の妾だったおもんは、先代が殺された後で、三井覚兵衛のものになった。

覚兵衛が密かに手をまわし、堀辰蔵を使って先代を暗殺させたことを、おもんは知っていない。

いまの覚兵衛を、羽沢の嘉兵衛とよぶべきだろうが、まぎらわしくなるので、やはり、三井覚兵衛の名で通したい。

覚兵衛は、六十を一つ二つはこえていよう。

白髪を上品な町人髷にゆい、地味な羽織・着物、白足袋という姿を見ると、どこかの大店の主人としかおもえない。

覚兵衛を〔大村〕へ招いたのは、これこそ、正真正銘の大店の主人で、浅草並木町の蠟燭問屋・伊豆蔵屋七兵衛という。

〔大村〕は、こんもりとした木立と竹林に囲まれてい、風雅な茅屋根の離れ屋が庭にいくつかある。

この店は格式も高く、大身の旗本なども忍んであらわれるそうな。

覚兵衛と伊豆蔵屋七兵衛は、その離れ屋の一棟で酒を酌みかわしている。

それぞれの、供の男たちは別の場所で酒をのんでいるらしい。

先刻から、座敷女中も入れずに、二人きりで密談をかわしていたが、その途中で、伊豆蔵屋が出した重い金包みを、三井覚兵衛はふところへ仕舞い込んだ。

「さて……これで、はなしはすみましたな、伊豆蔵屋さん」

「はい。どうか元締。よろしく、お願いを申します」

「ようございますとも。ま、安心をしておいでなさるがいい」

と、立ちあがった覚兵衛が小用のため、渡り廊下へ出て行った。

それを見送ってから、伊豆蔵屋が女中をよび、

「酒をたのみますよ。それから、そろそろ料理も出しておくれ」
「かしこまりましてございます」
一方、渡り廊下へ出た三井覚兵衛は、其処に控えていた手下の男へ、
「御苦労だのう。もう見張りはいらぬ。向うへ行って、みんなといっしょに飲んで来るがいい」
「へえ。では、そうさせていただきます」
「うむ」
うなずいて、覚兵衛は渡り廊下を歩み、突き当りの雪隠（便所）へ入って行った。
別の離れから、三味線、太鼓の音がきこえている。
雪隠には、香がたきこめられてい、覚兵衛は戸を開けて中へ入った。
その瞬間に……。
雪隠の天井から人が降ってきた。
天井へ吸いつくようにして、覚兵衛が入って来るのを待ちかまえていたのだ。
覚兵衛が、おどろいたときには、何かで頭を叩きつけられ、声もたてずに気を失った。
天井から降って来た男は、半次である。
半次は、気絶をした覚兵衛を雪隠から、裏の竹藪へ引きずり込んだ。
そこに、もう一人の男が待っていた。
五十七歳になった堀辰蔵であった。

辰蔵は灰色の布で顔を包み、手に杖をついている。
「旦那。うまくいきました」
「声を立てぬように、口を……」
「合点だ」
半次が用意の布で覚兵衛の口へ猿轡をかませた。
「よし。立たせて、そこの木へ寄りかからせろ」
「へい」
半次が、覚兵衛をいわれたようにした。
杖を手放し、腰を落した堀辰蔵が大刀の柄へ手をかけ、
「よし、はなれろ」
と、声をかけた。
半次が、覚兵衛の躰をささえていた手をはなし、飛び退いた。
三井覚兵衛が、半ば息を吹き返したらしく、よろりとなったのへ、
「む!!」
堀辰蔵が抜き打ちに斬りつけた。
一閃、二閃、覚兵衛へ刃をあびせかけておいて、
「行くぞ」
辰蔵が竹藪の中を、跛をひきつつ走り出した。

杖を拾った半次が、その後へつづき、二人とも深い夜の闇に呑まれてしまった。

倒れた三井覚兵衛が凄まじい唸り声を発し、のたうちまわっている。

猿轡を外そうとしても、それが不可能であった。

辰蔵の刃に、覚兵衛の両腕は肘の下から切り落されてしまっている。

いつまでたっても雪隠からもどらぬ三井覚兵衛に、伊豆蔵屋が渡り廊下へ出て来て、覚兵衛の唸り声をきいた。

それから大騒ぎとなったわけだが、手下の者が駆けつけたとき、覚兵衛は死んではいなかった。

そのころ。

堀辰蔵と半次は、大村から遠く離れた小道を歩いている。

「旦那。どうして殺ってしまわなかったので？」

「なあに、おれが手にかけたことを、覚兵衛にわからせたかったのさ。死んでしまってはわかるまい」

「なるほど」

「腕二本、叩っ斬ってやったのだ。あいつも行先、長くはあるまいよ」

「ざまあ、見やがれ。旦那もあっしも、さんざ、こき使っておいて、てめえの悪事を知りすぎたから消してしまおうなんて……。三井覚兵衛は、もう少し増しなやつだとおもっていましたがね」

「仕返しをするのに、何年もかかったのう」

「覚兵衛も油断のねえやつでござんすからね」

「だが、今夜は油断をした」

「へっ。いい気味だ」

「半次……」

「何です？」

「この仕返しはおもしろかったのう。おかげで、この数年の間は退屈をしなかったものな」

「まったくで。旦那も、あのとき、ずいぶん斬られなすったものねえ」

「お前が助けに来てくれなんだら、あのとき、死んでいたろうよ」

二人の目の前に小さな川があらわれた。

そこに小舟が、二人を待っていた。

雪の朝

一

「もし、お目ざめでございますか？……もし……」
寝間の外の小廊下で、女中のおうめの嗄れた声がした。
「あ……おうめさんかえ」
「さようでございます」
「いま、行きますよ」
こういって、お道は臥床から半身を起した。
師走（陰暦の十二月）の朝の寒気が、まだ薄暗い寝間に張りつめている。
となりの臥床では、五十二歳になった夫の若松屋長兵衛が寝息をたてている。
この年、文化十一年も暮れようとしていた。
お道は、三十八歳になり、女中のおうめは六十になった。

急いで寝間着の上から女用の半纏を着て、
（雪は熄んだのかしら？……それにしても……）
それにしても、おうめが早朝の寝間へ声をかけるなどとは、めずらしい。
何か、急ぎの事が起ったのであろう。
かつて、姑のお徳がつかっていた、この寝間には、長四畳の次の間がついている。そこを通って障子を開けたお道の前に、おうめが寒そうに屈み込んでいた。
廊下の雨戸は、まだ閉まっている。
「どうしました、おうめさん」
お道は、若松屋へはじめて奉公にあがった自分を親切にしてくれたおうめを呼び捨てにはしていない。
「あの、表に行き倒れがございまして……正どんが表の戸を開けましたら、向うの佐竹様の塀の裾に老人が倒れて……ともかくも、裏の土間へ引き入れておきましたが、どういたしましょう？」
「息は？」
「まだ、あるようでございますが……」
うなずいたお道は、おうめと共に大台所へ出て行った。
すでに起きて朝の仕度にかかっていた女中や小僧、手代たちが、土間に仰向けに倒れている老人を取り囲んでいた。

老人は、まだ息を吹き返していない。

小僧の正吉が見つけたときは、出羽の国久保田二十万五千八百石の城主・佐竹侯の上屋敷の塀外に、二枚の莚を引きかぶり、倒れていたそうな。

その莚にも、雪が積もっている。

昨日の昼すぎから降り出した雪は、今朝になっても熄んでいない。

正吉は、近寄って見て、すぐに行き倒れとわかったので、走りもどって手代に告げ、ともかくも大台所の土間へ運び込んだのである。

老人は洗いざらしの股引こそつけているが、垢じみた袷を痩せおとろえた躰にまとい、右手に、しっかりと、竹の杖をつかんでいた。

薄くなった白髪を無造作に結び、

「まるで、火鉢の灰のような顔色……」

をして、口もとを固く喰いしばっている。

おそらく年齢は、

(七十をこえていよう)

だれもが、そうおもった。

「番屋へ知らせましょうか?」

と、手代の孝次郎が、お道へ尋いた。

「まあ、その前に手当をしておあげ」

竈の火の温もりと、ぬるま湯の介抱を受けて、老人は薄く両眼をひらいた。

枯れ木のような躰であったが、肩幅がひろく、骨組もしっかりしている。

介抱を受けている老人の、骨が浮き出た胸に刀の傷痕があった。

刀はおろか、刃物一つ身につけていない老人であったが、

(このお人は、むかし、おさむらいだったにちがいない)

と、お道は看て、腰を落し、

「もし、お気がつきましたか?」

老人へ声をかけた。

「ここは?」

「若松屋という店の台所でございます。あなたが、向うの佐竹様の塀外に倒れておいでだったもので……」

「助けて下された……」

「はい」

老人は、ほろ苦い笑いを浮かべ、

「死なぬうちに、朝が、来てしもうたか……」

「まあ、何をいいなさることか……」

「夜のうちに、死ねるかとおもうていたが……つまらぬことをしてくれましたな」

「では、死ぬおつもりだったので?」

「はい。物も食べておらぬし、あの雪の中を歩いていて、眠くなってきたので、これはしめたと……」

「まあ……」

みんな、呆れ果てて老人をながめていた。

この老人、堀辰蔵であった。

人びとの目には、七十をこえて見えたが、この年で辰蔵は六十四歳になっている。

やがて……。

おうめがつくってくれた重湯を啜り込んだとき、堀辰蔵は、つくづく、なさけなさそうな声で、こういった。

「ああ……死にたいとおもうている身が、われ知らず口をつけてしもうたわい。何とあさましいことじゃ」

お道も辰蔵も、たがいにそれと気づかぬ。

深川〔万常〕で、お道は一度だけ、堀辰蔵を見ていたし、金一両という祝儀をもらってびっくりしたこともあるが、それはもう二十何年も前のことだ。

客のひとりの贅沢な風采の侍という印象だけだったし、むろん、あのときのことは忘れてしまっている。たとえ、おもい出したとしても、当時の辰蔵と、いま此処に行き倒れの老人となった辰蔵とは、到底、一つにはなるまい。

辰蔵は、いまも尚、自分の一方的な激昂によって殺害してしまった煙管師と、その娘のことを忘れてはいない。

辰蔵は、三井覚兵衛と万常へ行ったときをふくめて、少女のお道を二度、見ている。

その、お道の面影は、いまも瞼を閉じると微かに浮かびあがってくるけれども、だからといって、三十八歳の大店の内儀となり、ふっくらとした顔だちになり、貫禄も充分な躰つきに変ったお道とは、これまた一つにはならなかった。

二

結局、堀辰蔵は若松屋で一間をあたえられ、手当を受けることになった。

「どこのだれとも知れない人を、いいのかねえ」

と、若松屋長兵衛がいった。

番頭たちも、

(妙な関わり合いになっては……)

と、おもっていたらしい。

だが、お道は、

「ともかくも、躰がよくなるまで……」

ということで、夫の了解を得た。

早くから両親を失ったお道は、老人に弱いところがある。

ことに、

(男の年寄りを見ると、まだ、恩返しもしてあげないうちに死なれてしまったお父つぁんを想い出して……)

しまうのであった。

堀辰蔵について、お道は不安もおぼえず、心配もしていなかった。

想像もつかぬような苦労を重ねてきたらしく、いまは何の欲もなくなり、ただ、ひたすらに、

「うまいぐあいに死にたかった……」

という老人に、

「嘘はない」

見きわめをつけていたのである。

辰蔵は姓を名乗らず、

「吉蔵と申します」

と、いった。

医者に診せるまでもなく、常備の薬湯と食事だけで、十日もすると、辰蔵は起きあがれるようになった。

「お内儀さん。とんだ厄介をかけてしまいましたな。これで、どうやら歩けましょうよ」

と、いい出た辰蔵へ、お道が、

「何処へ行きなさる?」

「そうだのう……やはり、死場所をさがすことになりましょうよ。どうも、わしは意気地がないものだから、うまく死ねないのだ」

「また、そんなことを……」

「二年前までは、気の合った相棒がいたのですがね。こやつが病死してしまった後は、なるべく金も持たぬようにして、行きあたりばったりで、だんだんに躰がおとろえてきて……ま、先日のように、雪の中で凍りついて死んでしまうのが、いちばんよかったのだが……」

淡々と、何の衒いもなくいう辰蔵に、お道は笑いをさそわれてしまう。

お道は老人に身寄りはないのか、などと尋ねることをしなかった。

老人の面倒を見る身寄りがいるなら、行き倒れになるはずもないからだ。

「先日は、もう少しで、うまく死ねるところだったのだが……」

「よけいなことをして、悪かったかしら」

「そういわれると、わしは返事の仕様がないなあ」

「ま、もう少し、此処にいてみたらどうですか?」

「わしはね、お内儀さん。むかしは悪い事ばかりして、いろいろと、その怪我をしたりしているものだから、躰も、うまくうごいてくれぬし……何の役にも立たぬ」

「まあ、気をつかわなくとも、ゆっくりしておいでなさい。そのうちに、死場所とやらが見つかるかも知れない」

その、お道の言葉が気に入ったらしく、

「ふむ、そうか……では、まあ、少々、世話になるかね」
「そうなさるがいい」
いまの堀辰蔵には、毒気も欲もない。
また、怖いものは何一つない。
老いて、このような人柄になったのは、二年前に病死をした半次との数年にわたる生活によるものだったろうか……。
三井覚兵衛を殺してのち、辰蔵と半次は、一人も手にかけていなかった。
貧しくとも助け合いながら、旅から旅の暮しをつづけてきたといってよい。
その年月が、いまの堀辰蔵をつくりあげたというか……いや、亡父の敵を追って、故郷の越後・新発田を出る前の辰蔵にもどったといったほうがよいのか。
辰蔵は、大台所に近い屋根裏の一間をあたえられ、寝起きするようになった。
お道には、それでも重い口をひらく辰蔵だったが、若松屋の奉公人とは、ほとんど口をきかない。
年が明けて、文化十二年になると、辰蔵は、もっぱら、薪割りを受け持った。
その薪割りに、他の奉公人は目をみはった。
左腕が不自由らしく、右腕一つで鉈をふるい、山のように積んだ薪をつぎからつぎへ割りこなしてゆく。
息もはずませず、掛け声ひとつ起らなかった。

「やっぱり、もとは、おさむらいだね」
「まったく見事なものだねえ」
奉公人たちは陰で、うわさをしているが、こちらから辰蔵へはなしかけることもない。
おうめなどが時折、はなしかけても、辰蔵は返事をしなかった。
お道も、辰蔵の身の上について尋ねたりはせぬ。
辰蔵のほうから語り出すのならともかく、こちらから尋くべきことではないからだ。
そうしたお道の配慮や、親しげに近寄って来る奉公人もいないので、それが気楽らしく、辰蔵は、春が来ても若松屋を出ようとしなかった。
黙々として、辰蔵は下男のすることにはたらきつづけた。
骨張った老体のうごきは鈍かったけれども、風雪にさらしつくされた石仏のような、皺の深い老顔には微笑ひとつ浮いてはこない。
なるべく、人目に立たぬようにして、辰蔵は裏手から外へ出たことはなかった。
「使い走りをさせてはいけない」
と、お道は、みんなに念を入れた。
躰も不自由のようだし、それにまた、
(ふいと、何処かへ行ってしまうかも知れない……)
ような気がしたからである。
何処かへ行くつもりなら、いつでも行けるのだが、

（そこはそれ、はずみというものがあるから……）

と、お道は、考えたのだ。

物事のはずみというものは、実におそろしい。

父親が殺されたのもそうだし、また、夫の長兵衛が若いころ、女中だった自分を土蔵の中で抱きすくめたのもそれであった。

そうした、お道の運命が、ひいては酒屋の松次郎のむすめのおしんが〔万常〕の養女になったことへもむすびついている。

おしんは、いま夫の平次郎との間にお雪という女の子をもうけ、夫婦仲よく〔万常〕の経営に打ち込んでいる。

万常のおさわは、そろそろ六十に近くなったが、いまも元気で、客の座敷へ顔を出している。

酒屋の松次郎方では、夫婦ともに変りがない。

長男の庄太は三十五になり、女房のおすみとの間に梅太郎という子をもうけ、これもまた老いた父親にかわり、酒屋のあるじにおさまっている。

この年、お道は三十九歳になったわけだから、長男の幸太郎は二十歳になった。

「うちにいて、甘やかしてはいけない」

と、若松屋長兵衛がいい、四年前から幸太郎は、同業の小間物問屋で南伝馬町一丁目に店舗がある尾村屋源治郎方へ修行に出て、いまは手代をつとめている。

むすめのお光は十九歳になった。

お光は年ごろでもあるし、縫い物などの稽古にいそがしい。

また、母親のお道がきびしいので、家の中のこともよくやるようになった。

春が過ぎ、夏が来た。

〔吉蔵〕こと堀辰蔵の細い躰に、いくらか肉がついたようである。

そうした或日。

お光は、本所・松坂町二丁目の袋物問屋・菱屋忠右衛門方へ、泊りがけで遊びに出かけた。

菱屋は、若松屋の親類にあたる。

橋の上

一

菱屋忠右衛門には、お光より一つ下の、お八重というむすめがいる。

二人は仲がよくて、お八重が若松屋へ泊りがけで遊びに来ると、お光もまた菱屋へ泊りがけで遊びに行く。

お光は父親の長兵衛に似たかして、顔だちも姿も美しく、若松屋の界隈では、

「福井町小町」

などと、よぶものもいるそうな。

さて……。

お光は、菱屋に三日泊って帰ることになっていた。

送り迎えは、お崎という女中の役目であった。

お崎はしっかりした気性の三十女で、若松屋へ奉公にあがってから八年になる。

一度、嫁にいったが、どうしたわけか不縁となり、

「もう、人の女房になるのは懲り懲りでございます」

と、お道に洩らしたことがあった。

お崎の叔母が、むかし若松屋へ奉公にあがっていた縁で、

「どうか、お願いを申しますでございます」

その叔母にたのまれ、お道はお崎を引き受けたのである。

その日の午後。

菱屋へ、お光を迎えに行くため、お崎が若松屋を出て間もなく、堀辰蔵の姿が消えた。

もっとも、若松屋の人びとがそれに気づいたのは夕暮れになってからだ。

辰蔵は裏の木戸から、着のみ着のままで、杖を手にふらりと出て行った。

そして、柳原の土手下の店で、莚と菅笠を買った。

そして、歩み出した。

ゆっくり、ゆっくりと辰蔵は歩む。

夏の盛りのことで、今日も朝から暑かったが、風が立っていて心地よい。

辰蔵は、この日に、若松屋のお光が帰って来ることなど知ってはいないし、したがって、お崎が迎えに出たことも知らない。

若松屋の人びとは、ほとんど口をきかぬ堀辰蔵であった。

ただ、この日の朝。

お道が廊下に出ると、辰蔵が庭の掃除をしていて、
「お早うございます。今日も暑くなりそうで……」
めずらしく、辰蔵のほうから声をかけてきた。
「吉蔵さん。精が出ますね」
お道が、そういうのへ、
「何の。ろくなはたらきもできませぬよ」
そのとき、お道は店のほうに急な用事があったので、微笑みながら二度ほどうなずいて見せ、廊下を立ち去ったが、後になって辰蔵の姿が見えないと聞いたとき、何となく、朝の辰蔵の様子が気にかかった。
廊下を立ち去るお道へ、辰蔵は、何かいいたげな面もちだったような気がしたからだ。
それは事実であって、辰蔵は、それとなく、お道へ別れの挨拶をしたかったのである。
しかし、はっきりと挨拶をしてしまうと、引きとめられるやも知れぬ。
(何と、いおうか……?)
おもい迷っているうちに、お道は立ち去ってしまった。
(ま、仕方もないわい)
行くあてもなく歩みつつ、堀辰蔵は胸の内で、
(ありがとうございました。おかげで束の間、人なみの暮しをさせてもらいましたよ)
お道へ、礼をのべている。

辰蔵は、また、死ぬことを考えはじめた。
若松屋にいることが嫌になったのではないが、いつまでも、とどまっていることは避けねばならぬ。
この江戸で、辰蔵は何人もの人を殺している。
たとえ、外へ出なくとも、いつ、どんなことから、以前の血なまぐさい自分の姿が見つけ出され、
(若松屋さんに、迷惑がかかってはならぬ……)
このことであった。
(やはり、物を食わずに歩きつづけて江戸を離れ、どこかの田舎道で行き倒れになって息絶えるのが、いちばんいいようじゃな)
川へ身を投げたり、刃物で自殺するのは、あまり好ましくなかった。
食を絶って死ぬのが、もっとも自然のようにおもわれる。ふところには二分ほどの金を持っているが、これで何か旨いものでも食べ、それから後は断食のまま歩むつもりだ。
(今度は、人に助けられてはならぬ。何処か、人の目につかぬような場所を探そう)
若松屋の内儀に助けられて、いくらかは元気になったが、いまの自分の躰は、何処も彼処も、
「悪いところだらけ……」
のような気がする。
刺客に切りつけられた左腕の傷は深くて、おもうようにうごかぬし、他にも何箇処か傷を受

けていて、季節の変り目などには躰中が痛む。
それぱかりではなく、不気味な目眩がするし、左胸のあたりが圧迫されるように痛むこともある。
若松屋の内儀は、一度、医者に躰を診てもらうようにと、しきりにすすめてくれるが、そんなことをしたら、この傷だらけの躰を人の目にさらすことになる。
また、医者に診せてもむだだし、食を断たなくとも、これから先、それほど長くは生きられそうもない、と辰蔵はおもっていた。
(半次。間もなく、お前のところへ行くぞ。待たせたのう)
胸の内によびかけつつ、堀辰蔵は、いつしか両国橋へさしかかっていた。
橋をわたったところの店で、最後に食べてみたいものがあった。

二

両国橋を東へわたりきった、本所・元町に〔原治〕という蕎麦屋がある。
元禄のころからの古い蕎麦屋だそうで、むかしは、いまの二倍も三倍も大きな店だったという。
かつて、同じ元町の料理茶屋・河半の離れ屋に住み暮していたころ、堀辰蔵は〔原治〕の蕎麦を好み、

「退屈しのぎに……」
よく、やって来たものだ。
ことに、寒いころに出す蒸切そばは、辰蔵の大好物なのだ。
これは、湯でさらしたそばを水で洗い、蒸籠に入れて熱く蒸しあげ、柚子の香りのする汁につけて食べる。
その風味は、越後の城下町で育った辰蔵にとって、
「何ともいえぬ……」
ものであった。
元町の〔河半〕は、すでに代が替っていた。
三井覚兵衛が暗殺されて後、両国の盛り場一帯を縄張りにする香具師の元締は、加納屋甚之助という男の手に移ったらしい。
そのときもまた、血なまぐさい事件が夜の闇の中で何度も起ったにちがいない。
だがそれは、もはや堀辰蔵の関知するところではなかった。
〔河半〕は、三井覚兵衛の死後、一年ほど休業をしたのち、売りに出された。
いまは〔川口屋〕という店名に変り、香具師仲間とは関係がない。
去年の秋に、久しぶりで江戸へもどって来た堀辰蔵は、ぶらりと、このあたりへやって来て、原治でそばを食べたついでに、河半の前を通り、店の名前が変ったことを知っていたが、その後の深い事情は知らぬ。

また、知ろうともおもわぬ。
もしも、むかしの自分を知っていた者がこのあたりにいて、
「殺ってしまえ」
とばかり、飛びかかって来ても一向にかまわぬ。
「よく見つけてくれた」
と、いいたいところだ。
（やつらに、斬られて死ぬるもいい）
関係のない人びとに迷惑をかけぬならば、である。
両国橋をわたりきった堀辰蔵は、橋の東詰の広場を突切り、まっすぐに蕎麦屋の原治へ入って行った。
夕暮れには、少し間がある時刻で客も多くなかった。
辰蔵は笠をぬぎ、ひろい入れ込みの一隅に坐って、
「酒をもらいましょうかな。それと、太打ちをたのむ」
と小女に注文をした。
原治の太打ち、これも遠い元禄のころを偲ばせる、この店の名物であった。
太く打った黒い蕎麦を、箸でちぎるようにして食べる。
辰蔵がなめるようにして酒をのみ、太打ちを口に運ぶうち、稲妻が光った。
いつの間にか、原治の店の中が薄墨をながしたようになっている。

雷鳴が起り、雨が叩きつけてきた。
ちょうど、そのころ、原治からさして遠くはない松坂町の菱屋方では、お光が、迎えに来た女中のお崎と共に帰ろうとしていた。
「あ、これはいけない。もう少し、待つがいいよ」
菱屋のあるじにそういわれて、お光とお崎は、驟雨が通りすぎるのを待つことにした。
「ひゃあ、この夕立にはたまらねえ」
「原治が目の前で、ちょうどよかった」
などと、いいかわしながら、雨を避けて飛び込んで来る客で、原治の入れ込みはたちまちに満員となった。
「へい、ごめんなさいよ」
と、堀辰蔵の前へも、職人らしい男が二人、坐り込み、注文した酒が来ると、
「ま、ひとつ……」
辰蔵の盃へ酌をしてくれた。
「すみませんのう」
と、辰蔵。
目を細めて盃を口へもってゆく辰蔵を、辰蔵に殺された三井覚兵衛が見たら、なんというだろう。
「堀、善人面をして、まだ、生きていたのか」

吐き捨てるように、いうやも知れぬ。
あるいは、
「うらやましい顔つきになったのう」
嘆息を、洩らすやも知れぬ。
雷鳴と雨が、ひとしきり激しくなってから、しだいに遠退きはじめた。
「もう、じきにあがるぜ」
原治の戸障子を開けて、空を仰いだ客が、連れの男にいうのがきこえた。
やがて、雨音が消えた。
夏の夕暮れの光りがさし込んできた。
「では、ごめんを……」
辰蔵は、前の職人たちへ挨拶をして立ちあがった。
「気をつけて行きなせえ」
「はい。ありがとう」
これより先、お光とお崎は、雨があがったので菱屋を出て、帰途についている。
原治を出た、堀辰蔵は、
（さて、どっちへ足を向けたらよいものか……）
ちょっと考えてから、
（そうじゃ、この世の名残りに鎌倉を見物しよう）

こころが決まった。
鎌倉は、源氏に関係の深い土地で、かの源頼朝が幕府をひらいたところである。
辰蔵の耳へもきこえている有名な寺々が美しい山間にあって、名高い八幡宮の社も、
「そりゃあ、大したものでございますぜ」
と、死んだ半次から何度も聞かされていた。
海も近く、その海に浮かぶ江の島には、
「弁天さまを祀ってありますよ。私は、江の島の近くの漁師のせがれでござんす」
半次は、そういった。
（そうじゃ、それがいい。海を見て、寺々をまわって、山の中の、だれにも見つからぬ場所へ、この身を横たえ、飢えて死のう）
何だか、はればれとした気分になってきて、辰蔵は原治の軒下をはなれた。
数年前から、父の敵・加藤甚作のことも、辰蔵の脳裡に浮かんではこなくなっていた。
加藤甚作が生きていれば、六十八になっていることになる。
とても、生きているとは考えられない。
加藤は、堀辰蔵が自分をつけねらい、探しもとめているとおもい、夜も昼も怯えつつ諸国を逃げまわり、何処かで息絶えたにちがいない。
ところで、鎌倉へ行くとなれば、両国橋を西へ渡り返さねばならぬ。
橋のたもとの広場には、夕立が去るのを待っていた人びとが、いそがしそうに行き交ってい

た。

西の空の夕焼けが雨の後だけにあざやかである。

菅笠をかぶり、莚を背負い、杖をついた堀辰蔵は両国橋をわたりはじめた。

そのとき……。

橋上の何処かで、人の叫び声と悲鳴があがった。

橋を渡る人たちが、こちらへ逃げるようにして駆けて来る。

(どうしたのだ?)

辰蔵は足を速め、橋の中程まで来て、

「あ……」

おもわず、笠の中で低く叫んだ。

何と、若松屋のむすめのお光が、垢臭い浪人に抱きすくめられ、悲鳴をあげているではないか。

女中のお崎は、別の浪人二人に蹴倒され、蹲っている。

また、だれかが叫んだ。

とめに入った通りがかりの町人が、もう一人の浪人に大川の中へ投げ込まれたのであった。

無頼の浪人は合わせて四人であった。

「助けてえ……」

お光が、必死に叫んだ。

星の瞬き

一

近年は、江戸市中に、無頼の浪人たちが増えるばかりとなって、幕府も奉行所も頭を悩ましている。

戦国の時代は、二百年も前に終っていて、いかに刀や槍を手にしていても、それだけでは生きて行けぬ。二百年もの間に、取り潰された大名たちの家来の数もおびただしく、それが浪人となって、巷にあふれ出てくる。

堀辰蔵にしてみれば、

(他人事にはおもえぬ……)

と、いってよい。

辰蔵が辿って来た道を振り返ってみても、なまじ両刀を帯している浪人たちの生きる道は、ほとんどない。

いさぎよく武士を捨てて、手に職をおぼえるとか、町人と共にはたらくとか、それができる者は別として、彼らが自暴自棄となり、野良犬と化すのも、あわれといえばあわれなのだ。

このとき、辰蔵より一足先に両国橋を渡りはじめたお光とお崎の向うから、四人の無頼浪人がやって来て、美しいお光を見ると、高笑いをしながら卑猥な言葉をあびせかけた。

気丈なお崎は、お光を庇いつつ、軽蔑の目を浪人たちへ向けながら行きすぎようとした。

「待て、女。その目つきはなんだ？」

怒鳴った浪人が、追いかけて来て、いきなり、お崎を殴りつけた。

四人の浪人は、ひどく酔っていい、夕立の中を傘もささずに歩いて来たらしく、ずぶ濡れとなっていた。

「やい、むすめ。ちょいと来い」

背丈の高い中年の浪人が、逃げようとするお光へ飛びかかって抱きすくめた。

「何をするんですよ」

叫んで、走り寄ろうとしたお崎は、殴られて鼻血をふき出している。

「ええ、うるさい!!」

たちまちに、お崎は蹴倒され、頭や顔を蹴りつけられ、半ば気を失いかけた。

抱きすくめた、お光の胸元へ浪人の手が伸びた。

「かまわぬ。裸に剝いてしまえ」

「よおし」

お光が救いをもとめても、これを助けようとしたのは、川へ投げ込まれた町人ひとりであった。

見物は遠巻きにして、無頼浪人どもの無法な狼藉をながめているのみだ。見物の中に、救いをもとめるため、走って行った者もいたが、たとえ、だれかが駆けつけてくれたとしても、それまでにお光は裸にされてしまうにちがいなかった。

酔いどれの四人の浪人どもは、げらげら笑いながら、お光を嬲りものにしようとしている。ともかくも処女を裸にすることがおもしろいのだ。

堀辰蔵が菅笠をぬぎ、背負った莚を外し捨てて、浪人たちへ歩み寄ったのは、このときである。

「なんだ、老いぼれ」

「そのむすめは、わしの知り合いじゃ。はなしてやってもらいたい」

「何だと!!」

横合いから、浪人のひとりが辰蔵の前へまわり、胸座をつかんだ。

その瞬間、辰蔵の躰がわずかにうごいたかに見えたとき、

「ぎゃあっ……」

辰蔵の胸座から両手をはなし、顔を押えた浪人が、のけぞるようによろめいた。

辰蔵の右手の二本の指が、浪人の鼻すじをすべって二つの眼へずぶりと入ったのである。

「おのれ……」

浪人の一人が大刀を引き抜いたとき、辰蔵は猛然と、まだお光を抱きすくめている浪人へ飛

びかかった。
お光の肩ごしに突き出した辰蔵の拳で鼻を撃たれた浪人が、
「うわ……」
お光を手ばなした。
「あっ、吉蔵さん……」
おどろいて叫ぶお光へ、
「お嬢さん、早くお逃げ」
しわがれた声をかけておいて辰蔵は鼻を撃たれて蹌踉た浪人へ組みついて行った。
その辰蔵の背へ、
「うぬ!!」
別の浪人が斬りつけた。
背中を浅く切られたが、辰蔵は振り向きもせず、組みついた浪人の下へ身を沈めた。
浪人の躰が宙に浮いた。
浮いたかとおもうと、見えなくなった。
橋の欄干を越え、浪人が大川へ投げ込まれたのだ。
「くそ!!」
「老いぼれめが!!」
二人の浪人は血相を変えて、辰蔵へ斬りかかった。

見物の中から、男たちが飛び出して来て、お光と、倒れているお崎を助けて行った。
浪人たちは、もう、お光とお崎に目もくれず、激昂して辰蔵を追いつめている。
「石だ、石を投げろ」
と、だれかが叫んだ。
辰蔵の指で両眼を突き刺された浪人は、苦痛の呻きをあげながら、橋板の上を這いずりまわっている。
「この畜生め!!」
男たちが、この浪人を叩き伏せ、蹴飛ばしはじめた。
「吉蔵さんを……あの、おじいさんを助けて」
見物の中から、お光の声がきこえたが、おそらく堀辰蔵の耳へは入らなかったろう。
橋の上を西詰の方へ浪人たちをさそいこみつつ、
「たあっ!!」
斬りつけて来る刃を躱しざま、辰蔵が、その浪人の股間の急所を蹴りあげた。
同時に辰蔵は、後ろへまわり込んだ別の浪人の一刀を右肩に深く受け、のめるように橋板へ両手をついた。
「う、うう……」
急所を蹴りつけられた浪人は刀を落し、両手を股間にあてがい、白眼を剝き出している。
「うぬ!!」

倒れかかった辰蔵へ、浪人が、また斬りつけた。
橋板に血が飛沫いた。
石塊が飛んで来て、浪人の頭へ当ったのは、このときだ。
ようやくに橋のたもとから、人びとが石塊を拾いあつめてきたのである。
石塊は、一人残った浪人へ八方から襲いかかった。
「あ、あっ……畜生」
浪人は大刀を振りまわし、懸命に逃げようとした。
その鼻柱へ、石塊の一つが命中した。
「むうん……」
浪人は刀を落し、崩れるように倒れ伏した。
「この野郎」
「打ちのめしてやれ!!」
男たちが、いっせいに浪人へ飛びかかった。
両眼を閉じて倒れている堀辰蔵へ、お光とお崎が目の色を変えて走り寄って来た。

二

灯火が明るい。

萩や、芒、桔梗などの花々が莚の上にならべられ、その花を売る人の呼び声の中を、子供の辰蔵が母の手にひかれて歩んでいる。
堀辰蔵の故郷の、越後・新発田城下の花市であった。
陰暦七月十一日の夜から翌朝にかけて、新発田城下の上・中・下の三町の通りへならぶ露店の花市で、近在の農家の女たちが売る花を買い、盆の寺詣りにささげるのであった。
辰蔵が、母に甘えて何かいうと、
「よし、よし」
母が、辰蔵を抱きあげてくれた。
その母の顔が、若松屋の内儀・お道のものになっている。
（あ……）
おどろいて、辰蔵は夢からさめた。
まぎれもなく、お道の顔が辰蔵をのぞき込んでいた。
「ゆ、夢か……」
つぶやいた辰蔵へ、お道が、
「吉蔵さん。口をきいてはいけませんよ」
「なあに……」
ふしぎに、傷の痛みはなかった。
此処は、両国橋にも近い菱屋忠右衛門方の一間だ。

深傷に気を失い、此処へ担ぎ込まれて来て、駆けつけた医者の手当を受けたとき、辰蔵は息を吹き返した。

そして、あまりの激痛に、またしても気を失ってしまい、いま、また気がついたのである。

「凝としていらっしゃいよ。いま、お医者さまを……」

と、お道が腰を浮かしかけるのへ、

「やめて下され」

「え……？」

「むだじゃよ」

「何をいいなさる……」

「お嬢さんは、大丈夫だったろうね？」

「は、はい」

お光は、部屋の一隅で転寝をしている。それが目に入って、辰蔵は微かに笑い、

「よかった……」

「吉蔵さん。どのように、お礼のことばをいってよいのやら……」

気の強いお道の声が、このときばかりは震えている。

先刻まで、駆けつけて来た若松屋長兵衛も、辰蔵の枕もとにいたのだが、夜明けも近くなったので、となりの部屋で、これも転寝をしてい、辰蔵につきそっているのは、お道ひとりであった。

「吉蔵さん。とんだ目にあわせてしまって……」

「此処は？」

「本所の親類のところですよ」

「ふうむ……」

痛まないのが、ふしぎであった。

躰中が宙に浮いているような感じなのだが、そのくせ、辰蔵の意識は妙にはっきりしている。

「お内儀……」

「口を、きいてはいけませんよ。しずかに……しずかにして下さいまし」

「わしは、悪いやつでのう」

「吉蔵さん……」

「わしは……わしはなあ、四十年ほど前には、越後のある大名家に仕えていてのう」

「まあ……さようでしたか」

「父がな、同役の者に殺され、敵討ちの旅へ出た……」

「……」

「国許の母も死んでいたし……親類たちにも、見はなされ、ついに、父の敵にも、めぐり逢えなんだ……」

お道は、息をつめて聞き入っていた。

「それで、わしはな……」

いいさして、辰蔵が、
「み、水を、くれませぬか……」
「水……でも、あの、お医者さまが……」
「のませては、いけぬと、いうた？」
「はい」
「かまわぬ」
「いけませぬ、吉蔵さん」
「いいから、いいから……」
「では……あの、口を濡らすだけにして下さいまし、お願いでございます」
「うむ」
素直に、うなずいた辰蔵だが、お道が茶わんに水を入れ、これを布にひたしているのを見るや、
「お内儀。たのむ」
「え……？」
「一口でよい。水を、のませてくだされ。同じこと……同じことじゃ。のんでものまないでも、わしが、死ぬることに、変りはないのだから……」
お道は、ことわりきれなかった。
医者も先刻、こういっている。

「到底、助かりませぬ。おあきらめ下さるがよい」
堀辰蔵は、お道の手の茶わんの水を一口、二口とのみ、
「うまい……」
感嘆の声をあげるや、ぐったりと両眼を閉じた。
またも意識不明となったらしい。

しばらくして……。
辰蔵へ団扇で風を送りながら、凝と見つめていたお道の唇が、わずかにひらいた。
団扇の手がとまり、その手から団扇が落ちた。
眠っている辰蔵の、生色が失せた辰蔵の頬のあたりが、ぶるぶると痙攣を起しはじめたのである。
おどろいて、お道が、
「お光……お光……」
転寝をしているお光を呼び起した。
「ど、どうしました？」
飛び起きたお光へ、
「様子がおかしい。早く、お医者さまを……」
「はい」

お光が廊下へ走り出て行った。
「旦那様、吉蔵さんの様子が……」
となりの部屋に寝ている長兵衛へ声をかけながら、お道が辰蔵を見やり、
「あ……」
おもわず、低く叫んだ。
辰蔵の顔の痙攣が熄んでいたからであった。
「ど、どうしたね？」
あらわれた若松屋長兵衛が、お道とならんで、辰蔵をのぞき込み、
「いけない」
「え……？」
「息が絶えている……」
まさに、辰蔵は、この世の人ではなくなっていた。
幽冥の世界へ去った辰蔵の顔が、何ともいえぬ平穏の色にみたされてゆくのを、お道は、はっきりと見た。
堀辰蔵は、こうして六十五年の生涯を終えたのであった。
近くに住む医者が駆けつけて来て、辰蔵の死を確認した。
菱屋の人たちも、女中のお崎も、堀辰蔵の遺体を取り囲んだ。
辰蔵の顔は白布に被われた。

「ねえ、お道。吉蔵さんの身寄りは、どこにもないそうな」
「はい」
「それならば、うちの御寺へ、墓をつくりましょう。どうだね？」
「そうしていただければ……」
夫の長兵衛の言葉を、お道は、うれしく聞いた。
先刻、息絶える前に、吉蔵老人が「越後の、ある大名に仕えていた……」と洩らしたけれども、
（むりに探し出すことはない）
と、お道はおもった。
たとえ探し出したところで、引き取る者もあるまい。
お道は、ひとり、廊下へ出た。
雨戸を外すと、空はまだ暗く、あかつきの薄闇の中に、庭の木々や石燈籠が、ほんのりと浮いて見える。
東の空に、遠く、明けの明星が白く光っているのを、お道は見出した。
おもわず、こころをうばわれ、空の彼方へ目を凝らして佇んだとき、星が瞬いた。
わけもなく、お道の両眼から熱いものがふきこぼれてきたのは、このときである。
お道の唇が、わずかにうごいた。
どうしてなのか、自分でもわからぬが、このとき、お道がつぶやいたのは、

「お父(とっ)つぁん……」
という一語であった。

文春文庫

142—31

夜明けの星

定価はカバーに表示してあります

1983年12月25日　第1刷
1988年7月1日　第8刷

著者　池波正太郎
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。
印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714231-7

単行本　昭和55年11月毎日新聞社刊

文春文庫　最新刊

寝台急行「天の川」殺人事件
西村京太郎

殺されたルポライターがワープロで書いた消えゆく寝台列車同乗ルポが、事件を解く鍵に。

恋文のおんなたち
連城三紀彦

エッセイ・対談・小説で見る人気作家のすべて。名作『恋文』に至る過程を初めて明かす（解説・中村凪生）

夏、19歳の肖像
島田荘司

事故で入院中、窓から双眼鏡を覗いていると美しい女性が父親を刺す光景が見えて…（解説・郷原宏）

天使たちの肖像
勝目梓

妻子を捨てて運輸会社の運転手になった男の生きざまを鮮烈に描くニュー・ハードロマン（解説・紀和鏡）

ソロンの鬼っ子たち
小峰元

一通の機密文書が殺人事件を引き起こす。社長交替劇、総裁選の舞台裏で惨劇が…（解説・長井彬）

読むクスリ　PARTII
上前淳一郎

実社会の最前線で働く人々の笑いと涙のエピソード。企業版ちょっといい話の好評第二弾

私記キスカ撤退
阿川弘之

太平洋戦史の奇蹟とされるキスカ島守備隊の無血全員撤収成功、"霧の作戦"の全貌を明かす

憤死
高木俊朗

印緬国境は豪雨と泥濘の地獄と化した。前線の苦闘を座視する軍首脳。インパール戦記第四部

本の枕草紙
井上ひさし

自家製「広辞苑」の作り方、催眠読書法のすすめ、歩く書斎など、書物をめぐる珍説奇想集

時の流れに〈噺歌集III〉
さだまさし

デビュー十周年を記念して各地で開かれた七日間ブッ通しコンサートのエッセンスをこの一冊に

血のついたエッグ・コージイ
J・アンダースン
宇野利泰訳

英国貴族の田舎屋敷のパーティで謎の殺人が。招待客の全員が容疑者という本格推理の名作

サンフランシスコがいちばん美しいとき
丸元淑生編

カリフォルニア三千マイル縦断。霧、坂、光…黄金の大地をペンとカメラが捉えた。現地完全取材版